

博士（人間科学）学位論文

エリートジュニアサッカー選手の心理特性
- アスリートの感性研究へのアプローチ -

Psychological Character of Elite Junior Soccer Players
An Experimental Study on Kansei of Athletes

2003年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

志岐 幸子

Yukiko , Shiki

研究指導教員： 加藤 清忠 教授

目次

第1章 研究の背景と目的	5
1. スポーツ界の社会的役割と人間性	5
2. 「感性」の意味と「感性」研究の背景	8
3. スポーツと「感性」との関連性	12
4. 本研究の意義と目的	15
5. 補足資料	20
第2章 小学生におけるサッカー少年と一般児童の心理的要因の比較	38
1. 目的	38
2. 方法	39
2.1. 調査対象	
2.2. 調査方法ならびに内容	
3. 分析方法	44
3.1. 日常面における心理的要因の因子分析	
3.2. グループ間の相違	
4. 結果	45
4.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果	
4.2. 各因子の尺度得点によるグループ間比較	
4.3. 各項目のグループ間比較	
5. 考察	53
5.1. 小学校高学年児童の日常面における心理的要因の特性	
5.2. サッカー少年と一般の小学生における特徴の相違	
5.2.1. 表現・直感・自己中心性に関する内容	
5.2.2. 家庭・学校・チームの環境や人間関係に関する内容	
5.2.3. 感受性・自然に関する内容	
5.3. ハイレベルの競技スポーツと日常面における心理的要因の関係	
6. 本章のまとめ	58

第3章 Jリーグ・ジュニア チーム所属の小学生サッカー選手の心理的要因について	60
1. 目的	60
2. 方法	61
2.1. 調査対象	
2.2. 調査方法ならびに内容	
2.2.1. 日常面における心理的要因の項目	
2.2.2. 競技面における行動様式の項目	
3. 分析方法	66
4. 結果	66
4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析結果	
4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果	
4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果	
4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
5. 考察	77
5.1. 日常面における心理的要因	
5.2. 競技面における行動様式	
5.3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
6. 本章のまとめ	82
第4章 Jリーグ・ジュニアユース チーム所属の中学生サッカー選手の心理的要因について	84
1. 目的	84
2. 方法	84
2.1. 調査対象	
2.2. 調査方法ならびに内容	
3. 分析方法	85
4. 結果	85
4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析結果	
4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果	
4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果	

4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
5. 考察	96
5.1. 日常面における心理的要因	
5.2. 競技面における行動様式	
5.3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
6. 本章のまとめ	101
第5章 Jリーグ・ユース チーム所属の高校生サッカー選手の心理的要因 について	103
1. 目的	103
2. 方法	103
2.1. 調査対象	
2.2. 調査方法ならびに内容	
3. 分析方法	104
4. 結果	104
4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の 因子分析結果	
4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果	
4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果	
4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
5. 考察	116
5.1. 日常面における心理的要因	
5.2. 競技面における行動様式	
5.3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
6. 本章のまとめ	123
第6章 Jリーグ下部組織所属の小・中・高校生サッカー選手における 心理的要因の年代別比較	125
1. 目的	125
2. 方法	125
2.1. 調査対象	
2.2. 調査方法ならびに内容	

3. 分析方法	126
3.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析	
3.2. グループ間の相違	
4. 結果	127
4.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果	
4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果	
4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果	
4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性	
4.3. 尺度得点によるグループ間比較	
4.4. 各項目のグループ間比較	
4.5. 因子得点によるグループ間比較	
5. 考察	153
6. 本章のまとめ	159
第7章 本研究の総合考察と結論	161
1. エリートジュニアサッカー選手の日常面における心理的要因と 競技面における行動様式の変遷と関連性について	161
2. エリートジュニアサッカー選手の感性と環境要因について	164
3. スポーツの存在意義とスポーツ選手の社会的役割	167
4. 結論	169
参考文献	170

第1章 研究の背景と目的

1. スポーツ界の社会的役割と人間性

トップアスリートのベストパフォーマンスは多くの人々に感動をもたらし、人々の心の活性化を可能にし、その心身に良い影響を与えることがある。選手達が素晴らしい記録や結果を誕生させる瞬間、それを観戦している人は興奮したり驚嘆したりするものである。このように、人の心身やときには社会全体にも多大な影響を与える力は記録や勝利といった数値や結果そのものではなく、スタジアムで直接的に、あるいはメディア等を通して世の中に間接的に伝えられる選手達の競技パフォーマンスや、それについて選手達が語る表情や言葉、印象、立ち居振舞い、といったものから、自然に発信されるものと思われる(志岐, 1996・1999)。しかし、選手達が社会に向けて発信し、与えている影響は、様々な性質を持っていて一様ではなく、必ずしも人々の心身に好影響を与えているばかりとは限らない。さらに、所属しているチーム等の団体や周辺の間人環境のみならず、幼少期における家族や指導者、自然との関わりなど、様々な要因が選手の感性に影響を与えている可能性もあり、それとの関連も考慮に入れなければならない(志岐ら, 2000)。トップレベルの選手としてその競技を代表する立場になり、名声や多額の金銭を獲得し、果たすべき社会的役割や責任が増してから、周囲の環境の変化に対応できずに人間性を損なうケースも見られるが、そのときの間人環境のみならず、幼少期の生活環境にその遠因がある可能性が考えられる。

スポーツ選手が競技を行う目的は様々である。自らの記録や勝利、心・技・体の向上を追求する、といった利己的なものもあれば、ベストパフォーマンスの遂行を通じて、人の心を動かすことや、社会に貢献する、といった利他的なもの、また両方を兼ね備えている場合もある。トップアスリートは、スポーツ界での役割のみならず、その言動や生き方までもが社会的に注目され、子供の憧れの対象になるなど、大きな社会的役割を担っている。スポーツ選手は、競

技成績が社会的に評価を受ける一つの指標とされるが、それがそのまま人間的評価には繋がるかどうかは問題である。スポーツ界では、「競技成績と人間性は関係ない」という言葉がよく聞かれる。しかし、トップアスリートがベストパフォーマンスを遂行する際に目指すところは、いわゆる「無我の境地」(Murphy & White, 1978; 志岐・福林, 2001)とされている。この境地にあるとき、トップアスリートは周囲との調和や一体感、といったものを感じている。こうしたときがスポーツにおける一種の感性の発揮とも考えられる。トップアスリートの感性は、一人の人間として豊かな人生を送るために必要な感性と全く関連のないものとは思えない(志岐ら, 1999・2000)。

また、スポーツは元来教育的な要素を備えているものであり、半世紀ほど前には Martin とカンドウ(金山, 1952)が提唱したように、「スポーツは相互扶助と団体精神の奨励であり、愛他的感情を哺育し、次第に人をしていわゆる『寛大』と呼ばれる道徳の最高峰に導くもの」として社会における道徳的な役割を担っていた。しかし、スポーツ選手や元選手の不祥事や犯罪もあり(古在ら, 1974)、競技スポーツに没頭するあまり、人間性を損なうケースも見られる。こうしたことの背景に、子ども時代からスポーツをやり過ぎることの弊害も指摘されており(山本, 1988; 石山, 1995)、競技志向や勝利至上主義によって、モラルの発達や人格形成を妨げるような弊害をもたらす可能性が指摘されている(Ogilvie & Tutko, 1985; Bredemeier et al., 1986)。しかし、人間形成に支障が見られる例は、スポーツ界に限られたことではない。

現在の社会では、少年犯罪の多発や凶悪化、麻薬汚染や虐待の深刻化、さらにクローン技術や IT の進行による人間性の欠如への不安が増大するに伴い、心の教育や心のケアの重要性、人間性の回復が各方面より叫ばれている(古畑, 1997; 萩原, 2000)。科学技術の発達による人間性の疎外は以前から言われてきたが、昨今は、知識偏重やメディアによる子どもへの悪影響も指摘されている(柴田, 2001)。このようなことは、「非言語的な合図を正しく送ったり、受け取ったりする能力」(Knapp, 1980)や「変わりやすい社会に対応するために必

要な知識をもたらす役割を果たす感受性の訓練」(Back , 1972) 「心の成長を支える直感と理性の発展」(Salk & Anshen , 1982) また、俗に EQ(Emotional Quantity 心の知能指数) (Goleman , 1995) と呼ばれるものなどの停滞によって起きているとも思われる。逆に言えば、美しいものを素直に美しいと感じ、表現したりするような素直さ、他者の状況を自分のことのように感じられる共感性などといったものであり、利己的な部分を超えて全体への配慮ができるような感性的要素の不足が、子供の間人形成に支障をきたす一因となる可能性があると考えられる(志岐・相馬 , 2001)。

このような社会背景の中で、「感性教育」と名付けられた活動が特定の小中学校において行われたり、小学校の授業に体験学習を主とした生活科が導入されたりするなど、五感をフルに活用した学習への期待も寄せられている(遠藤ら , 1997)。片岡(1997) は、「感性」という言葉を教育に導いた背景は、細分化され能率よく知識を習得させる現状の教育への反省であると述べている。また、宮脇(1988) は、感性から分離した知性を考えること自体が誤りであり、芸術を通しての教育の中核として、「人間のあらゆるレベルで無意識を意識化させ、さらにまた無意識へと振り戻すこと」を挙げ、小さな人間関係から大きな社会的組織の関係のようなどころまで、社会のあらゆるところで働く感性の必要性を指摘している。

20 世紀は、ある面では、科学技術や IQ の向上とその弊害が表面化した時代であり、また自然や人間性を守ることの重要性を再認識した時代だったと言えるだろう。これに対して、21 世紀はさらに一歩進んで、人間的な感性に目を向ける時代に入ったと言える。こうした背景を踏まえて、スポーツ界の果たすべき重要な役割の一つに、スポーツ界における IQ ともいえるべき競技成績や勝利、技術の追求だけではなく、競技パフォーマンスの体感に訴える素晴らしさやスポーツを通じての人間的な感性の発揮、さらには選手が幼少期から感性をフルに働かせるための心理的要因の育成とそのための環境作りが急務であると思われる。

2. 「感性」の意味と「感性」研究の背景

現在、われわれが用いている「感性」という言葉について見てみると、その語源は、古くは Aristoteles の「アイステーシス」(aisthesis、感性・感覚を意味する古代ギリシャ語)であり、同じく「Ethos」と近似した意味を持っていると考えられている(五十嵐, 2000)。Baumgarten(1986)は、初めて「感性的認識」という言葉、ラテン語の *aesthetica* を用いて「美学は感性的認識の学である」(*Aesthetica est scientia cognitionis sensitivae*)と定義した(山田, 1988)。Baumgartenは、美を調和した表現を持つ感性的認識の完全性として規定し、1750年に自然美と芸術美に関する学問として「感性学」(*aesthetica*)と名付けた(Baumgarten, 1986)。また、フェーヴル(大久保・坂口, 1997)は、「感性」という言葉を14世紀初頭から確認されるフランス語の *sensibilité* と捉え、17世紀には真や善といった倫理的領域の印象に対する人間の感じやすさ、18世紀には憐れみ、悲しみ等の人間的感情に関わるものであったとしている。西欧ではこうした流れがあるものの、日本では、*aesthetica* は「美学」と訳された(吉田, 1998)。

一方、Lee と原田(2000)は、漢字の語源から、「感性」を *sensitivity*、*sense*、*sensibility*、*feeling*、*aesthetics*、*emotion*、*intuition* などといった様々な意味を含むとしている。また、桑子(2001)は、日本語の「感性」という言葉は、明治期にドイツ語の「*Sinnlichkeit*」の翻訳語として作り出され、漢字の「感」と「性」の意味から宇宙全体を構成する陰と陽の二つの性質の気が感応し、交感することで能力を発揮するものと捉えている。五十嵐(2000)は、「*Sinnlichkeit*」の「*Sinn*」には「感覚、官能、感管、意識、気、知覚、自覚、感性、勘、センス、素質、才能、趣味、性格、嗜好、思慮、分別、考え、知力、理性、判断力、心、意志、真意、精神」という意味があることを指摘しているが、こうしたことから、「感性」は才能や素質といった先天的な側面だけでなく、人間の嗜好や思慮分別を決定づける後天的な側面を持ち、様々な環境の中で他との交感を重ねることで力を発揮しながら磨かれるものと思われる。

現代の日本語辞書等では、「感性」という言葉は「心に深く感じること。感覚

的刺激や印象を受容したり、経験を伴う刺激に反応する能力。直観の能力。意志や知性と区別された、感覚的衝動、欲求、感情、情緒を含んだ心の能力」(尚学図書, 1982)、「外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性。感覚によって呼び起こされ、それに支配される体験内容で感覚に伴う感情や衝動、欲望をも含む。理性・意志によって制御すべき感覚的欲望。思惟の素材となる感覚的認識」(新村, 1991)などとされており、いずれも内面における感受性や、感受性によって受け取った刺激に対する反応を引き起こす力と捉えている。

一般的には、「感性」はどのように捉えられているのかを探るため、志岐と相馬は、「感性」の定義について、様々な分野で活動する人々231名を対象に「感性」の捉え方のインタビュー調査を行った。その結果、全部で487件が認められ(補足資料1参照)、各々の共通点を探ったところ、(1)感受性、(2)直感、(3)素直さ、(4)誠実さ、(5)共感性、(6)一体感、(7)想像、(8)冷静な判断、(9)利己性・自己中心性に関わるもの、(10)表現、(11)共感的行動、(12)調和的姿勢、(13)素直な行動、(14)誠実な行動、(15)利己的姿勢・自己中心的行動に関わるもの、(16)内面からの発信、(17)情報の受け取りから発信までの一連の過程、(18)人間関係(家族関係・学校生活・地域での人間関係)(19)自然への関心や接触、(20)温かい環境、(21)環境要因、(22)天性、(23)性質、(24)心、(25)美学、(26)拡大性、(27)非論理性、といった27のグループに大きく分けられた。さらに、これらは次の4つにまとめられる。すなわち、(1)～(9)は情報の受け取りから処理までの心理的要因、(10)～(17)は情報の発信・伝達までの心理的要因、(18)～(21)は人間環境や環境要因、(22)～(27)は性質に関わるものである。補足資料1により、「感性」は、一般的に、先天的な側面を持っているが、環境や人間関係に影響される後天的な側面もあり、周囲との調和一体感を実現させるような内面に関わる美的な性質を持つものであり、情報の受け取りや発信に関わっている、心理的なものと捉えられる。

感性の研究は、最近は、あらゆる分野において活発に取り組みられている。原田（1998）は、様々な分野の研究者を対象に「感性」の定義について調査を実施し、キーワードを抽出してグルーピングを行っている。その結果、「感性」を主観的で説明不可能なイメージを創造する心のはたらき、直感的に反応する能力、先天的な性質と知識や経験による認知的表現、などといった言葉で定義している。また、意識と無意識、能動的感性と受動的感性、瞬間的判断、スポーツにおける感動性や芸術性、といった感性の様々な側面を挙げている（原田，2000）。蓮見（1998）は、困ったときに都合の良い情報が予期せず飛び込んでくるような直感的なひらめきを感性の特徴的なパターンと考えており、人間が無意識下の情報収集・検索を行うことや、個々に獲得されてはいたものの收拾ができていなかった情報を一つに統合するような力を持っていると考えている。したがって、感性は無意識的な働きをするもので、受動的感性にあたる感受性が無意識下のネットワークに存在する情報を受け取るアンテナとして機能しており、そのアンテナが敏感に働くことで瞬間的判断が行えるような情報を手にすることが可能になると推測される。また、松嶋（2000）は、感覚器官を通して受容した対象の印象について善や美などの評価的判断を行う過程を「感性」と考えている。こうしたことから、「感性」は、五感の複数の感覚器官によって融合された情報について瞬間的直感的判断を行い（五十嵐ら，1999）、伝えるような共感覚現象（鄭・原田，1999）を起こす、いわゆる第六感的な働きをする内面の感覚器官と捉えることもできる。「感性」の仕組みとしては、感受性というアンテナによって無意識下の情報を受信し、瞬間的直感的に情報を取捨選択して判断し、具象化して外界に働きかけるような情報の一連の処理を行うと捉えられる（加藤，2000；小林，1990）。

さらに、片岡（1997）のいう主体的に物事の価値や質に気づいて感じとる感応力や、遠藤（1997）のいう命の貴重さ、愛情、人情といった心的な価値を判断し感じられる力も「感性」とされているが、「感性」は論理的思考によるものではなく、直感と直観による本質的理解を可能にすることから、審美的意識（島

村,1989)を働かせる審美的感官(The aesthetic sense per excellence)(大西,1989)という捉え方もできる。

一方、「感性」は、心の深い領域でのコミュニケーションを育むような人間の根幹にかかわるものであり(山木,1993)例えば絵画の持つ情報を鑑賞者がキャッチするといった、鑑賞者と作家の人格との交感のような「芸術的交感」に代表されるような自己と他との交感をする美的体験を可能にするものと思われる(桑子,2001)。こうした体験はすなわち愛を求めることを意味し、それによって人間は魂を成長させると考えられている(竹内,1988)。「感性」を心のエネルギーとする捉え方もあるが(遠藤,1997)先に述べた「感性」の語源を含めて考えると、心の深い領域において愛を求めることで成り立つ他との交感が心のエネルギーを発揮させる。それによって人間は内面性を高め、純化し、例えば演劇における「役との一体感」(望月,1985)やスポーツにおける観客との一体感のような「対象との一体化」(行徳,1987)を可能にすると思われる。このように、「感性」は、他との交感を可能にし、それが調和と愛を生むことになり(井村,1988)ときには苦痛を和らげたり、感動や幸福感、満足感、希望をもたらすと思われる(宇井,1988)。「感性」の持つこうした特徴や、知性や理性と共通する側面を持っていることが(山木,1993)共感能力の発達や(岡崎,1998)浜下(2001)が指摘しているような倫理的な問題に積極的機能を発揮することに貢献すると思われる。したがって、「感性」は人間性を高めていく道德性であり(河野,1988;岩城,2001)人間性と深く関わっているといえる。

以上のことから、「感性」とは、内外界の情報を直感的、瞬間的、無意識的に感じ取る力や、感じ取った情報を取捨選択したり、場合によっては五感で認識できる形を通して、自ら情報を発信するような働きを持つと思われる。また、心の深い領域において他と交感を行うことにより心のエネルギーを発揮して人間性を高めていく道德性であり、調和、一体感をもたらす愛を生み、人間の苦痛を癒し、感動や幸福感、満足感を与える力を持った、いわゆる内面の感覚器官と捉えられる(志岐・加藤,2002)。

このように、哲学、美学、芸術、工学、心理学、教育、文学など、各専門分野から「感性」へのアプローチを試みてはいるものの、スポーツという分野からの感性へのアプローチは見当たらない。また、感性を定義している研究や、各分野における理論を展開することで感性を論じた研究は存在するものの、各分野における感性が一人の人間としての感性の豊かさとのように関連しているのか、といった研究はなされていない。しかし、スポーツは直感的、瞬間的、無意識的な情報処理や心のエネルギーが欠かせない分野である。また、志岐・福林（2001）によるトップアスリートへのインタビュー調査では、トップアスリートは感性を最大限発揮するために、日常生活においても感性を磨くことを常に心がけていた。そこで、本研究においては、スポーツという分野に注目すると共に、スポーツの場面だけでなく、日常生活における感性についても探ることとした。

3．スポーツと「感性」との関連性

スポーツにおいては、動作様式の基礎学習は一般に知覚 - 模倣 - 様式化という段階を経て行われるとされているが、次の段階の動作を洗練する過程では円滑な効率の良い調整能力が重要であり、さらに高い動作の考案は創造の過程であるとも言われている（松井ら，1989）。美術解剖学者の西田（1992）は、昔から日常的に言われている「音感痴呆」（音痴）からの類推において、生来の適性のなさはいろいろな分野においても見られ、いわゆる運動神経のなさを「運動感覚痴呆」（動痴）と称して、舞踊や運動に見られる美的効果との関連において述べている。これは、運動学習における最初の2段階の未発達に原因があるものと推測される。このような場合を除いて、運動やスポーツ、芸術、研究等においても高いレベルの発展に感性的要因が深く関わってくるように思われる。

スポーツにおいて、「感性」は一般にどのように捉えられているのかを探るため、志岐と福林は、様々な競技で活躍するトップアスリート44名を対象として、各々の競技における「感性」に関連すると思われる競技場面に関してインタビ

ユー調査を行った。その結果、全部で 1046 件が認められ（補足資料 2 参照）各々の共通点を探ったところ、（1）成功・競技・応援に対する感受性、（2）予感、（3）状況把握、（4）予測、（5）周囲に対する素直さ、（6）洞察、（7）状況判断、（8）冷静さ、（9）集中力、（10）チームメイトとの一体感、（11）競技での自己中心性の欠如、（12）競技での利己性の欠如・利他性、（13）直感的反応、（14）冷静な反応、（15）独創的なプレー、（16）意思の表現されたプレー、（17）調和的姿勢、（18）チームワーク、（19）自己中心的行動の欠如、（20）内面からの発信（内面から発する気や力などに関わるもの）、（21）情報の受け取りから発信までの一連の過程、（22）家族関係、（23）チームメイトとの関係、（24）指導者との関係、（25）リラックスできる環境、（26）競技との接触や関心、（27）競技以外の刺激（気分転換の遊び・習い事・他のスポーツ活動等）（28）環境・人間関係、（29）天性（先天的なもの）、（30）個性、（31）バランスの良さ、（32）非論理性、といった 32 のグループに大きく分けられた。これらは、さらに次の 4 つにまとめられる。（1）～（12）は 情報の受け取りからまでの心理的要因、（13）～（21）は 情報の発信・伝達までの心理的要因、（22）～（28）は 人間環境や環境要因、（29）～（32）は 性質に関わるものである。補足資料 2 により、競技における「感性」とは、先天的な側面を持っているが、家庭やチームなどの周囲の環境や人間関係に影響される後天的な側面もあると見られた。また、周囲の状況に対する鋭敏な感覚により様々な情報を収集し、周囲との調和一体感を実現させ、身体表現によって自らの内面からの情報を発信することに関わっているものと推測された。

また、スポーツにおける感性的要因の具体例としては、競技において状況を把握し、判断するような状況判断力、ゲーム展開の先を予測したりする予知能力、相手選手の心理を読むような洞察力、チームメイトとの協調性や一体感、観客との一体感、勝負勘、心身の調和、といったものが考えられる（古市, 1990）。Meinel（金子, 1998）は、動きの調和、リズム、美しさ、優雅さ、エレガントさといったものをスポーツにおける感性学的側面と捉え、「純粋な感性的体験や

感覚が、人間を豊かなものにし、人間の心をゆさぶり、感動させ、何らかの意味で変化させ、変容させ、教育することになる」としていることから、スポーツにおける感性が、人間の心を感動させ、人間性を成長させるものであることが推測される。

スポーツ心理学者の Loehr (1987) は、Cooper (1998) による「zone」と呼ばれる最高の精神状態にあるときのスポーツ選手の共通要素として、「肉体的なリラックス、落ち着き、意欲、楽観的な態度、楽しさ、無理のない努力、自然なプレー、精神集中」などを挙げ、選手達は「体中にエネルギーがあふれていた」、「エネルギーが流れ出した」、「気が引き締まった」といった言葉で表現し、スポーツにおいてベストパフォーマンスを遂行するためには様々な要因が必要であることを指摘している。

補足資料 3 は、志岐ら (2001) が実施した、世界もしくは国内のトップクラスの様々な競技の成人のトップアスリート 41 名を対象とした、ベストパフォーマンスを遂行している際の通常とは異なる不思議な体験についての調査結果である。これによると、各競技のトップアスリートがベストパフォーマンスを遂行している際に会得している体験の特徴は、「感覚情報、ポジティブな感覚、無意識、一体化・融合、時空の超越、自然な流れ、気、体外離脱・他の力」の 8 つに大きく分けられた。こうした特徴の中で、例えばバレーボールの五輪メダリストは「ボールと対話をし、融合・統合していた」と語り、陸上短距離のチャンピオンは「一本一本の筋繊維との対話をし、自分が走るコースだけが異次元的に感じられた」と述べ、3 度の MVP を獲得したプロ野球のピッチャーは「ボールを投げる自分の手からキャッチャーミットまでの投げるべき軌跡が白い空洞のように見えた」ことを指摘している。また、カヌーや競泳の五輪代表選手達は、「自分自身が自然の中に融け込んでしまっていた」、「まるで魚になったかのような水との一体感があった」ことを挙げている。プロ野球で打撃の神様と言われた川上哲治氏は「体とバットが一体になり、ボールが来ると自分では意識しないのにバットが出るようになった」とき「ボールが止ま

って見えた」という、打撃開眼をしたときの「これだ」という感覚を「勘」と捉えていた（増山，1989）。この状況について、増山（1989）は、「経験が感覚に一層の磨きをかけた」例として紹介しながら、このような状況を可能にしたものを感性の一部と考えているようだ。このような点も考慮すると、前述したようなトップアスリートの体験は、感性の働きとの関連も大きいのではないかと考えられる。このようなとき、選手達は必ずベストパフォーマンスを遂行し、ベスト記録や勝利を手にしたというが、志岐ら（2001）が行ったインタビュー調査の結果により、一部の選手は、こうした状態を無意識的に可能にするものを各競技における「感性」と表現していた。志岐ら（2001）は先行研究において、こうしたときに選手達が最大限発揮している力、「ベストパフォーマンスの遂行に必要な情報を無意識的に受け取り、判断し、発信する過程」をスポーツにおける感性の力と一応の定義をした。Murphy と White(1978)や Inglis(笠原，1994)も酷似した事例を挙げ、このようなとき選手達はトランス状態にあることを指摘している。

4. 本研究の意義と目的

「感性」は、受動的な側面のみならず、能動的な側面を備えていると考えられることから、自らが情報を受けて何らかの影響を受けるだけでなく、自らも様々な形で他の対象に発信することによって何らかの影響を及ぼすものと捉えられる。つまり、人間は感性の力を発揮して「交感」をすることで互いに影響を及ぼし合うと考えられる。「交感」は、言語を通したものもあり、言語の力もかなり考えられるが、今回はスポーツの場面で考えると、例えば、選手同士、選手と観客、さらには前述したような選手と自然の間などでなされるものである。したがって、トップアスリートが競技パフォーマンスや彼らの全体的な印象、言動といったものを通して社会に影響を与えているのは、「感性」によって発信されている情報とも考えられる。

前述したように、「感性」は人間性の育成にとって重要な働きをするものと

捉えられるが、感受性という内面の受信アンテナによって情報を受け取り、その情報に対して反応を引き起こす働きを備えているため、様々な心理的要因を形成することに係わっていると思われる。したがって、人間性の回復や人間形成について考える際に、これまで述べてきたような「感性」に関連した様々な心理的要因の育成を抜きにして語ることはできない。また、競技面においてはスポーツにおける感性に関連した様々な心理的要因と学習、その他の育成がポイントになる。

これまで、スポーツ選手の競技力と競技面での心理的要因の関係については、様々な研究がなされてきた。例えば、優れた選手の特徴として、松田（1969）は感情の動揺が少なく、自信、適応感、情緒的安定性、社会的であるといった特徴を、円田ら（2000）は競技意欲の忍耐力、協調性、自己実現力といった点が劣った選手よりも優れていることを報告し、競技力によって違いがあることが明らかになっている。スポーツ経験と日常生活の心理的要因との関係についても、小学生時代にスポーツクラブに所属していた人は、所属していなかった人より生活意欲や精神の安定、集中力、自信、積極性、決断力、判断力の点で優れているという報告がある（徳永ら、1995）。また、藤生ら（2000）は、バレーボール・ラグビー・陸上選手を対象に、競技レベルと、思いやりや社会性、自己コントロールなどのEI（EQ）の関係についての研究を行い、EIは全体的にバレーボール選手が高くラグビー選手が低いこと、競技レベルの高い陸上選手が思いやりや社会性の点で低いことを報告し、各々の競技特性や、競技によってはレベルの高い選手の方が、共感性や社会性といった心理的要因に問題があることを指摘している。Morris（2000）は、サッカーにおける競技パフォーマンスと心理的特徴に関する多数の研究を紹介しているが、いずれも競技を中心とした研究である。児童期については、徳永（1981）がスポーツ経験を持つ児童の特徴として積極性や社会的適応を挙げており、丹羽ら（1990）も、スポーツ参加児童の社会的適応性が高いことを報告している。

このように、選手の競技力とパーソナリティの関係、地域等のスポーツ少年

団に所属する子どもの心理面等についてはいくつかの研究で指摘がされるなど、スポーツの経験と日常生活での心理的要因には関連がある可能性が示唆され、ハイレベルの競技スポーツを行う場面で発揮される感性もまた、一人の人間として豊かな生活を送ることと関連している可能性がある。競技成績と人間性の関係は今後研究されるべき問題である。

しかしながら、児童期から日本代表選手を目指し、世界大会にも出場するような競技スポーツに取り組むエリート選手の競技面における心理的要因が、日常生活における選手の心理的要因とどのように関わっているのか、といった点についての研究は、これまで殆んど行われていない。また、競技成績に直結するイメージトレーニング方法の開発や競技面での精神面のコントロール方法、といったような、競技面のみにおける心理面の研究や対策は多数なされているものの（Best, 1999）、高い競技力と人間性に関わる心理的要因との関わりについて、統計的に調査を行った研究は見当たらない。以上のことを考慮すると、競技力につながる競技面における心理的要因と、競技以外の日常面における人間性に関わる心理的要因の関連について調べることは、高い競技力と人間的評価の両方を兼ね備えた選手を育成する際に重要であると考えられる。しかしながら、これまで検討されてきた心理的要因は必ずしもスポーツ選手の磨いてゆくべき特性を全部カバーしているとは思えない。ゆえに、不足している部分を補うことが必要である。

一般に、感性を磨くためには、ジュニア期の家庭環境や教育が重要であるとされている（小島, 1991; 土井, 2000）。また、前述したようなトップアスリーのスポーツ界における立場や社会的な役割を踏まえた上で育成すべき感性について考える際に、ジュニア期の高い競技力を持つエリート選手の状況を年代を追って把握することが必要と考えられる。特に、ジュニア期において、スポーツに、遊びとしてではなく、競技として本格的に取り組み始め、しかも家庭と競技を行う現場が交流している小学校高学年以降の子供に注目すると共に、高い競技力を持つエリート選手の感性に関わる心理的要因の特徴を把握するこ

とが重要と思われる。

小学校高学年以降の高い競技力を持つエリート選手の代表例としては、競技人口の最も多いサッカー競技を行っている、Jリーグ傘下のジュニア・ユース、ユース・チームに所属するサッカー少年が妥当と思われる。サッカー競技は、個人競技と異なり、闘う相手選手のみならず、競技中に選手間のスピーディーな相互コミュニケーションが要求され、心理的要因が働く場面が多い競技である。また、サッカーは、ジュニアからプロまでの育成制度がJリーグ全体で整備されており、日本でのワールドカップ開催を期に青少年に最も人気がある。Jリーグ傘下のジュニア・ユース、ユース・チームに所属するサッカー少年は、入団の際に選抜テストを課せられており、サッカーの技能だけでなく、技能テストの中で積極性や攻撃性といった心理的要因を備えているかどうかも同時に見られている。そのため、このような心理的要因は元々備えており、これらを備えていなければ「エリート選手」にはなれない、ということもできる。したがって、競技パフォーマンスに表れるような積極性・攻撃性などの特徴は元々備えていたというスタンスに立って、「情報を受け、競技パフォーマンスとしての情報の発信を行う過程」を中心に「感性」を考えたい。

まず、第2章においては、小学生のエリートサッカー選手と一般の子供について、各々の感性に関わるとと思われる心理的要因を比較し、その相違を検討した。第3章においては、今後、五輪やワールドカップといった日本の代表選手になる可能性を持つ小学校高学年のエリート選手の心理的要因の特徴を把握し、感性に関わるとと思われる日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性を調べ、さらにその心理的要因に影響を与える社会環境について把握すべく、家族や友人、チームメイト、指導者を中心とした周囲の人間や選手を取り巻く環境との関わりを探ることにより、感性の力を発揮するための指針を考えることにした。第4章、第5章では、第3章に習い、中学生選手、高校生選手の感性に関わるとと思われる日常面における心理的要因と競技面における行動様式について調査を実施し、第3章と同様の手法を用いて検討した。第6章

においては小中高校生選手について、感性に関わると思われる日常面における心理的要因と競技面における行動様式を比較し、その相違を検討した。さらに、これらの結果について、第 7 章において本研究の総合的考察を行い、第 8 章をまとめとした。

以上のことを通して、本研究においては、Jリーグ傘下に所属する高い競技力を備えたエリートサッカー選手のジュニア期における日常面における心理的要因と競技面における行動様式を把握し、その両面の関連性と、年代における変化について明らかにすると共に、一般の子供とサッカー少年の心理的要因の相違を述べる。さらに、彼らの心理特性の結果から、それらが「感性」とどのように関連しているかを考察する。

補足資料1・2・3について

著者は、「感性」に関連すると思われる心理的要因を分析するために、様々な分野や様々な競技、トップアスリートのベストパフォーマンス遂行時における具体的事象と特徴についてインタビューもしくは記述による調査を実施した。これらの調査結果が以下の資料である。

補足資料1

調査対象：様々な分野で活動を行っている成人231名

調査期間：1997～1999年

補足資料2

調査対象：様々な競技で活躍している成人のトップアスリート44名

調査期間：1997～2001年

補足資料3

調査対象：様々な競技で活躍している成人のトップアスリート41名

調査期間：1997～2001年

補足資料1 様々な分野における感性の捉え方

様々な分野における感性の捉え方	件数
情報の受け取りから処理までの心理的要因	212
(1)感受性	97
(感受性)	91
感受性	12
(情報を受け取る)アンテナ	5
物事に対して、どう感じ 捉え、動くか、どう受け取るか、といった受け方	1
いろんなことに対する姿勢	1
繊細さ	2
敏感さ	3
好奇心	2
冒険心	1
研究心	1
自分の周りにある空気やものから吸収するもの	2
(素直に)感動できる心	4
感じる事・感じる心・感じる力・感じ方 物事に対して人が何かを感じる方法・物事を感じ取る心のあり方 ある限られた情報を自分の持つ知識・経験・習慣に基づき、感じる事 思うこと	23
感じ合う心	1
人の考えや心理を読み、察すること 相手の心 (気持ち、想い)を感じとることができる力・相手から伝わって くるものを感じることができる	10
周囲の雰囲気を読み取ること	1
周りをよく見ることができる	1
視野の広さ	2
いろんなものを吸収できる	1
ある事柄に対する(人によって異なった)感じ方の度合い	1
物事に対して気づく心、気づき	3
美しいものを素直に美しいと感じられる心	2
神、祖先が良い方向で守ってくれていると感じること	1
疑問を感じる事	2
感性を感じる事ができる	1
マニュアル以外のところに気づけること	1
個人的な、私的な物の感じ方・物事に対する視野	2
視覚的に見たときの1番初めの感想	1
物事に対する感じ方、その性質・ものの感じ方	2
自ら育てることができる感情の泉	1
心身が互いに連動して刺激を受けること	1
(審美眼)	6
審美眼	1
究極を追求することによって得られる物事の本質を見抜く力・真理・真実・物事の本質を見透かす力	2
人間の性質を感じる事 見る事	1
見識	1
鑑識眼	1
(2)直感	30
(直感)	7
閃き	3
直感・経験によって磨かれる直感	3
行動判断をするときの判断基準に芸術、芸能、美術、運動、といったような学問では何とも説明するには大 変な要素を持って、その判断をするときによぎる感覚	1
(第六感)	9
五感以外で感じる第六感(のようなもの)	6
言葉以外で伝わるもの・目で訴えるもの	1
五感以外のものでコミュニケーションできる力	1
五感+第六感	1

補足資料1 様々な分野における感性の捉え方

(勸)	11
カンの良さ	1
動物的カン・過去から未来を予測できる動物的カン	3
本能的に感じるもの	2
人間のあらゆる機能の中で一番原始的なもの	1
洞察力・評価力・想像力・創造力の源泉	1
流行をいち早く察知する力	1
打てば響くようなもの・打てば響き、打たなくても響くもの	2
(予見)	3
先見の明があること	1
先を予測できる力・先を読む力	2
(3)素直さ	8
人の価値観によって左右されるのではなく、素直に、純粋に、ありのままに物事を受け入れる心	1
素直さ	2
受容性・自分の考えや価値観とは異なったものでも、一度は素直に受け入れて考えられるような受容性	3
感謝の気持ちを持っていること	2
(4)誠実さ	3
正直さ	1
(倫理観)	2
常識や倫理を何よりも優先できる倫理観のようなもの	1
常識を持っている	1
(5)共感性	28
思いやり	9
気遣い	2
優しさ	7
温かさ	1
情	1
人がなかなか気づかないようなさりげないところに気づくことができるさりげない優しさ	1
共感性・共感力	4
人の苦しみや悲しみを理解できる心	1
人を慮る気持ち	1
人間の心の内を忖度できること	1
(6)一体感	3
世の中の人と人との交流から生まれる幸福・優しさ	1
共感の場を作ることができること	1
共鳴できること	1
(7)想像	4
想像力	3
想像と創造	1
(8)冷静な判断	34
(冷静さ)	14
冷静さ	1
客観性	1
周りを見る力	1
物事を見過ぐすのではなく立ち止まって考えられる力	2
瞬間的にベストな判断・選択ができる状況判断能力	5
一つの事象そのものを理解することができ、かつその事象の具体・客観までも理解できる性質	1
情報を受け取った側の「情報分析」の仕方	2
正論を主張し、正論を聞く耳を持っていること	1

補足資料1 様々な分野における感性の捉え方

(洞察力・表現力)	12
1を言ったら10理解できるような理解力・理解力	4
察しの良さ	1
相手にとって何が必要かを判断する力	1
洞察力	1
人を見る目	1
自分自身のことをどれだけわかっていてそれを出せるか、という自己洞察と表現力	1
理性と共に、人間が世界に向かって認識を広げ、自己の本質の深みへと認識を深める際に、機能するもの	1
冷静かつ客観的に自分自身を見ることができる自己チェック能力	1
鋭さ	1
(柔軟性)	8
柔軟性・状況に応じて自分なりに対応できる柔軟性	6
適応力	1
器用さ	1
(9)利己性・自己中心性に関わるもの	5
(利己性・自己中心性の欠如)	3
エゴが強くては働かない、見えないもの	1
自分の利益を重んじていてはできないこと	2
(自我形成に関わるもの)	2
自我を形作っているもの	1
人間性に関わるもの	1
情報の発信・伝達までの心理的要因	82
(10)表現	18
表現力	6
立場や状況によって喜怒哀楽を出すこと・自分の思いが何らかの手段によって素直に表現できる素直さ	3
表現力・自己表現力	3
人がなかなか気づかずに見過ごしてしまうようなものにも気づき、価値を見出したり、メッセージを込めて伝え、表現できたり 何かを生み出したりする力	1
物事を、ある人が解する時、あるいは物がある人が作り出す時の、その人なりの概念の表れ	1
目に見えない意識や思考の傾向性を目に見える形で表した時に生じる、双方の価値判断の産物	1
(創造性)	13
創造性・創造力	4
枠にはまらないこと・ユニークさ・独自性・独創性	6
前例を破ることができる創造性	1
常識を知ること、遊び心を持って非常識をやり、新しいものを生み出す	1
鋭い洞察力と創造性が生み出すもの	1
(11)共感的行動	14
自分自身の物質的利益よりも人の立場を思いやって行動できる	1
人の心が読める	2
人の立場を自分に置き換えて考えられる力・人の立場に立って物事を考えられること	3
相手がしてほしいと思っていること、望んでいることを察し、(自然に)行動できる	5
相手が理解しやすいように話したり 行動したりするような、相手に合わせた対応ができる	3
(12)調和的姿勢	16
調和	3
調整力	1
協調性	1
自分自身の精神のバランスや周囲とのバランス	1
立場、状況によってとるべき言動を判断できるバランス感覚・バランス	2
周囲で起こっている出来事に対して関心を向けられること	1
それは自分自身の事だけでなく、相手のことを考えるバランスであり、そのバランス感覚	1
世の中の人と人との交流から生まれる幸福・優しさ	1
コミュニケーション能力	3
人と人の絆を生むもの	1
譲り合える心	1

補足資料1 様々な分野における感性の捉え方

(13)素直な態度	3
人目を気にせずに自分の心を素直に表現できること	1
自分の思いが何らかの手段によって素直に表現できる	2
(14)誠実な行動	1
自分の立場よりモラルを優先できる	1
(15)利己的姿勢・自己中心的行動に関わるもの	2
(利己的姿勢・自己中心的行動の欠如)人のため、周囲のため、全体のために自分を犠牲にできる	2
(16)内面からの発信	14
(内面から発するオーラ・気・波動など)	5
自分の内面で作り上げられる	1
受け止めることだけでなく 人間の内側より発せられるもの	1
努力では出すことの出来ない内面から滲み出るもの、オーラ	1
愛のエネルギーを波動として伝えるもの	1
気	1
(生命力・エネルギー・力)	9
命の力	1
生命、エネルギーのようなもの	1
生きている証	1
自分の周りにある全ての情報を取り入れるパワー 能力	1
その場の雰囲気を一変させるような力	1
集中力	2
目に見えない力	1
自助力	1
(17)情報の受け取りから発信までの一連の過程	13
人間の「感覚から心理まで」の反応	1
外界の刺激に対して、感覚器官で感じる 色・形などを知覚する 知識・経験などを基に認識する 感動・情動が起きる 言語・動作などで表現する、といった一連の人間の情報処理のプロセス	1
「何かを感じる心」であり、更には「その何かを解釈する能力」	1
心の中にある「周りを写すカメラ」とその「現像作業」	1
入力(感じ 受け止める感受性)と出力(表現力・伝達力)の両方の力	1
感じ 即座に反応するセンサーのようなもの	1
感じ 味わい、出すもの・感じ 考え、行動する力	1
物事に対してどのように感じ 考え、発展させるかということ	1
生まれ持ったものと経験で自然に身についたセンス	1
ある事柄などをそのまま理解すると共に、自分なりの言葉などで、相手に伝えることのできる力	1
感覚的認識、情緒的認識の能力。感覚器官を通して感じられる印象内容を、社会的、または主観的に価値づける感情の機能を含む。微妙で奥深い心の機微の有様の意識的反映と共に、心のあり方の真実を表現する能力や、他人の心の琴線に触れ共鳴させる表現力も含まれる。	1
驚こうとする力(ベースに言葉の力)・驚くことのできる力(人間の総合力) 感じようとする力・感じることのできる力 発見しようとする力 発見することのできる力 感動しようとする力・感動することのできる力 おやと思う(疑おうとする力) 疑うことのできる力 想像しようとする力・想像することのできる力 創造しようとする力・創造することのできる力 考えようとする力・考えることのできる力であり 知の力との関わりも大切	1
自ら感じた事象を様々な形態によって表現する性質である	1
人間関係や環境要因	59
(18)人間関係(家族関係・学校生活・地域での人間関係等)	20
家庭環境が表れるもの	1
家庭環境・学校環境・社会環境などに左右されるもの	1
周囲の人間環境(伝統・文化・生活習慣等によって異なってくるもの)	1
個人の好みであり、所属する社会集団(国や家族)によって影響されるもの	1
「育った環境」によって左右される・経験的なもの・周囲の環境によって創り出されるもの	14
個々の生育過程における情報や刺激などを基に生まれる物事の捉え方	1
生育環境や興味関心による認識物の偏り	1

補足資料 1 様々な分野における感性の捉え方

(19)自然への関心や接触	4
自然と触れ合う中で育まれるもの	4
Q0)温かい環境	1
愛情をかけることによって育てられ、引き出されるもの	1
Q1)環境要因	34
(環境による後天的なもの)	10
環境によって育てられるもの	1
環境や本人の認識によって、いかようにも変化するもの	2
環境総ての物質に反応する力	1
生活習慣に基づき成長過程で発達する	1
普段の生活が密接に関係している	1
子供の頃の経験に左右されるものが大きい	1
幼児期に殆ど形成される	1
流動的であり 一定したものではない	1
豊かさ 便利さと引き替えに失いやすい	1
(先天的なもの + 後天的なもの)	24
生まれ持ったものと 経験 環境によって磨かれるもの	1
生まれ持った遺伝性のもので幼児期・成長期の体験要因でできた性格の一部	1
生まれ持ったものに、自分自身が磨いて育てたもの	1
生まれ持ったものと気持ちによって養われる素質	1
生得的な面と経験的な面を持つ	2
生まれ持った才能と環境によって育てられる・磨かれる・形成される	8
生まれ持ったものと生き方によって磨かれるもの	1
根本的なものの表れでありながら 変化を遂げるもの	1
人の行動や物事を見て感じ 動くことによって磨かれるもの	1
生まれ持ったもの + 年齢や経験と共に高められるもの	1
経験や習慣によって築かれるもの	1
成長して行く中で得た経験による物の捉え方と先天的にもっている感じ方の混合物	1
物事 事柄を独自に解釈する、先天的あるいは後天的な要因 環境によって育まれたセンス	1
自分自身の元来の感じ方と経験によって磨かれるメソッド	1
人とのコミュニケーションによって磨かれるもの・コミュニケーションなどで得られる特別な印象を自分の感じる感じ方に加えることによって育つもの	2
性質に関わるもの	134
(22)天性	31
(先天的才能)	11
環境が育てるものではなく 先天的に備わっている	2
経験的なものよりも潜在的なものである	1
一旦形成されると成長しても殆ど変わらない	1
(生まれ持った)才能	3
天性 素質	2
脳を操る力・能力そのもの	1
あるものごと・事象の価値観について、それがどの程度のものであるか判断する個人の能力	1
(センス)	20
感じ方のセンス	4
持って生まれた感覚、センス	2
美的 芸術的・数学的センス、スポーツなどのセンス	7
センス	7

補足資料1 様々な分野における感性の捉え方

(23) 性質	35
(個性)	25
独自性	1
ある対象物を、どれだけ自分らしく捉えられるか	1
何かを五感で捉えた時に感じる何かの存在過程を理解し、そこに独自の文脈を与える力	1
服装、言動といった何もかもに現れる、その人のすべてを表しているもの	1
個人個人異なるもの	14
人間の性質	1
個々に持ち合わせた個性を表現する根源の感覚	1
自分を見つけ出して個性を出すための感覚	1
個人個人が独自に持つ、あるもの・ことに対する解釈の仕方・意味づけのようなもの	1
自分を一個人としての存在を可能にしているもの	1
一個人そのもの	1
多種多様なもの	1
(価値観・性格)	7
物事を判断する際には、明らかに一つの判断基準となるもの	1
その人それぞれに固有に持つ、状況や物事への思考パターンや行動の指針となるもの	1
個人の価値観や経験を基に判断しているもの	1
価値観や性格などといったことが関係している	1
性格	2
あるモノに接したとき、それを自分なりに認識し、意味づけを行う行動にて、判断の基準となるもの	1
(人間性)	3
研ぎ澄まされた人間性	1
人間の性	1
人間的魅力	1
(24) 心	28
(心の動き)	22
刹那的・直感的でなく、じっくりと吟味し判断するなかで出てくる心の動き	1
フィーリング、感情、感覚など広い意味のあるもの	1
波長	3
過去の目標(や注目を集めたこと)が形を変えたもの	1
物を見聞きしたときに感じる自分の気持ち	1
ものを憂う気持ち	1
人情の機微がわかること	1
今までに何度も何かを感じ、経験してきた感じ方の種類とでもいったようなもの	1
何かを見たり聞いたりして得た情報に対して感動すること	1
人の外界とのかかわりによって生じる心の動き。階層構造上上位方向、すなわち感情的に未分化な認知のレベルにおける人の心の動き。大人になるほど階層が多くなり、未分化の部分がさらに上位の階層へと推移していく	1
人が体のあらゆる感覚を用いて感じたことを、その人独特の方法で思考し、その結果あふれ出た感情	1
感情	4
気持ち	1
普遍的価値に共感的に反応する感情の働き	1
心の状態や細やかな変化を管理しているもの	1
心そのもの	1
情緒的なもの	1
(無意識)	6
無意識・経験の積み重ねによって自然に出てくる無意識的なもの	2
事の中から類似したものを無意識に表現しようとするもので、全く他者にはわからないもの	1
本能と意識の間にあるもの	1
本能で感じる部分	1
人知を超えたもの	1

補足資料1 様々な分野における感性の捉え方

(25)美学	21
(美学)	14
美学	1
正義	1
知恵	1
英知	1
忍耐	2
努力できる力	1
ひたむきさ	1
品性	1
謙虚さ	2
信念	1
プライド	1
金銭やモノではないかけがえのないものを人間として子孫に残す志	1
(純粹さ)	7
純粹さ	4
心の中にある宝石のようなもの	1
心の中で極めて純粹なモノ	1
邪心の無いときにしか機能しないもの	1
(26)拡大性	12
(ゆとり)	4
心のユトリがないと機能しない	1
何事も楽しめる心	1
常識を知ること、非常識をやり、新しいものを生み出す遊び心	1
心を開いた時にのみ機能する	1
(豊かさ)	6
自分を豊かにするもの	1
自分を豊かにするために感じる事	1
人生の彩り	1
豊かな心を持つ事で磨かれるもの	1
笑顔で挨拶をすることで磨かれるもの	1
人間を起伏ある(楽しいこと・辛いこと)人生にするための大いなる要因	1
(普遍的なもの)	2
特別なものではなく、全てにおいて必要とされるもの	1
ニュートラルなもの	1
(27)非論理性	7
理論的に教えられても身につくものではない	1
客観的な数字で表すことができない・ある程度は数値化したし、分別できるだろうが、完全に言葉などで表すことはできない	2
欲に対して働く抑止力である理性と悟性に関わるもの	1
技術とは異なったもの	3

補足資料2 様々な競技における感性の捉え方

様々な競技における感性	件数
情報の受け取りから処理までの心理的要因	307
(1)成功・競技・応援に対する感受性	107
(感じる力)	18
感受性	3
感度	1
自分自身と、自分の中で周囲を主観的に感じる力	1
(ボールやチームメイトの気持ちなど)いろんなことを感じる力・感動できる心	4
成功に対する喜びを感じられる力	8
考えるのではなく、とっさに感じた感覚	1
(敏感さ)	20
内面に対する敏感さ	1
(ミスに対して感じられるなどの)敏感さ	4
何かを話せばすぐに反応が返ってくる勘の良さ	1
繊細さ	1
純粹さ	1
気づき	1
受ける刺激に対する弁別閾の広さ	2
(闘いに有利な)情報を収集する能力	8
競技で触れる水をきちんとキャッチできるような感覚	1
(チャレンジ精神)	23
強い目的意識	3
挑戦意欲・勝利への執念	5
恐怖を超えて前進する力・危機を乗り越えようとする力	4
忍耐	4
プラス思考	4
大事な局面でも冒険ができる心	2
遊び心	1
(センス)	12
芸術的・美的センス	2
センス	7
器用さ	1
専門種目のスキルのなもの	2
(感覚)	19
五感	2
身体感覚	2
心身の感覚	2
運動神経・身体的なもの	2
ある程度のところを過ぎたら身体に任せるような身体で覚える感覚	1
感覚的なもの	1
研ぎ澄まされた感覚・研ぎ澄まされた心	8
フィーリング	1
(第六感)	15
超人的な感覚	1
異次元世界または別世界に行ってしまう感じ・異次元レベルのものが見える感覚	7
周囲の空気から吸収するもの	1
感覚よりさらに広い、五感で感じるもの	1
五感に通じるもの	1
身体感覚と精神感覚	3
五感と第六感	1
(2)予感	19
プレーが成功することがプレーをする前にわかる感じ・闘う前から勝つことがわかっている感じ	10
情報の先取りをする感覚	1
超人的なことができるという感覚	1
点をとられそうな危機の察知	1
理屈を超えた勝負勘	6

補足資料2 様々な競技における感性の捉え方

(3)状況把握	24
周囲の状況をよく見る目	10
周囲の空気を感じ、読む力	3
相手の動きを読み取ること	1
相手から伝わってくるものを感じとること	3
ゲームの流れ・演技全体の流れを掴む力	6
周囲(審判や観客等)に対してどう呼吸すればよいか、その空気を支配し、感じることができるか、ということ	1
(4)予測	39
イメージを描く力	16
ボールやシャトル、竹刀の動きが軌跡として線で見える感じ	3
相手の動きの予測	2
ボールの動きの予測	2
どこにパスをすべきか、ボールを投げるべきか、打つべきか、という成功するプレーを導いてくれるボールや竹刀を出すべき線や灯りのようなものが見える	8
将棋のような打つ手の先読み	4
ゲーム展開の予測	4
(5)周囲に対する素直さ	18
指導者のアドバイスを素直に受け入れられるような受容性	5
純粹さ	3
道具に対する感謝の念・愛情	2
チームの脇役・家族・スタッフ・ファンなど、自分の成功を陰で支えてくれた人への感謝の念を感じられることに対する感謝の念	8
(6)洞察	23
内から出てくる何かを探り、次なる方向性を見出す観察力	1
演技を行う曲の内容・表現・キャラクターに合ったフィーリングの捉え方・解釈	1
相手(チームメイト・相手選手・審判など)の心理を感じ、読みとり、察すること	19
データなしでも相手の動きがわかること	1
プレーの選択眼	1
(7)状況判断	18
(瞬時の)判断力	11
(瞬時の)決断力	3
(マニュアル通りにならないときの)状況判断力・ここでどうすべきかという見極め	4
(8)冷静さ	21
自分自身を冷静且つ客観的に第三者的な立場で見ているような"もう一人の自分"のような存在をつくること	3
どうすれば自分自身がベストの状況になれるかをよく知っていること・自己洞察ができること・自己と向き合えること	3
天狗にならないこと	1
冷静さ・客観性	9
感情に左右されずにチームにとって何が一番大切なのかを考えられる冷静さ	1
興奮状態の中にも冷静さを持つことができること	2
考える力・無理なく考える力	2
(9)集中力	20
(向かってくるボールの字が読み取れるような、身体の痛みを感じないような)集中力	16
高い次元への集中力	1
集中力	3
(10)チームメイトとの一体感	5
互いに何をしようとしているのかがわかること	1
パスのタイミングが合っていること	1
プレーに関する感覚のレベルが同じくらいに感じること・プレーに対する感覚が合っていること	2
仲間との一体感・一つの意思に従って一つの生命体として機能すること	1

補足資料2 様々な競技における感性の捉え方

(11)競技での自己中心性の欠如	4
自分自身を中心として見るのではなく 中心から自分自身を外して見ること	1
競技をやる上で必要な自己主張と周囲との調和とのバランス	1
人の立場に立って物事を考えることができるEQ	1
自己中心的なプレーをしないこと	1
(12)競技での利己性の欠如・利他性	9
自分が、自分が、という考えの欠如	2
チームのために進んで自分自身の活躍を犠牲にできる心	4
皆のためにも競技をしたいと思う気持ち	1
自分だけでなく 相手にとっても都合の良い状況を作れるバランスの良さ	1
キャプテンシー	1
情報の発信・伝達までの心理的要因	251
(13)直感的反応	79
(直感)	24
動物的な勘、本能的な勘、直感	3
自然に湧き出てくるもの	3
閃き	6
ベストの競技を行う上で必要な情報の無意識的な取捨選択による反応	12
(無意識的反応)	55
無意識のうちに出てくるもの 頭ではなく、身体や脳が記憶しているような無意識的なもの・無意識的に動けること	10
考えない自然な動き	14
身体に任せた自然な動き	10
迷わない反応	4
直感的な動き	10
瞬間的に反応する本能的なもの	7
(14)冷静な反応	16
余裕を持って考え、力まずにプレーできること	2
悪い出来事でもポジティブに対応できること	1
状況や相手に応じて臨機応変・柔軟にベストな対応が(自然に)できる能力・調整力・順応性	12
相手の動きを察知し、チームメイトにきちんと伝えられること	1
(15)独創的なプレー	12
プレーの創造性	3
プレーの多様性	1
プレーの独自性	2
プレーの独創性	6
(16)意思の表現されたプレー	29
表情などの演技態度	1
深みのある表現力	2
感情のこもったプレー	2
性格・性格が表れるもの	7
プレーの違いに表れるもの	1
心身による表現	1
身体による表現力・獲得した情報を身体によって出力する力	3
競技に関する自分の意見が主張でき、相手を納得させられること	1
与えられたものを自分らしく仕上げ、表現できること	1
感受性を表現する、感じたものをいかに伝えるか、ということ	2
高度な技術に裏付けられた高い芸術性	1
プレーの積極性	2
プレーの自主性	3
プレーの自発性	2

補足資料2 様々な競技における感性の捉え方

(17)調和的姿勢	58
(一体感)	31
心身の一体感	4
身体の調和一体感	3
(技術を補えるような 観客、ジャッジとの一体感)	3
相手が自分の思い通りに動いてくれるような相手との一体感	1
周囲の自然・道具との一体感・親和感	6
ボールと融合・統合し、同体になる感覚	1
空気に馴染み、一体化している感覚・周囲の流れや宇宙の一部になったかのような感覚	8
イメージした感覚と身体感覚や現実が一致した感じ	5
(調和)	17
自分自身、周囲との調和	3
チームメイトとの同調性	1
音楽や水との同調性	2
自然や道具との調和を可能にするもの	1
筋繊維・道具との対話ができる感覚	4
万人の価値観にピタッとハマるもの・人それぞれ異なる感性の中でも、どこかで万人に共通している部分に合ったプレーをすること	2
自然の法則に従うこと	1
相手を思いやる心・相手選手と競技への苦しみに対して共感できる心	3
(安定感)	10
リズムにのれる・川の流れるような自然な流れとそれにのる精神状態・タイミングが合っていること	5
スムーズな感覚	1
安定感	4
(18)チームワーク	8
弱気のチームメイトの気持ちを変えられる力がある	1
集団行動の中で他者に迷惑をかけない	1
必要なところで譲り合い、助け合える	4
内発的な忠誠心	1
互いの力を認め合う	1
(19)自己中心的行動の欠如	12
(責任感)	6
苦しくても途中で投げ出さないこと	2
他人のせいにならないこと	1
責任感	1
与えられたことをきっちりこなすこと	1
ルールの遵守	1
(自己の拡大に関わるもの)	6
まず、自分があって、自分の中で周囲を主観的に感じる	1
些細なことにこだわらない心	2
自己実現の追求力	1
自信・自我の芽生えによって人格形成に関わるもの	2
(20)内面からの発信(内面から発する気や力などに関わるもの)	30
気の力・気の集中力・強い気を発する力 絶対に勝つという強い精神力、気持ち	8
プラスとマイナスの気の葛藤の中で、それをうまくまとめてプラスを強められること	3
自分自身の身体ではなく、体外に自分の気が出て、その気が竹刀を運んでいるような感覚	1
気持ちの切り替えのうまさ	6
周囲の空気には負けない自分自身が強い気を発すること・相手が発している気に勝てるような強い気の発信・相手の気・エネルギーを利用し、それを生かすような感覚・気迫	6
「気」が入っているときによく働くもの	4
自分自身がオーラを放っていると感じる	1
競技を通してその場の雰囲気や世の中を変えられる力	1

補足資料2 様々な競技における感性の捉え方

(21)情報の受け取りから発信までの一連の過程	7
競技に関する事柄に対して、どう受け取り、感じ、動き、発展させるとか、といったこと	3
無意識レベルでどう感じ、表現するか、といったそれまですべての過程	1
競技で闘うために必要な情報を集め、それを自分の中で処理し、対応できる力	1
相手の気持ちを読んで動けるか、どう対処するか、といったこと	1
音楽を理解し、それを表現する力	1
人間関係や環境要因	426
(22)家族関係	81
でしゃばらずに見守っている	7
応援	14
積極的協力	15
自由	8
放任主義	6
楽しく競技をさせてくれる	8
自己主張ができる	6
理解がある	10
厳しい・スパルタ教育	5
競技がうまくいかないと叱る	2
(23)チームメイトとの関係	35
一体感がある	5
協調性がある	4
競技場面だけでなく、チームメイトとの普段のコミュニケーションを大事にする	2
(我ままにならないように自分の考えを周囲に理解してもらえらるような)コミュニケーション能力がある	8
良好な関係にある	7
普段から助け合える良い仲間関係にある	3
互いに尊敬の念をもてる関係にある	1
信頼関係を築いている	5
(24)指導者との関係	83
選手を吸い込んでしまうような感じ	1
選手の気持ちを理解してくれる関係	12
連帯感が持てる良好な関係	2
感謝の念がもてる関係	1
信頼感がもてる良好な関係・信頼関係を築けるコミュニケーションがとれた関係	6
指導者への柔軟な対応ができる	4
指導者の心が読め、その考えについて考えられる	5
一体感がもてる	1
指導者の愛情・優しさが感じられる	10
個性の尊重された指導を受けている	13
厳しい指導を受けている	13
威圧的な指導を受けている	11
指導者の話を聞き、理解する力がある	2
指導者との波長が合う	2
(25)リラックスできる環境	41
リラックスしているときに働くもの	7
大変さの中にも楽しさを感じられ、緊張感を保ちつつもプレーを楽しめる気持ちの余裕がもてる	1
楽しさ・嬉しさが感じられる状況で働くもの	4
気持ちに余裕がある状況で働くもの	5
わくわくしている状況で働くもの	3
深く長い呼吸をすることにより良い気を取り入れ、身体の中の気がスムーズに流れている状況でよく働くもの	2
ストレスが溜まったときに、ホッとできる人間環境にある	2
チームが良い雰囲気にある	4
ゆとりのもてる環境にある	1
個性を尊重される環境にある	4
自主性・自発性が尊重されている中で発揮される	2
極度のプレッシャーの中では発揮されない	4
枠にはめられたり、極度に管理された中ではなく、感覚の自由さがある中で磨かれる	2

補足資料2 様々な競技における感性の捉え方

(26) 競技との接触や関心	27
チーム以外でも遊びとして競技をよくやっていた	1
いろんな人のプレーをよく見る	5
上手な人のプレーを見て、イメージをし、それを再現・真似する	4
競技人生における誤りを指摘してくれる人々の存在を大切にする	4
競技に対する研究心がある	5
競技に対する好奇心が旺盛	5
他のスポーツをよく見て競技の参考にする	3
(27) 競技以外の刺激 (気分転換の遊び・習い事・他のスポーツ活動等)	141
(28) 環境要因	18
(環境による後天的なもの)	8
観察や経験によって養われるもの	1
経験でいろいろ肌で感じてきて、それが積み重なって、いろいろな局面、場面で経験していることが感性となる	1
家庭環境・学校環境・社会環境などに影響されるもの、特に、家庭環境が大きい	1
育った環境によるもの、子供の頃の経験に左右されるところが大きい	2
旺盛な好奇心によって磨かれるもの	1
育った家庭環境がよく表れる	1
様々な局面、場面での経験を通して感じてきたことが積み重なって出るもの	1
(先天的なもの+後天的なもの)	9
持って生まれたものと経験や環境によって養われるもの	5
持って生まれた天性と努力によって高まるもの	2
生来のものと経験や心がけによって磨かれるもの	1
年齢や経験と共に磨かれることはあるが生まれつきのものが大きい	1
性質に関わるもの	62
(29) 天性 (先天的なもの)	4
生まれつきのもの	3
生まれ持った素質	1
(30) 個性	4
(31) バランスの良さ	17
バランスの良さ	5
勝利を阻むネガティブなものをどう処理し、ポジティブなものに変えていくか、ということ	2
競技以外だけでなく、競技以外のことにも接して、バランス良くできる・競技以外の生活も大事にできる生活のバランスの良さ	4
数値だけに囚われないバランスの良さ	1
心身のバランスの良さ	2
冷静さと興奮状態をバランス良く持てること	1
考えずに言われた通りに動かしと自分自身で考える力をバランス良く持てること	1
バランスを保つためのもの	1
(32) 非論理性	37
(計測不可能なもの)	5
数値を追求するだけでは発揮されないもの	1
数値化できないもの	1
本能的なもの	2
自分の思い通りの流れに持ってこれること	1
(神・無に関わるもの)	32
迷いや不安などの恐れがすべて消えて「神」のような何か大きな存在に守られていると感じさせるもの	2
神のような何か大きな存在・自分以外の力を感じる・神が「力」的な力	3
神、ファンなどが良い方向に自分を守ってしてくれる力	1
人間の限界を超えるもの	1
無欲・無心・無我になれること	25

補足資料3 トップアスリートのベストパフォーマンス遂行時における感性の力の
発揮状況の具体的事象と特徴

特徴(件数)	特徴の詳細(件数)	いわゆる「不思議な体験」の具体的事象(競技種目)	
1 感覚情報 (57)	視覚・聴覚・触覚等(15)	コートや風の向き、空気の流れ、シャトルの飛距離、視界に入るライトの具合など、必要な情報が自然にインプット(バドミントン)	
		1週ごとのラップを読み上げる声や周りの選手の息遣いがあまり耳に入っていない。視覚、聴覚はあまり鋭敏でない(陸上)	
		自分に対する声援など必要な情報を取り入れ、他選手への声援など余計なものを排除する大きな壁を周りに作ってブロックしていた(体操)	
		ゴール先のカメラ、人、隣の選手、歓声など気を散らすような情報はすべてシャットアウトし、身体細部の感覚が鋭く、地面などが関節で感じられた(陸上)	
		相手と組んだとき、指先から伝わってくるものを感じ、相手のレベルや気持ちが読み取れた(柔道)	
	視覚(14)	(大きさ)	いつもよりボールが大きく見えた(野球)
			自分のチームや観客には、相手コートが穴だらけに広く相手チームの選手が小さく見える一方、自分のコートが狭く自分のチームの選手は大きく見えた(バレー)
	(軌道)		相手ゴールが大きく見えた(サッカー)
			自分が投げたボールからキャッチャーミットまでの間に白い空洞が見え、その中にボールを通して感じる(野球)
			投手の投げるボールの軌道が線で見え、自分の打つポイントに吸い込まれる感じ(野球)
			相手に向かっていくときに、灯りが見え、どこを打てばよいかを導いてくれた(剣道)
	(スピード)		ボールの縫い目が見えた(野球)
			シャトルが止まって見えた(バドミントン)
			トスを上げたり、ボールを追うとき、ボールの行く軌道が点でゆっくり見えた(バレー)
	聴覚(8)	(音)	周囲の音は聞えてはいるものの、耳に入っていない(陸上)(野球)(カヌー)
			スタートのピストルの音が鮮明に聞えた(陸上)
	全体・閃き(17)		制限時間を知らせる時計の音だけが鮮明に聞えた(射撃)
どう動くべきかが自然に閃き、感覚的に動いていた(ハンドボール)			
相手選手やチームメイトの心、ゲームの流れ、空気、気といったものが感覚的に読めていた(バレー)(ハンドボール)(テニス)(剣道)(野球)(ラグビー)など			
無感覚(3)		レース前は体調が悪くても、本番では身体が動き、レース後は疲労感が全くなかった(陸上)	
		本番では膝の痛みを感じなかった(競泳)	

補足資料3 トップアスリートのベストパフォーマンス遂行時における感性の力の
発揮状況の具体的事象と特徴

特徴(件数)	特徴の詳細(件数)	いわゆる「不思議な体験」の具体的事象(競技種目)
2 ポジティブな感覚 (44)	充実(4)	競技開始前から身体が満ちていた(陸上)
		レース前は感謝の気持ちが高まってプラス思考でレースに臨み、競技を楽しめた(陸上)
	気分の高揚(5)	精神状態が高まり、興奮状態。自分自身でもどうやって走れたのかわからなかった(陸上)
		モルヒネが出ている感じ(カヌー)
	余裕自信(11)	相手が蹴ってくるボールを止められる絶対の自信と気持ちの余裕があり、ゲームを楽しんでいた(サッカー)
		集中力、体力、技術が万全な状態で、打席ではどこにボールが来ても打てそうに感じた(野球)
	身軽さ(2)	身体が軽く浮いているような感じ(剣道)
	リラックス(3)	居心地が良くリラックスしていた(バスケット)
	リズム感(5)	緊張と緩和をバランス良く保ち、一定のリズムにのってやっていた(野球)
		音楽にのっているように一定のリズムにのっていた(競泳)
	安定感・バランス(5)	興奮と冷静さの両面を持ちながら安定した精神状態(ラグビー)
		自分と船、上半身と下半身など身体のバランスが取れていた(カヌー)
		相手にもある程度安心感を持ってもらえるような状況でバランスが良い組み方をしていた(柔道)
	統制感(5)	自分自身が作り出した波にのって泳ぎ、水を含めてすべてが自分の味方だという感覚(競泳)
	観客やジャッジ、会場の空気などのすべてが自分のためにあり、支配しているようで、会場の空気に吞まれずに自分が喰っていた(シンクロ)	
	観客や審判などすべてが自分に味方し、相手が自分の思い通りに動き、自分の動きに従っていた(剣道)	
	冷静(4)	状況をよく見極められていた(競泳)
3 無意識 (45)	無心(9)	雑念がなく、無心(野球)(テニス)(カヌー)(柔道)
		ポイントも勝敗もこだわっていない状態。無心(テニス)
	無我(7)	張り詰めた精神状態を超えて雑念がなく、無我の境地(陸上)
		ラスト100Mまではレース展開や駆け引きなど考えているが、その後は気持ちも身体も切り替わってゴールまでは何も考えていない(陸上)
	悟り(1)	悟りの境地にあった(シンクロ)
	無我夢中(4)	夢中になり 競技に没頭(柔道)
		無我夢中で、自分自身でもどうやって打ったのかわからない(テニス)
	自己実現(1)	自己実現をし、現実化する(スキー)
	クリアな状態(15)	恐ろしいくらいに張り詰めていて頭がクリアで、研ぎ澄まされた状態(テニス)
		感性、心身の感覚が研ぎ澄まされていた(陸上) (サッカー)(ラグビー)(カヌー)など
		どう攻めようか、という迷いが一切なかった(野球)(剣道)
無意識(8)	意識不明のような状態(陸上)	
	相手の動きに対して無意識に身体が動き、技が出た(剣道)	
	動物的勘が働き、計算ではなく、無意識的に、まさにここしかない、というような場所にショットが決まった(テニス)	

補足資料3 トップアスリートのベストパフォーマンス遂行時における感性の力の
発揮状況の具体的事象と特徴

特徴 (件数)	特徴の詳細 (件数)	いわゆる「不思議な体験」の具体的事象 (競技種目)
4 一体化 融合 (26)	心身の対話 一体化(4)	試合前のストレッチをしているときから本1本の筋繊維と対話 (陸上)
		心身の感覚が一緒になって、一つのボールのようにコロコロ転がっていく感じ(陸上)
		気持ちと動きが一体(剣道)
	他の人間と一体化(3)	チームが一つの意思に従って、一つの生命体として機能 (ラグビー)
		チームメイト同士、互いに相手の考えていることをきちんと受け取れ、感性の方向が同じ(サッカー)
	道具との一体化 融合(3)	ボールを一人の人間として扱い、無言の対話をする事で、ボールと自分の波長が合い、ボールと統合 融合し、同体になった(バレー)
		竹刀と防具と一体化し、試合が終わると道具にお礼を言いたくなった(剣道)
	自然など、すべての一体化 調和(12)	船がスムーズに水にのって動いているような感じや水との一体感 (競泳)
		自分を守ってくれているような温かいものに包まれ、神様のような大きな存在や観客との一体感(体操)
		宇宙との一体感 (陸上) (野球)
		すべてがうまく噛み合っていた(テニス)
		水が全く抵抗することなく水がすごく親しいものとなり、どの観客、ジャッジにも違和感を持たせず、万人共通の価値観にはまっていた(シンクロ)
	イメージとの一致(4)	バスがイメージ通りに通った(サッカー)
		試合前に描いていたイメージと実際の演技が一致(体操)
5 時空の超越 (25)	空間の超越(2)	ゴールが普段より近く感じ、自分のコースが浮いて盛り上がっているような、いつもと違った高い次元に見え、自分の世界に入っていた(陸上)
		狭い部屋に閉じ込められたような感じで、狭いところで相手を捕まえたような感覚(剣道)
	時空の超越(4)	夢の中のことのような感じ(陸上)
		別世界・未知の境地に行っている感じ(ラグビー)
		時空の停止 (陸上)
	時間の超越 (19) (時間の停止 記憶の蘇生)	時間が止まっている感覚があった(剣道)
		競技を終えた瞬間、それまでの一番つらかったことやお世話になった人たちの顔などが走馬灯のように浮かんできた (体操)
		(予知)
		リハーサルをしていたものを再生しているようで、目の前に迫ってくる変化に敏感に反応できる洞察力や判断力が働いていた (陸上)
		打席に立っているとき、本塁打を打てることがわかった (野球)

補足資料3 トップアスリーートのベストパフォーマンス遂行時における感性の力の
発揮状況の具体的事象と特徴

特徴(件数)	特徴の詳細(件数)	いわゆる「不思議な体験」の具体的事象(競技種目)
6 自然な流れ (18)	自然体(12)	身体が軽く細かいフォームなど気にせず、自然にできた(競泳)
		頭で考えず、身体に任せていた(野球)
	流れ(6)	身体がハードルを跳び越えている感じではなく、球が転がり、流れていくよう(陸上)
		身体の中をいい気が激みなぐ流れ、打席に入るときのリズムが守りに入るときのリズムに繋がりに、スムーズに試合が流れ、良い流れができていた(野球)
		川の流れるようにスムーズにパスが流れ、自分自身がその流れの中心にあり、流れに身を任せていたらボールが自然に自分のところに来た(バスケット)
		自分自身が穏やかな水面のような状態(柔道)
7 気 (7)	気の集中と遮断(6)	相手投手の気を呑みこんで、相手投手がひいているのを感じ、気で押し込んでいた(野球)
		相手の気・エネルギーを吸い込み、それを利用して技を返していた。気が高まっていて、気で勝っていた(剣道)
	オーラ(1)	競技を終えた瞬間、自分自身がオーラのような白い光を放っていた(体操)
8 体外離脱 他之力 (6)	「もう一人の自分」(2)	「もう一人の自分」が自分自身の姿を見ている(陸上)
		「もう一人の自分」がいて、冷静に、客観的に自分自身を見ていた(野球)
	自分以外の力(2)	自分自身の力を使っているのではなく、周りの選手にペースを作ってもらい、自分はそれについて行くことで、他の選手の力を利用(陸上)
		競技を自分以外の誰かがやっているような状態(カヌー)
	「もう一人の自分」と自分以外の力(2)	レース中、自分一人の力ではなく、「もう一人の自分」のような存在を感じ、自分以外の力を感じた(陸上)
	競技中は「もう一人の自分」が自分の演技を冷静に見ている感じがして、競技を終えた瞬間は神様が傍にいたことがわかった(体操)	

第2章 小学生におけるサッカー少年と一般児童の心理的要因の比較

1. 目的

適度なスポーツが様々な点で人の心身の健康に良い効果をもたらすことは自明の理であり、運動終了後に高揚感および落ち着き感が増加する一方で、否定的感情が減少することなども報告されている(児玉・峰岸, 1993; 竹中, 2000)。

しかし、常に勝利を目指して行う競技スポーツは、時折スポーツ障害という形で選手に悪影響をもたらしており、児童期から過激なスポーツを行うことに警鐘を鳴らす人も多い(岩瀬ら, 1996; 高沢, 1998)。このような身体面への悪影響と同様に、競技スポーツは、場合によっては精神面にも弊害をもたらすという指摘もあり、オーバートレーニングなどもその一例といえる(白山, 1988, 1990; Meyers & Whelan, 1998)。このように、スポーツの強度ややり方如何では、心理的要因にマイナス面をもたらす場合もあると思われる。

一方、スポーツに参加しない集団と参加した集団の自己概念への影響については、杉本・杉原(1994)の研究があるが、ここではスポーツ参加の有無による相違は認められていない。また、丹羽(1990)は、スポーツ教室に通っている児童と通っていない児童における社会的適応性の比較から、スポーツ参加児童の適応性が高いことを報告し、大勢の仲間とスポーツを行うことにより、適応性が高まり、広い意味での社会性が增大すると指摘している。

このように、これまで、地域等のスポーツ少年団に所属する児童についての心理面への影響については各書で指摘がある。しかし、児童期から日本代表選手を目指し、世界大会にも出場するようなレベルの高い競技スポーツに取り組むことが、人間性の面でプラスなのか、マイナスなのか、といった点についての研究は、Ogilvie & Tutko(1985)が、競技志向や勝利至上主義によるモラルの発達や人格形成の妨げなどを報告しているものの、まだあまりなされていない。

そこで、本研究では、児童期の中でも本格的に競技スポーツに取り組み始める年齢である小学校高学年児童にまず注目し、さらに第1章で述べた感性の特

徴を考慮し、競技面において「共感能力」が欠かせない、人との関わりが多いチームスポーツを選び、その中でも、「自己と他との交感」の場が比較的多く、心理的要因の働く場面が多いと考えられ、「瞬時的・直感的な判断」が要求されるサッカーを選択した。サッカーは、小学生においてスポーツ人口が最も多く、幼少期からプロ選手までの育成システムが最も整備されている競技である。今回は、幼少期から、サッカーに競技として本格的に取り組み始め、今後、五輪やW杯といった日本の代表選手になる可能性を持ち、しかも家庭と競技を行う現場が最も活発に交流しているJリーグ・ジュニア・チーム所属のサッカー少年に注目した。

本章においては、まず小学校高学年児童の全体的な感性に関わると思われる心理的要因を捉え、エリートの小学生サッカー選手と同年代の児童の心理的要因を比較検討することにより、サッカー少年と一般の児童の感性に関わる心理的要因の相違や、逆に高いレベルの競技スポーツが小学校高学年児童の日常面での感性に関わる心理的要因に与える影響を明らかにすることにより、人間形成に与えている影響を探ることを目的とする。

2. 方法

2.1. 調査対象

競技スポーツを行っているエリートジュニアサッカー選手群（以下、「アスリート群」と呼ぶ）と、その比較対象として、一般の小学生群と大きく分けて2群を対象とした。アスリート群は、Jリーグ傘下のジュニア・サッカーチーム2チームに所属する、小学校5、6年生91名のサッカー選手である。

一般の小学生群はさらに、「非スポーツ群」と「レクリエーション群」の2群に分けた。学校の運動部や地域等のクラブチーム等に所属することもなく、体育の授業を除いては、スポーツは全く行っていない小学校5、6年生男子89名を「非スポーツ群」とした。学校の部活動や地域のクラブチーム等に所属していたり、余暇にサッカーを含め、様々なスポーツを行ったりすることはあるも

の、競技レベルではスポーツを行っていないような小学校5、6年生男子121名を「レクリエーション群」とした。「レクリエーション群」のスポーツの頻度は、週2回以上4回以下の割合であり、「非スポーツ群」よりスポーツに接する機会が多いものの、スポーツ活動の質としても、頻度としても「アスリート群」には及ばない。

2.2. 調査方法ならびに内容

日常面における感性に関わる心理的要因に関する90項目による質問紙を使用し、調査を実施した(表2-1)。

項目の作成にあたっては、第1章において記載した補足資料1「様々な分野における感性の捉え方」を参考にした。補足資料1により、一般的に捉えられている「感性」とは、かなり心理的なものであると思われるので、まず感受性や共感性など心理的なものを集めてみた。主に、家庭を含む種々の生活場面における反応と、周囲の人間との関係や環境に関する内容である。感性は、その形成過程を要約すれば「情報を受け取り、その情報を取捨選択する情報処理を行い、反応や形として情報を具象化する情報の伝達を行う働きを持つもの」と考えることができる。さらに、この働きの過程には、具体的には表2-2に示したような各種の心理的要因の形成が係わっていると思われる。調査項目の作成にあたっては、この他「情動的共感性尺度」(加藤・高木, 1980)、「親子関係診断尺度 EICA」(辻岡・山本, 1976)や相馬モデル(1993)を併せて参考とした。

なお、調査項目への回答は、回答者が小学生であることを考慮し、段階評定を避け、「はい」と「いいえ」の2件法により回答を求めた。

表 2-1 日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目

項目番号	項目文
1	ペットを飼っていますか。
2	人の真似をしないで、自分で考えて何かを作ることが得意だ。
3	苦手なことに頑張って取り組んでいる友達は応援したいと思う。
4	友達が困っていたら、心配になる。
5	お手伝いをすると、仕事って大変なんだと思う。
6	いじめられている友達とは仲良くしたくない。
7	先生に注意されたら必ずその通りにする。
8	花を見ても、きれいだと思うことはない。
9	家に帰ると、ホッとする。
10	つらいとき、友達は励ましてくれる。
11	家族が忙しそうにしているときは、手伝ってあげる。
12	植物が家にたくさんありますか。
13	寂しそうにしている友達を見ると、つい声をかけたくなる。
14	学校は、たいていきれいに掃除されている。
15	けがをした動物を見ても、何とも思わない。
16	友達が一生懸命頑張っているけど、自分は関係ないと思う。
17	地域の人と話すことが、よくある。
18	家族で助け合って、一つのことをすることがよくある。
*19	何をしてもあまり楽しくない。
20	親の言うことは、その通りだと思うことが多い。
21	感じたことをいろいろな形で表すことがよくある。
22	先生の言うことを聞くのは、ほめてもらいたいから。
*23	つらいときに助けてくれる友達は大事にしたい。
24	自分の気持ちを表に出すことはない。
*25	親が作ってくれた食事はおいしいと思う。
26	ときどき人をいじめたくなる。
27	きれいなものを見るのが好きだ。
28	家族の顔を見ていると、言葉で言わなくても、気持ちがわかる。
29	皆が掃除をさぼっていたら、自分もさぼる。
30	いろいろなことを見たり聞いたりしたとき、感動することがよくある。
31	何をやってもうまくゆかないとき、他のやり方を探す。
32	自分のものを誰かがうっかりこわしてしまったら、許せない。
33	友人が失敗しても、けなしたり、責めたりしない。
34	学校の勉強は楽しい。
35	人の笑顔を見ると、自分も幸せな気持ちになることがある。
36	何かを決めるとき、人より時間がかかる方だ。
37	先生には何でも相談できる。
38	学校の廊下や教室には、絵や、誰かが持ってきた花がよく飾ってある。
*39	お世話になった人には、きちんとお礼を言う。
40	係りや当番の仕事は適当にやる。
41	先生は、自分のわからないところを、わかるまで教えてくれる。
42	友達とよく遊ぶ。
43	私は、約束をやぶることが多い。
44	かわいそうな話を聞くと、涙が出そうになる。
45	自分の両親は、自分の友達の両親を知っている。
46	地域の人たちの話を聞いていると、びっくりしたり「なるほど」と思うことがある。
47	楽しいことや嬉しいことがあったら、家族に話す。
48	人の意見を聞くのは馬鹿馬鹿しいと思う。
49	自分が感じていると同じように感じてくれる人がいたら、嬉しい。
50	待ち合わせの時間には、遅れても構わないと思う。
51	何かを一生懸命やった後は気持ちがいい。
52	誰かが大事なものを落としたとき、自分からすすんで探す。
53	家族みんなで何かをするのは楽しい。
54	もたもたしている人を見ると、からかいたくなる。

* は分析の際に削除した項目であることを示す。

表 2-1 日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目

55	自分のしたことが人に喜んでもらえるとうちも嬉しくなる。
56	あまり規則を守ろうとは思わない。
57	いろんなことを考えるのは好きだ。
58	自分の得になることしかやりたくない。
59	学校では友人同士が助け合いながら勉強している。
60	雲の形から、いろんなものを思い浮かべることがある。
61	人にぶつかっても、謝らなくてもいいと思う。
62	近所の人に会ったら、挨拶をする。
63	友達とは、よく教え合う。
64	植物や動物の世話をしていると、今まで気づかなかったことに気づくことが、よくある。
*65	勉強やスポーツなどができれば、意地悪でいいと思う。
*66	友達みんなで助け合って、一緒に何かをするのは楽しい。
67	両親には相談しやすい方だ。
68	イライラしているときに楽しそうな人を見ると、頭にくる。
69	物語を読んだり、話を聞いたりすると、いろんなことが頭に浮かぶ。
70	人を泣かしてしまったら、泣いた方が悪いと思う。
71	近所の人に、何かを教わることがよくある。
72	「どうしてだろう」と思うことがよくある。
73	先生が話をしているとき、つまらないときは勝手なことをしている。
74	知らなかったことがわかるのは、とても楽しいと感じる。
75	友達をいじめたり、仲間外れにすることがよくある。
76	いつも親の言う通りにしている。
77	何でも話せる友達がいる。
78	一度決めたことでも、いやになったらすぐにやめる。
79	いつも笑顔で挨拶をするようにしている。
80	犬や猫や鳥などの動物をかわいがる方だ。
81	体育の時間は楽しい。
82	困っている人を見かけても、助けたいとは思わない。
83	何でも人から言われてやるのではなく、自分で考えてやる方だ。
84	両親は自分のことをわかってくれている。
85	友達をほめることがよくある。
*86	いろいろなことを体験するのは楽しい。
87	違う学年の友達ともよく話したり、遊んだりする。
88	ちょっとしたことで、うれしかったり、悲しかったりする。
89	学校には行きたくないと思うことが多い。
90	急に、いい考えが浮かぶことがある。

* は分析の際に削除した項目であることを示す。

表 2-2 日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目

情報の受け取りから処理までの心理的要因	調査項目の番号
感受性	5 , 8 (-) , 15 (-) , 19 (-) , 27 , 30 , 34 , 46 , 51 , 55 , 64 , 72 , 74 , 81 , 86 , 88
直感	36 (-) , 90
素直さ	20 , 48 (-)
誠実さ	23 , 50 (-)
共感性*	3 , 4 , 13 , 16 (-) , 35 , 44 , 49 , 82 (-)
一体感	28 , 47 , 49 , 53 , 55
想像	57 , 60 , 69
冷静な判断	31 , 65 (-)
利己性	26 , 54 , 58
自己中心性*	6 , 56 , 61 , 68 , 70
情報の発信・伝達までの心理的要因	
表現*	2 , 21 , 24 (-) , 83
共感的行動*	33 , 52
調和的姿勢*	11 , 17 , 18 , 32 (-) , 47 , 62 , 63 , 66 , 71 , 79 , 85
素直な態度	7 , 76
誠実な行動	39 , 43 (-)
利己的姿勢	29 , 73
自己中心的行動*	40 , 75 , 78
人間関係や環境要因	
家族関係	9 , 11 , 18 , 20 , 25 , 28 , 45 , 47 , 53 , 67 , 76 , 84
学校生活	14 , 29 (-) , 34 , 38 , 40 (-) , 59 , 81 , 89 (-)
教師との関係	7 , 22 (-) , 37 , 41 , 73 (-)
地域での人間関係	17 , 46 , 62 , 71
友人関係	3 , 4 , 6 (-) , 10 , 13 , 16 (-) , 23 , 33 , 42 , 63 , 66 , 75 (-) , 77 , 85 , 87
自然への関心や接触	1 , 8 (-) , 12 , 15 (-) , 38 , 64 , 80
温かい環境*	9 , 10 , 25 , 37 , 41 , 45 , 59 , 67 , 71 , 77 , 84

(-)は項目内容の逆の意味を示す。

* 「共感性」は思いやり・優しさ、「自己中心性」は誠実さ・共感性の欠如、「表現」は独創・意思の表現、「共感的行動」は思いやりや優しさのある行動、「調和的姿勢」は、寛容な反応・協調的行動、「温かい環境」は友好的環境を含む。

3. 分析方法

3.1. 日常面における心理的要因の因子分析

収集したデータについては、ほとんど全員の被験者が同一の回答をしているような、分布の極端に歪んだ項目、日常面における感性に関わる心理的要因については、90項目中、表 2-1 に*を記した 19、23、25、39、65、66、86 の 7項目を分析に使用した。有効回答数は全調査対象者 301 名のうち 81.4%の 245 名であった。

本研究では、心理的要因という構成概念を対象としている。そのため、因子負荷行列の算出や解の回転、さらに回転後の因子負荷行列に基づいて構成概念を測定する尺度を作成することが可能な因子分析を、2 値評定を用いていることを考慮した上、四分相関係数行列を用いて行い、小学生全体としての日常面における感性に関わる心理的要因の各項目の構造を調べた（柳井ら，1999；萩生田・繁樹，1996）。分析には統計パッケージ SAS version 8.2 を使用し、最小 2 乗法、バリマックス回転を行って因子負荷量を推定した。なお、共通性の初期推定値には MAX（相関係数の最大値）（渡部，1988）を用いた。各々の主たる因子を抽出して因子の検討を加え、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定した。また、日常面における感性に関わる心理的要因の傾向を見るため、各因子に含まれる項目の素点をそれぞれ合計し、項目数で割って算出した尺度得点を用いて各因子の平均値を求めた。

3.2. グループ間の相違

各々のグループ間での相違を検討するため、各因子について各々の小学生の尺度得点を用いて一元配置の分散分析を実施し、テューキー法による多重比較を行った（芝・南風原，1990）。有意水準は、5%とした。また、同様に各項目についても各項目の素点を用いて一元配置の分散分析を実施し、テューキー法による多重比較を行った（芝・南風原，1990）。この場合も、有意水準は 5%と

した。

4. 結果

4.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果

因子分析の結果、固有値の減少度や共通性の値などから因子を特定し、5 因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が 0.40 以上の項目を表 2-3 に示した。

第 1 因子は、自己中心性、友人に対する自己中心的行動、利己性、教師に対する利己的姿勢、感受性・共感性・共感的行動・素直さ・誠実さ・誠実な行動・自然に対する感受性の欠如、学校生活に対するマイナスイメージ、といった内容の 16 項目が抽出された。主に学校や社会の中で周囲と共生する姿勢がなく、他人に対して感情的に冷淡な側面や自己中心的・利己的な面が示されていたことから、“自己中心性”因子と命名した。

第 2 因子は、家族や地域の人との関係を中心とした調和的姿勢、一体感、感受性、家族との一体感、温かい環境、といった、家庭や地域において周囲と調和し、助け合い、理解し合うような内容の 10 項目が抽出された。相互理解やコミュニケーションについての側面が示されていたことから、“コミュニケーション”因子と命名した。

第 3 因子は、殆んどが感受性についてであり、その他、共感性についての内容を含む 6 項目が抽出され、主に、他者の感情や事象に対する感受性の強さを示す側面が示されていたことから、“感受性”因子と命名した。

第 4 因子は、感受性、共感的行動、自然への関心や接触、友人や地域の人との関係、温かい環境、といった 5 項目が抽出された。友人や地域、動物との親密な関係にあり、温かい環境に置かれているような、周囲と親しく交流している側面が示されていたことから、“親和性”因子と命名した。

第 5 因子は、友人や教師との信頼関係、学校生活に対する感受性、温かい環境、といった 4 項目が抽出された。友人や教師など他者と信頼関係を築き、積極的に交流をしたり、スポーツに触れる部分での学校生活を楽しんでいるよう

な外向的な側面が示されていたことから、“外向性”因子と命名した。

因子分析の結果から、小学校5,6年生は、全体としては、日常面において、自己中心的な部分がある一方で、家族や友人など他者への共感性があり、周囲と親しく交流し、物事や対象に対する感受性を備え、外向的である、といった特徴を持っているといえる。

表 2-3 小学校高学年児童の日常面における感性に関わる心理的要因の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷 量					共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
75	自己中心的行動・友人関係 (-)	0.79	0.13	-0.07	-0.23	-0.05	0.70
56	自己中心性	0.76	-0.24	-0.06	0.05	-0.06	0.64
54	利己性	0.73	-0.05	0.12	0.03	0.03	0.55
26	利己性	0.71	0.13	0.18	0.00	-0.23	0.60
48	素直さ (-)	0.68	-0.05	0.09	-0.20	-0.11	0.52
82	共感性 (-)	0.67	0.08	0.02	-0.47	0.04	0.68
73	利己的姿勢・教師との関係 (-)	0.59	-0.06	-0.11	-0.10	0.30	0.46
50	誠実さ (-)	0.57	-0.06	-0.07	0.04	0.13	0.35
68	自己中心性	0.56	-0.09	0.02	0.07	-0.15	0.34
8	感受性 (-)・自然への関心や接触 (-)	0.55	0.00	-0.31	-0.33	0.39	0.66
58	利己性	0.55	-0.14	-0.10	-0.13	0.10	0.36
43	誠実な行動(-)	0.52	-0.25	0.05	-0.16	-0.34	0.48
70	自己中心性	0.51	0.00	0.00	-0.06	-0.19	0.30
78	自己中心的行動	0.46	-0.03	0.18	-0.16	-0.14	0.29
89	学校生活 (-)	0.40	-0.22	0.09	0.11	-0.01	0.23
*33	共感的行動・友人関係	-0.52	0.10	-0.02	0.13	0.04	0.30
62	調和的姿勢・地域での人間関係	-0.22	0.79	-0.16	0.33	0.20	0.84
71	調和的姿勢・地域での人間関係・温かい環境	0.12	0.69	0.01	0.07	-0.13	0.52
53	一体感・家族関係	-0.36	0.67	0.18	-0.08	-0.01	0.61
17	調和的姿勢・地域での人間関係	0.03	0.65	-0.06	-0.04	0.04	0.43
11	調和的姿勢・家族関係	-0.05	0.63	0.08	0.13	0.21	0.46
47	一体感・調和的姿勢・家族関係	-0.24	0.60	0.20	-0.13	0.12	0.49
74	感受性	-0.35	0.52	0.22	0.24	0.06	0.51
79	調和的姿勢	-0.02	0.48	0.15	0.11	-0.04	0.34
28	一体感・家族関係	0.04	0.44	0.31	0.19	0.07	0.38
18	調和的姿勢・家族関係	-0.15	0.44	0.38	0.00	0.13	0.55
44	共感性	0.15	0.17	0.69	0.15	-0.03	0.47
30	感受性	0.03	0.13	0.65	0.18	-0.06	0.48
22	教師との関係 (-)	0.19	-0.11	0.60	-0.12	0.23	0.69
49	共感性・一体感	-0.39	0.38	0.54	-0.28	-0.12	0.52
27	感受性	-0.31	0.13	0.49	0.08	-0.40	0.33
88	感受性	0.29	0.23	0.44	-0.02	0.03	0.67
80	自然への関心や接触	-0.10	0.04	0.07	0.81	-0.02	0.45
52	共感的行動	-0.23	0.08	0.09	0.54	0.30	0.37
10	友人関係・温かい環境	-0.16	0.04	0.35	0.46	0.05	0.32
46	感受性・地域での人間関係	0.01	0.35	0.04	0.43	0.06	0.59
*15	感受性 (-)・自然への関心や接触 (-)	0.17	-0.25	0.18	-0.62	0.27	0.44
81	感受性・学校生活	-0.06	0.03	-0.23	0.06	0.62	0.44
42	友人関係	-0.07	0.20	0.30	-0.03	0.56	0.39
77	友人関係・温かい環境	-0.06	0.03	0.23	0.33	0.47	0.18
37	教師との関係・温かい環境	-0.08	0.07	0.02	-0.03	0.40	0.18
	因子寄与	6.83	4.39	3.01	2.80	2.15	19.18

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

4.2. 各因子の尺度得点によるグループ間比較

各因子の尺度得点により、アスリート群、レクリエーション群、非スポーツ群、各々のグループ間の比較を表したのが表 2-4 である。分散分析およびテューキー方による多重比較の結果、各因子について、グループ間で有意差が見られたのは、次の通りである。“コミュニケーション”因子で、アスリート群と非スポーツ群 ($F=4.24$, $p < .05$) の間、“感受性”因子で、アスリート群 ($F=3.25$, $p < .05$) と非スポーツ群の間、“親和性”因子で、アスリート群とレクリエーション群 ($F=8.59$, $p < .001$)、非スポーツ群 ($F=8.59$, $p < .01$) の間、“外向性”因子で、非スポーツ群とアスリート群 ($F=8.48$, $p < .001$)、レクリエーション群 ($F=8.48$, $p < .05$) の間であった。以上の結果と表 2-4 に記した平均値、各因子の内容からして、次のようなことが導かれた。

アスリート群は、非スポーツ群より外向的で周囲とのコミュニケーションがとれているが、非スポーツ群より感受性は弱く、最も親和性に欠けていた。非スポーツ群は、アスリート群より感受性や親和性が強いが、アスリート群よりコミュニケーションがとれておらず、最も内向的であった。レクリエーション群は、アスリート群より親和性が強く、非スポーツ群より外向的であった。

表 2-4 小学校高学年児童の日常尺度のグループ間比較

日常尺度 因子名	第1因子 自己中心性			第2因子 コミュニケーション			第3因子 感受性		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
グループ									
アスリート群(A)	86	0.21	0.18	88	0.74	0.20	87	0.56	0.25
レクリエーション群(R)	80	0.23	0.24	80	0.71	0.20	80	0.63	0.22
非スポーツ群(N)	84	0.20	0.17	84	0.65	0.24	84	0.65	0.24
有意差				A > N*			A < N*		

日常尺度 因子名	第4因子 親和性			第5因子 外向性		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
グループ						
アスリート群(A)	90	0.68	0.19	90	0.76	0.20
レクリエーション群(R)	80	0.80	0.24	80	0.72	0.19
非スポーツ群(N)	84	0.79	0.21	84	0.62	0.28
有意差	A < R***、N**			N < A***、R*		

A=アスリート群、R=レクリエーション群、N=非スポーツ群を表わす。

<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

4.3. 各項目のグループ間比較

各項目について、それぞれの小学生の素点を用い、アスリート群、レクリエーション群、非スポーツ群、各々のグループ間での比較を行った。分散分析およびテューキー法による多重比較の結果、各々の項目について、グループ間で5%水準で有意差が見られた20項目を表2-5に記した。

感受性や共感などに関わる項目については7項目、表現については3項目、自己中心的行動については1項目、一体感や素直な態度、周囲との調和に関わる項目については4項目、家族関係については4項目、教師・友人を含む学校関係については4項目、自然や地域については3項目、温かい環境については2項目であった。グループ別にまとめると、以下のようになる。

アスリート群は、家庭において、非スポーツ群より一体感を感じており、レクリエーション群より、親の有り難みを実感できているような温かい環境で暮らしている傾向にあった。学校生活では、アスリート群は共感性が最も強い傾向にあり、スポーツに関する部分に対して肯定的に感じていた。地域社会では非スポーツ群よりコミュニケーションがとれていた。また、非スポーツ群より直感的で表現力も備えていた。さらに、一度決めたことを途中で投げ出すような自己中心的行動は見られず、目標の達成の価値を感じていた。その一方で、教師への素直さに最も欠けており、学校環境や自然に対して最も無関心と見られた。

非スポーツ群は、レクリエーション群より家庭での安らぎを感じており、学校ではアスリート群より教師に対して素直であった。共感性はアスリート群より弱く、きれいな学校環境や自然などの美的ものに対する関心がアスリート群より強かった。一方で、家庭では最も手伝いをせず、家族との一体感もアスリート群より欠けていた。アスリート群より、感情や考えの表現、地域社会でのコミュニケーションを苦手としていた。また、目標の達成には価値を感じていないため、一度決めたことを途中で投げ出す側面も見られた。

レクリエーション群は、非スポーツ群より家庭で手伝いをしており、学校で

はアスリート群より素直な姿勢があり、きれいな環境にいた。また、非スポーツ群より直感的であった。しかし、共感性はアスリート群より欠けている傾向にあり、アスリート群より表現が苦手な親の有り難みは感じていなかった。

表 2-5 小学校高学年児童の日常項目のグループ間比較

項目番号	項目内容	有意差の見られたグループ	度数			平均値			標準偏差		
			N	R	A	N	R	A	N	R	A
2	表現	A > N**	84	80	79	0.41	0.56	0.67	0.50	0.50	0.47
7	素直な態度 教師との関係	N > A** R > A***	84	80	79	0.76	0.79	0.52	0.43	0.41	0.50
8	感受性 (-) 自然への関心や接触 (-)	A > N**	84	80	79	0.13	0.24	0.35	0.34	0.43	0.48
9	家族関係 温かい環境	N > R*	84	80	79	0.89	0.74	0.85	0.31	0.44	0.36
11	調和的姿勢 家族関係	R > N* A > N**	84	80	79	0.68	0.83	0.90	0.47	0.38	0.30
12	自然への関心や接触	R > A***	84	80	79	0.76	0.89	0.63	0.43	0.32	0.49
14	学校生活	N > A*** R > A*	84	80	79	0.75	0.59	0.41	0.44	0.50	0.49
17	調和的姿勢 地域での人間関係	A > N*	84	80	79	0.51	0.59	0.72	0.50	0.50	0.45
24	表現 (-)	N > A***	84	80	79	0.46	0.30	0.19	0.50	0.46	0.39
25	家族関係 温かい環境	A > R*	84	80	79	0.98	0.91	0.99	0.15	0.28	0.11
27	感受性	N > A*	84	80	79	0.85	0.79	0.66	0.36	0.41	0.48
28	一体感 家族関係	A > N*	84	80	79	0.49	0.63	0.67	0.50	0.49	0.47
33	共感的行動 友人関係	A > R**	84	80	79	0.83	0.70	0.89	0.37	0.46	0.32
36	直感 (-)	N > R* N > A**	84	80	79	0.74	0.53	0.47	0.44	0.50	0.50
51	感受性	A > N**	84	80	79	0.87	0.94	0.99	0.34	0.24	0.11
52	共感的行動	A > N** A > R*	84	80	79	0.70	0.74	0.90	0.46	0.44	0.30
78	自己中心的行動	N > A*	84	80	79	0.38	0.36	0.20	0.49	0.48	0.40
81	学校生活	R > N*** A > N***	84	80	79	0.68	0.91	0.96	0.47	0.28	0.19
82	共感性 (-)	R > N*	84	80	79	0.01	0.11	0.08	0.11	0.32	0.27
83	表現	A > N*** A > R*	84	80	79	0.43	0.58	0.76	0.50	0.50	0.43

A=アスリート群、R=レクリエーション群、N=非スポーツ群を示す。

<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

5. 考察

5.1. 小学校高学年児童の日常面における心理的要因の特性

因子分析の結果から、小学校高学年児童は、自己中心的であるが、周囲と親しく交流するなどコミュニケーションがとれており、多感的で外向的である、といった側面から全体としての特徴を捉えることができる。

一般的に、小学校高学年児童は、未だ利己性が強い一方で、共感的感情を呼び起こしたり、反応をしたりすることができると言われている（浅川・松岡，1987）。また、感じやすさや、行動範囲の拡大によって仲間内でのルールを尊重するような調和した側面が見られる（佐藤，1990）。これらを考慮すると、今回の因子分析によって抽出された因子の内容は、小学校高学年児童においてはごく一般的な特徴と言える。

しかし、人格の健全な発達には成長と共に利他性を育成することが必要であることから、感受性や親和性、コミュニケーション、といった他の心理的要因を磨いてゆくことが望まれる。そのためには、自己を拡大し、周囲との調和を維持することが求められる（吉田・藤永，1990）。

5.2. サッカー少年と一般の小学生における特徴の相違

以下に、各因子、各項目についてのグループ間の比較を行った結果から、サッカー少年と一般の小学生の特徴の相違について考察を行う。

5.2.1. 表現・直感・自己中心性に関する内容

非スポーツ群とレクリエーション群はアスリート群より感情や考えの表現を苦手としている一方、アスリート群は、直感や考えや感情を抱き、判断し、それを身体反応によって表出する、といった情報の受け取りから処理までの一連の過程を、他者の力を頼ることよりも自らの内面的な力を重視して表現する特徴が見られた。すなわち、サッカー少年は情報の受け取りから発信までの一連の過程をスムーズに行っているのに対し、一般の小学生は内面の情報を発信す

ることに難があると思われる。また、項目の詳細内容を検討したところ、非スポーツ群では一度決めたことを途中で投げ出す側面が見られたが、アスリート群では物事を最後までやり通す意志の強さと持続性、責任感や自信も備えていると推測された。このような点が、アスリート群が非スポーツ群より自己中心的行動をとらない要因になっていると思われる。したがって、サッカー少年は一般の小学生より意志が強く忍耐があり、責任感や自信を備えている一方、一般の小学生はこのような特性に欠け、サッカー少年より自己中心的であるといえる。

こうしたサッカー少年の心理的要因は、アスリート群が積極性やチャレンジ精神なども考慮される厳しい入団テストに合格したエリート選手であることから、入団の際に高いレベルで競技生活を送るために欠かせない資質として元来、備えていたことが考えられる。また、チームスポーツであり、スピーディーに展開されるサッカーという競技の特性から、サッカー少年は、チームワークや集団内で意思の疎通をスムーズにはかるための力や自己中心的な行動を抑制する力、さらには、ゲーム中は他人の指示を待つ余裕はないため、自分自身ですばやく判断して行動することが必然的に求められる。したがって、チームに所属する以前から資質として備えていた心理的要因と、サッカーという競技特性やハイレベルならではの状況も関わって、さらにそれらが磨かれたり、新たな心理的要因が養われたりする側面の両方が推測される。チームに所属してからはライバルとの争いやチームとして常に勝つことを求められる厳しい状況の中で、意志の強さや忍耐、責任感、自信、といったものが磨かれ、日常面に反映される面もあると思われる（船越，1990）。スポーツ選手の運動能力と心理的特性の関係については、松田ら（1969）によって「運動能力の優れた選手は劣った選手より感情の動揺が少なく、自信と適応感を持ち、情緒的に安定しており、社会的でリーダーシップをとることを好むといった面を持っている」と報告されているが、このうち、特に自信や社交性、リーダーシップ、といった点は、今回のサッカー少年の場合、自分で考えて行動したり、自己表現をしたり、直

感的に決断する、などといった点に表れていると言える。

一方、一般の小学生がサッカー少年より自己中心的行動をとる傾向にあることや、意志の強さや忍耐、責任感や自信の点で劣っている傾向にある理由として、一般の小学生は元来そのような特性が弱いのか、もしくはサッカー少年のように競技力の向上を意識した生活を送っているわけではないため、サッカー少年に見られたような特性を強める必要に迫られていないためと考えられる。

5.2.2. 家庭・学校・チームの環境や人間関係に関する内容

非スポーツ群とレクリエーション群は、アスリート群より家庭での結びつきが弱く、周囲とのコミュニケーションも少なく、非共感的で内向的な傾向にあった。その一方、アスリート群は、学校に対してはやや疎遠な感情を持っているものの、家族や地域の人などを中心にコミュニケーションがとれており、共感的で外向的であり、調和がとれている状況にあると思われた。したがって、感性という観点から言えば、サッカー少年は情報交流が多く、一般の小学生は少ないと考えられ、かなり対照的な状況にあると思われる。

こうしたことは、サッカー少年は、家族によるサポートを受けて競技生活を送っているため、家族とのコミュニケーションが自然にとれていることや、サッカーにおいては、チームの指導者達が技術のみではなく、礼儀や言葉使いも含めた人間教育を踏まえて各々の個性に合った指導をしていることも一因と考えられる（中込，2000）。また、交流範囲についても、学校と家庭に限られる一般の小学生よりも、クラブチームでは、いろいろな地域から集まった様々な人間と接することができ、より幅の広い人間性を形成していると思われる。

サッカー少年の他者との共感的な側面については、春木と岩下（1981）による「志気の高いすぐれたチームワークは、メンバー間の共感が豊かであることによって発揮される」という指摘がある。すなわち、サッカーというチームスポーツでは勝利を手にするために共感性を強めることが必要とされるため、共感性の強い小学生が集められたと考えることもできる。さらに、相手の人間性

への配慮、人の行為の結果についてのポジティブな感情は、小学生の一部や多くの中学生、高校生に見られるという報告もあり（岡本ら，1981）、これらのことから、サッカー少年は、一般の小学生より成熟した心理的要因を備えていると考えられる。一般の小学生の特徴として、家族との結びつきやコミュニケーション、外向性、といった点でその傾向が弱かったことから、エリートスポーツが、周囲との交流を積極的にしている側面があることが示唆される。

一方で、サッカー少年は、家族を中心として多くの面では外向的で積極的にコミュニケーションをとっているものの、第4因子の親和性が最も弱く、学校に対して疎遠な点が見られるなど一部においては逆の側面が現れていた。これは、一般の小学生がサッカー少年より学校で素直な姿勢にあったことも考慮すると、サッカー少年はクラブチームでの競技活動に日々、追われているため、一般の小学生に比べて学校にいる時間が短く、学校への関心が薄くなることがその理由と考えられる。青木（1995）は、スポーツ少年団に過度に適応している児童の特徴として、学習への意欲が低いことや教師との信頼感が弱いことを指摘しているが、このような側面は、競技生活を重んじるあまり、勉学など学校生活を軽んじることにつながる可能性があり、競技以外の生活には無関心になる、といった偏った心理状態を生み、将来的には人間性を低下させることになりかねない。反対に、一般の小学生の心理的要因にはサッカー少年より学校中心の生活を送りやすい状況が反映している一方で、全体的には消極的な様子が表れたと考えられる。

5.2.3. 感受性・自然に関する内容

非スポーツ群は、アスリート群より感受性や自然などの美的ものに対する関心が強く、非スポーツ群とレクリエーション群は共にアスリート群より親和性が強く、きれいな学校環境にいた。その一方、アスリート群は、感受性や親和性が弱いことや、自然やきれいな学校環境など美的ものに無関心であることが明らかにされた。したがって、一般の小学生はサッカー少年より感受性や親和

性、美的ものに対する関心が強いといえる。

サッカー少年は、サッカーに特別な関心を持っており、自分でプレーをするだけでなく、時間があればサッカーを見たり、競技に関わる本やビデオを見たり、といったサッカー中心の生活を送っている。そのため、どうしてもそれ以外のことに触れる機会が少なくなる傾向にあり、周囲の環境に無頓着になったり、きれいなものを目にしても足を止めて見る余裕がなかったりと、いった状況に陥ると思われる。このように、日々の生活で心の余裕を失いがちな状況にあるサッカー少年に対し、一般の小学生は自然や学校環境などといった自分の周囲に目を向け、周囲の情報を感じ取ったり、親しく交流したりするようなことを行いやすい状況にあると推測できる。一般の小学生にあり、サッカー少年には欠けているこのような側面が、前述した学校生活への無関心さと同様、偏った心理的要因を形成することにつながる危険性を持つと考えられるため、今後、何らかの対策が必要であろう。

5.3. ハイレベルの競技スポーツと日常面における心理的要因の関係

ハイレベルの競技スポーツは、以下のような点で、小学生の日常面における感性に関わる心理的要因に影響を与えていることが考察される。

アスリート群、すなわちサッカー少年に見られた特徴は、小学校高学年児童の全般的な特徴として見られた第1因子の自己中心性よりもむしろ、第2、第3、第5因子のコミュニケーションや調和、他者への共感性や感受性、外向性や積極性といった側面に強く表れていると考えられる。共感性を強めたり、それによって他者とのコミュニケーションを成立させることは、一般に、小学生の段階で自分中心の視点から「他人の視点をとれること」への変化によるところが大きいと思われる(岩井, 1982)。また、自己中心性の解消は、自己の拡大によって可能になる(吉田・藤永, 1990)。サッカー少年は、自己の内面的な力に自信を持って行動することや、他者の気持ちや状況を自分のことのように感じられる共感性を備えていたり、集団で目標に向かう中で自分勝手に物事を投げ出

さない、といった心理的要因を備えていたことから、小学生においては一般の小学生より自己が拡大されていると考えられる。これにより、サッカー少年は小学生における心理発達の面で重要とされる視点の変化が一般の小学生よりスムーズであることが推測できる。このような側面は、入団前から備えていたと思われる部分と、競技生活の中で、例えばチームメイトの視点に立って、チームメイトが受けやすいボールを蹴ることを意識したり、相手チームの選手の視点に立ってその心理を読み取ったりするような経験を重ねることで、一般の小学生よりさらに磨かれている可能性も考えられる。

また、山田（1987）が指摘しているような、スポーツ少年団の活動による弊害として一部で言われている、攻撃性や主体性の欠如、他人を思いやる心の欠如、体育嫌い、などといった特徴は、今回は見られなかった。むしろ、利己的な部分を超えて全体への配慮ができる、といったような人間性の面で重要な心理的要因がサッカー少年に特徴的に見られ、ハイレベルの競技スポーツを行う小学生は、このような日常面における感性に関わる心理的要因を元来備えていたり、養ったりしていると考えられる。さらに、ハイレベルの競技スポーツを行うことが、集団の中で信頼感を得て活発に行動できるようなプラス面を支えていることが推察される。

6．本章のまとめ

小学校高学年児童 301 名を対象として、日常面における感性に関わる心理的要因に関する 90 項目から成るアンケート調査を実施し、日常面における感性に関わる心理的要因のグループ間の相違について、統計的手法を用いて解析を行った。その結果、以下のようなことが得られた。

- 1．小学校高学年児童は、全体として、自己中心的である一方、周囲と親しく交流するなどコミュニケーションがとれており、多感的で外向的である、といった特徴を持っていることが明らかになった。

2 . ハイレベルの競技スポーツを行っている小学生は、意思とその持続性や自信を持ち、家族や地域を中心に周囲と積極的にコミュニケーションをとっている。しかしその一方で、学校生活や自然などといった競技以外の部分には疎くなる、といった側面も見られた。

このような特徴は、児童の元々の資質による部分もあるだろうが、クラブ組織のサッカーチームに入ることによって形成された面も大きいと考えられる。したがって、ハイレベルの競技スポーツは、周囲とのコミュニケーションや調和、共感性、外向性といった点で、日常面での感性に関わる心理的要因を増強させる一方、学校生活や自然・美的なものへの感受性を鈍化させている面もあると言える。こうした点を踏まえ、サッカーにおける競技パフォーマンスが心理的要因にどう関係するか、といった点について、次章で検討したい。

第3章 Jリーグ・ジュニア・チーム所属の小学生サッカー選手の心理的要因について

1. 目的

第2章において、小学生におけるサッカー少年と一般の児童の感性に関わる心理的要因の相違を明らかにしたが、サッカー少年に見られた感性に関わる心理的要因の特徴は、競技面における感性に関わる行動様式とはどのような関連があるのだろうか。

様々な競技におけるトップアスリートの多くは、幼少期から何らかのスポーツを行っており、幼少期におけるスポーツへの感じ方や係わり方、周囲の環境などが成長してからの選手の感性に関連していることが見出されている（志岐ら，2000）。したがって、トップアスリートを育てるには、どのような感性が必要か、ということを考える際にも、まず、幼少期の競技力の高いエリート選手の状況を把握することが必要と考えられる。このために、日常面での感受性や共感性などの心理的要因と競技面で良い成績や勝利を得ることに関連性があることが見出されれば、競技成績を向上させるためにも感性に関連した心理的要因を重視する必要があることが立証される。そのため、感性に関わると思われる日常面における心理的要因に重点を置き、競技面の行動様式とその関連性について探ることとした。

本章では、第2章のサッカー少年と同様、Jリーグ・ジュニア・サッカーチーム所属の小学校高学年の子供に注目し、エリートの小学生サッカー選手の感性に関わると思われる日常面における心理的要因と競技面における行動様式の特徴を把握し、さらに日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性を調べ、感性に関わる心理的要因に影響を与える環境要因について探ることを目的とした。

2. 方法

競技以外の日常面における感性に関わる心理的要因に関する90項目および競技面における感性に関わる行動様式に関する68項目による2種類の質問紙を使用し、調査を実施した(第2章表2-1, 本章表3-1)。

2.1. 調査対象

小学生サッカー選手の代表的なモデルケースとして、Jリーグ下部組織のジュニア・サッカーチーム、2チームに所属する172名の選手を対象とした。年齢10~12才の小学5年生85名、6年生87名の男子で、小学校2年~4年生の間に適性試験に合格してサッカーチームに入った。選手達は将来のプロ選手を目指してジュニア日本代表選手として世界大会に出場したり、国内大会の上位に入賞したりしている者を含む小学生におけるサッカーのトップアスリートである。1年を通して平均1週間に1回の割合で試合に出場し、週3回、毎回2時間程度の練習を行っている。チームでの1年間の長期休暇は6週間程度である。また、学校で過ごす時間は月曜日から金曜日までが平均約6~7時間、土曜日が約4時間程度で、平均睡眠時間は約9時間である。

2.2. 調査方法ならびに内容

調査項目は、日常面における感性に関わる心理的要因については、第2章と同様、家庭を含む種々の生活場面における反応と、周囲の人間との関係や環境に関する内容、競技面における感性に関わる行動様式については、ゲームやチームにおける反応と他者との関係に関する内容で作成した。詳細は以下のとおりである。

2.2.1. 日常面における心理的要因の項目

日常面における感性に関わる心理的要因として、第2章で使用した表2-1にある90項目を本章でも使用した。

2.2.2. 競技面における行動様式の項目

競技面における感性に関わる行動様式に関する 68 項目による質問紙を使用し、調査を実施した（表 3-1）。項目の作成にあたっては、第 1 章において記載した補足資料 2「様々な競技における感性の捉え方」を参考にしながら、まず状況判断や直感的反応など、心理的なものや行動に関わるものを集め、検討を加えた。競技面における感性は、要約すれば「競技における情報を受け取り、それを処理し、競技における反応や行動として情報を発信・伝達する働きを持つもの」と考えることができる。さらに、この働きの過程には、具体的には表 3-2 に示したような各種の心理的要因の形成が係わっていると思われる。調査項目の作成にあたっては、この他「TSMI」(松田ら, 1981)や「PCI」(猪俣ら, 1996)をモデルとした。

表 3-1 競技面における感性に関わる行動様式の調査項目

項目番号	項目文
1	たとえ勝っていても、点をとられそうだと感じることがある。
2	人をびっくりさせるようなプレーができる。
3	自分や自分のチームへの応援でも、ゲーム中の応援をうるさく感じることがある。
4	ゲームに出ているとき、次にどうなるのか、だいたいわかる。
5	いつも、チームメイトが受けやすいボールを出すようにしている。
6	自分のプレーについて両親が言うことは、あまり気にならない。
7	ゲーム中、自分の前にいないチームメイトの動きも、だいたいわかっている。
8	両親は、いつも自分の応援をしてくれている。
9	両親が応援に来てくれると、頑張れる。
10	ゲーム中、ボールがよく見えていないことがある。
*11	みんなが練習の後片付けをするときは、自分もやる。
12	ゲームや練習について、チームメイトとよく話す。
13	相手チームのプレースタイルは、プレー以外の様子からもわかる。
14	ゲームに出ているときは、自分の好きなようにプレーする。
15	ゲームでは、自分さえ活躍できればいい。
16	ボールを蹴る前から蹴った後のボールの動きがわかることがある。
17	点をとられそうだと感じたとき、その感じはだいたいはずれている。
18	自分のプレーに関して、人から何か言われるのは迷惑だ。
19	チームの皆が喜んでいても、自分は嬉しくないことが多い。
20	ゲーム中、チームメイトと気持ちが一つになっていると感ずることがある。
21	ゲーム中、思ってもみないことが起きたら落ち着いてプレーを続けられない。
*22	ゲームに出してもらうために、監督やコーチの言うことを聞いているふりをする。
23	両親がゲームや練習を見ているとき、両親から叱られることはない。
24	プレー中、嬉しいときは、だいたい素直に喜びを表現する。
25	ゲームや練習のとき、頭で考えなくても、自然に動いていることが多い。
26	チームメイトをいじめることが、ときどきある。
*27	自分のチームが勝っているときは、途中でボールを追うのをやめることがある。
28	ゲームや練習中、監督やコーチの考えは殆んどわからない。
29	どんなに相手チームの守りが堅くても、ボールを通す場所をうまく見つけることができる。
*30	自分のプレーがチームの勝利につながったら、嬉しいと思う。
31	プレーがなかなかうまくゆかないとき、違ったやり方を考える。
32	監督やコーチは、よくほめてくれる。
33	ゲームには、チームメイト皆が一緒にバスで行っても、自分だけは車で送ってもらってもかまわないと思う。
*34	サッカーの練習に行くのは、いつも楽しみだ。
35	何でも話せるチームメイトがいる。
36	ゲームで自分がボールを持ったとき、どこにパスを出したらいいのかわからないことが多い。
37	監督やコーチには、何でも相談できる。
38	ゲーム中、空中に上がったボールが落ちる場所が、だいたいわかる。
39	チームメイトをいじめられることはない。
40	サッカーをしていても、特に何も感じない。
41	ゲーム中、自分のチームがどう動けば相手チームが嫌がるのか、わかる。
42	チームメイトとは練習以外でも一緒にいることが多い。
43	自分の住んでいる地域には、自分のチーム以外にもサッカーチームがある。
44	ゲームや練習で、監督やコーチに叱られることは少ない。
*45	上手な人のプレーを見ていると、気づくことがたくさんある。
*46	自分のきらいなチームメイトでも、ゲーム中、自分に近い場所で困っているときは、助けに行く。
*47	監督やコーチが怒るのは、自分のことをよく考えてくれているからだと思う。
48	ゲーム中、相手チームから出たボールがどこに行くのか、その動きがわかることがある。
49	練習中、長い時間正座をしたり、痛い思いをするようなことがよくある。
50	ゲームや練習中、チームメイトは、自分が何をしようとしているのかをすくなくわかってくれる。
51	*自分のプレーや言葉について、チームメイトがどんなふう感じているかわからない。
52	ゲームに出ているとき、ゲームの流れはよく掴んでいる。
53	サッカーの練習や勉強の合間に、友達と遊んでいる。
54	ゲームに出ているとき、合図をしなくても、チームメイトの考えがよくわかる。

* は分析の際に削除した項目であることを示す。

表 3-1 競技面における感性に関わる行動様式の調査項目

*55	サッカーさえ上手になれば、他のことはどうでもいい。
56	相手チームの選手と競り合っているとき、その選手が考えていない動きをすることができる。
57	ゲーム中、人に指示されなくても動けばいいのがたいていわかる。
58	ゲーム中、自分が目立つことよりチームメイト生かす方がチームの勝利に繋がるとわかっていてもそうしない。
59	サッカーの上手な人は、どんなことをしても叱られない。
*60	目標にしていたゲームで良い結果を出せたときは、気持ちがいい。
*61	ゲームでいい結果を出せたとき、いつもまわりの人に感謝している。
*62	サッカーの上手な人のプレーをよく見ている。
63	ゲーム中、疲れてきたら、チームメイトが自分の役目を果たしてくれればいいと思う。
*64	ゲームで負けたら、人のせいにする。
65	チームメイトのミスを責めることはほとんどない。
*66	チームメイトがいいプレーをしていても、ほめることはない。
67	ゲーム中、自分の考えがベンチの指示と違っていたら、ベンチの言う通りにする。
68	プレーには、自分の気持ちはよく出ていないと思う。

* は分析の際に削除した項目であることを示す。

表 3-2 競技面における感性に関わる行動様式の調査項目

競技面における情報の受け取りから判断までの心理的要因	調査項目の番号
成功 競技 応援に対する感受性	3 (-), 9, 30, 34, 40 (-), 45, 60, 61
予感	1, 17 (-)
状況把握	7, 10 (-), 28 (-), 51 (-), 52, 54
予測	4, 16, 38, 48
周囲に対する素直さ	22 (-), 47
洞察	13, 29, 41, 56
状況判断	29, 31, 36 (-), 56, 57
冷静さ	6, 31, 46, 55 (-)
チームメイトとの一体感	19 (-), 20, 54
競技での自己中心性	18
競技での利己性	15, 33, 59, 63
競技面における情報の発信 伝達までの心理的要因	
直感的反応	25
冷静な反応	21 (-)
独創的なプレー	2, 56
意思の表現されたプレー	24, 68 (-)
調和的姿勢	26 (-), 65, 66 (-), 67
チームワーク*	5, 11, 12, 14 (-), 46, 58 (-)
自己中心的行動	27, 64
競技面における人間関係 環境要因	
家族関係	6, 8, 9, 23
チームメイトとの関係	19 (-), 20, 26 (-), 35, 39, 42, 50, 51 (-), 54, 65, 66 (-)
指導者との関係	22 (-), 28 (-), 32, 37, 44, 47, 67
リラックスできる環境	6, 23, 37, 39, 44, 49 (-)
サッカーとの接触や関心	34, 43, 45, 62
競技以外の刺激	53

(-)は項目内容の逆転の意味を示す。

* 「チームワーク」は一体感を得る行動を含む。

3. 分析方法

収集したデータについては、ほとんど全員の被験者が同一の回答をしているような、分布の極端に歪んだ項目を削除した。具体的には日常面における感性に関わる心理的要因については、90項目中23、25、39、51、55、61、65、66、81、86の10項目を、競技面における行動様式についても68項目中、11、22、27、30、34、45、46、47、55、60、61、62、64、66の14項目を削除し、それぞれ80項目、54項目を分析に使用した。また、回答に不備のあった被験者のデータをあらかじめ削除したところ、有効回答数は172名のうち161名であった。

本研究においても、第2章と同様に、四分相関係数行列を用いて因子分析を行い、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目の構造を調べ、小学生のエリートサッカー選手全体としての傾向を調べた(柳井ら, 1999; 萩生田・繁柵, 1996)。各々の主たる因子を抽出して因子の検討を加え、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定した。また、日常面における心理的要因と競技面における行動様式の傾向を見るため、尺度得点を用いて各因子の平均を求めた。

日常面の感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の関連性を検討するため、各因子に含まれる項目の得点を合計して項目数で割ったものを尺度得点とし、これを用いて尺度間のピアソンの積率相関係数を求めた。また、項目間についても、ピアソンの積率相関係数を求めた。

4. 結果

4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析結果

因子分析の結果、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定し、日常面における感性に関わる心理的要因5因子、競技面における感性に関わる行動様式4因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が0.40以上の項目を表3-3-A、表3-3-Bに示した。また、尺度得点により算出した各因子の平均値と標準偏差をグラフ化したものを図3-A、3-Bに表わした。

4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果

表 3-3-A は日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目と因子負荷量を示したものである。

第 1 因子は、利己性、自己中心性、自己中心的行動、調和的姿勢・共感性・素直さ・共感的行動の欠如、友人関係や学校生活でのマイナス面、といった内容の 13 項目が抽出され、主に学校や社会の中で他者と共生する姿勢がなく、利己的な面が示されていたことから、“利己性”因子と命名した。

第 2 因子は、主に、家族間の調和的姿勢や一体感、温かい家庭環境、共感性、といったもので、家族と共感し合い、助け合い、理解し合う内容の 7 項目が抽出され、温かい家庭環境の下にいることや、両親を中心とした家族との相互理解やコミュニケーションについての側面であったことから、“家族間コミュニケーション”因子と命名した。

第 3 因子は、共感性や一体感、表現、誠実さ、友人に対する調和的姿勢、温かい学校環境、といった内容の 5 項目が抽出され、主に、学校や社会の中で他者と共感したり、助け合ったりして交流する側面についての内容であったことから、“共感・友好”因子と命名した。

第 4 因子は、友人関係や動物との親密な関係、温かい環境についての 3 項目が抽出され、友人や動物など周囲と親しく交流している側面が示されていたことから、“親和性”因子と命名した。

第 5 因子は、学校生活への消極的姿勢、直感や感受性の欠如についての 3 項目が抽出され、主に、学校生活に対して消極的で後ろ向きな思いを持っており、直感的な判断が苦手な内向的な側面であったことから、“学校内向性”因子と命名した。

ただし、項目番号 70 については第 3 因子で-0.51、項目番号 54 は第 5 因子で 0.44、項目番号 44 は第 4 因子で 0.40 と、他の因子においても因子負荷量がそれぞれ高かった。したがって、“利己性”因子に含まれている項目番号 70 と項目

番号 54 は、各々、“共感・友好”因子、“学校内向性”因子にも複合的に含まれることになる。また、第 2 因子に含まれている項目番号 44 は“家族間コミュニケーション”因子以外に、“親和性”因子にも複合的に含まれる。

なお、尺度得点により算出した各因子の平均値については、家族間コミュニケーション、共感・友好、親和性が高い傾向にあり、利己性、学校内向性は低い傾向にあった。

表 3-3-A 小学生サッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷 量					共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
75	自己中心的行動・友人関係 (-)	0.84	-0.17	-0.19	-0.06	-0.04	0.77
70	自己中心性	0.80	-0.07	-0.51	0.13	-0.06	0.93
26	利己性	0.66	0.17	0.06	0.17	0.15	0.52
32	調和的姿勢 (-)	0.60	-0.04	-0.04	-0.29	0.13	0.47
82	共感性 (-)	0.58	-0.10	-0.20	-0.02	0.21	0.44
40	自己中心的行動・学校生活 (-)	0.55	-0.02	0.16	0.12	0.27	0.43
54	利己性	0.50	0.17	-0.28	0.12	0.44	0.56
16	共感性 (-)・友人関係 (-)	0.45	0.18	-0.06	-0.08	-0.11	0.26
68	自己中心性	0.46	0.02	-0.06	0.14	0.29	0.31
48	素直さ (-)	0.43	0.10	-0.38	-0.02	0.10	0.35
6	自己中心性・友人関係 (-)	0.43	-0.12	0.01	-0.04	-0.04	0.20
*33	共感的行動・友人関係	-0.55	0.09	0.08	0.18	0.03	0.35
*52	共感的行動	-0.65	0.21	0.01	0.11	-0.04	0.48
47	一体感・調和的姿勢・家族関係	-0.10	0.83	0.27	-0.30	0.00	0.86
67	家族関係・温かい環境	0.03	0.75	-0.23	0.21	-0.20	0.70
11	調和的姿勢・家族関係	-0.37	0.66	0.10	0.06	-0.07	0.59
44	共感性	0.05	0.64	0.10	0.40	0.17	0.61
18	調和的姿勢・家族関係	0.12	0.55	0.09	-0.12	-0.28	0.41
84	家族関係・温かい環境	-0.04	0.53	-0.21	0.28	-0.03	0.41
28	家族関係・一体感	-0.07	0.43	0.03	0.31	-0.07	0.29
49	共感性・一体感	0.07	0.16	0.95	-0.06	0.14	0.97
63	調和的姿勢・友人関係	-0.19	0.17	0.45	0.01	-0.28	0.34
83	表現	-0.10	0.04	0.45	0.23	-0.09	0.27
59	学校生活・温かい環境	-0.26	-0.01	0.41	0.21	-0.35	0.40
*50	誠実さ (-)	0.14	0.18	-0.50	0.16	0.13	0.35
10	友人関係・温かい環境	0.15	0.11	0.28	0.78	-0.19	0.75
77	友人関係・温かい環境	-0.05	0.11	0.01	0.67	-0.14	0.48
80	自然への関心や接触	-0.21	0.07	-0.25	0.53	0.03	0.40
89	学校生活 (-)	-0.09	-0.21	-0.32	0.10	0.73	0.69
36	直感 (-)	0.04	-0.14	0.02	-0.18	0.46	0.27
*34	感受性・学校生活	-0.21	0.03	0.03	0.27	-0.72	0.65
	因子寄与	4.99	3.26	2.78	2.30	2.18	15.51

(-)は項目内容の逆転の意味を示す。*は逆転項目を示す。

4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果

表 3-3- B は、競技面における感性に関わる行動様式の調査項目と因子負荷量を示したものである。第 1 因子は、ゲームの予測、状況把握、状況判断、洞察、独創的なプレー、冷静さ、チームメイトや指導者との間でスムーズな意思の疎通ができてきている様子などといった 13 項目が抽出され、ゲーム中に相手やチームメイト、ボールの動き、ゲームの流れなどといった、勝利を得るために必要な情報を予め掴むような能力に関する内容であったことから“ゲーム予知能力”因子と命名した。

第 2 因子は、チームワーク、洞察、チームメイトとの良好な関係、チームメイトとの一体感や意思の表現されたプレー、などといった 9 項目が抽出され、主にチームでの一体感に関する内容が示されていたことから、“チーム一体感”因子と命名した。

第 3 因子は、競技での利己性や自己中心性、家族のサポートや応援に対する否定的姿勢などについての 6 項目が抽出され、競技能力が高い選手や自分だけは特別である、といったような、主にチームワークを乱す要因となる独善的な考え方や姿勢を示す内容であったことから、“競技エゴイズム”因子と命名した。

第 4 因子は、チームメイトや指導者との関係に問題がある様子、調和的姿勢やリラックスできる環境・冷静な反応の欠如、といった 7 項目が抽出され、チームメイトや指導者との関係、ゲームの状況など、周囲との関係においてリラックスをすることが困難な緊張状態にある内容であったことから、“チーム緊張性”因子と命名した。

ただし、第 3 因子に含まれている項目番号 59 については第 4 因子においても 0.46 と因子負荷量が高かった。したがって、“競技エゴイズム”因子に含まれているこの項目は、“チーム緊張性”因子にも複合的に含まれることになる。

なお、尺度得点により算出した各因子の平均値については、ゲーム予知能力、チーム一体感が高い傾向にあり、競技エゴイズム、チーム緊張性が低い傾向に

あった。

表 3-3-B 小学生サッカー選手の競技面における感性に関わる行動様式の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷 量				共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
57	状況判断	0.69	-0.07	0.18	-0.02	0.52
48	予測	0.66	-0.02	0.16	-0.05	0.46
29	洞察	0.62	0.37	0.04	-0.12	0.53
38	予測	0.55	0.10	-0.32	0.21	0.46
4	予測	0.55	0.28	0.07	-0.11	0.40
7	状況把握	0.55	0.22	0.22	0.06	0.41
31	状況判断・冷静さ	0.52	-0.01	-0.08	-0.18	0.31
2	独創的なプレー	0.51	0.26	-0.09	-0.15	0.36
52	状況把握	0.51	0.24	0.10	-0.03	0.33
16	予測	0.47	0.10	0.21	0.31	0.34
*36	状況判断 (-)	-0.45	-0.06	0.33	0.17	0.27
*51	状況把握 (-)・チームメイトとの関係 (-)	-0.49	0.04	0.04	0.01	0.35
*28	状況把握 (-)・指導者との関係 (-)	-0.51	0.34	-0.35	0.03	0.38
12	チームワーク	0.02	0.61	0.18	-0.14	0.51
41	洞察	0.36	0.60	0.00	0.14	0.54
35	チームメイトとの関係	0.23	0.55	0.15	-0.26	0.42
24	意思の表現されたプレー	-0.05	0.51	-0.22	-0.04	0.28
5	チームワーク	0.22	0.50	0.06	-0.11	0.36
56	洞察・独創的なプレー	0.39	0.49	-0.04	-0.15	0.41
20	チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係	0.39	0.46	0.15	-0.21	0.41
58	チームワーク (-)	-0.05	0.46	-0.16	0.10	0.24
42	チームメイトとの関係	0.03	0.45	0.83	0.11	0.24
33	競技での利己性	-0.14	-0.10	0.83	-0.07	0.72
59	競技での利己性	-0.15	0.36	0.60	0.46	0.72
18	競技での自己中心性	-0.02	-0.01	0.55	-0.02	0.31
63	競技での利己性	-0.08	0.05	0.55	0.03	0.31
13	洞察	0.28	0.14	0.43	0.11	0.29
*9	応援に対する感受性・家族関係	-0.14	0.08	-0.40	0.02	0.19
26	チームメイトとの関係 (-)・調和的姿勢 (-)	0.29	-0.15	-0.06	0.63	0.51
49	リラックスできる環境	0.08	0.20	0.04	0.46	0.25
21	冷静な反応 (-)	-0.16	-0.01	0.08	0.41	0.20
*39	リラックスできる環境・チームメイトとの関係	0.07	0.07	0.12	-0.45	0.23
*65	チームメイトとの関係	-0.05	-0.35	-0.26	-0.47	0.41
*44	リラックスできる環境・指導者との関係	0.17	0.03	-0.08	-0.49	0.28
*37	リラックスできる環境・指導者との関係	0.22	0.38	0.23	-0.57	0.57
	因子寄与	4.82	3.43	2.84	2.45	13.54

(-)は項目内容の逆の意味を示す。*は逆転項目を示す。

図 3-A 小学生サッカー選手の日常尺度の平均値と標準偏差

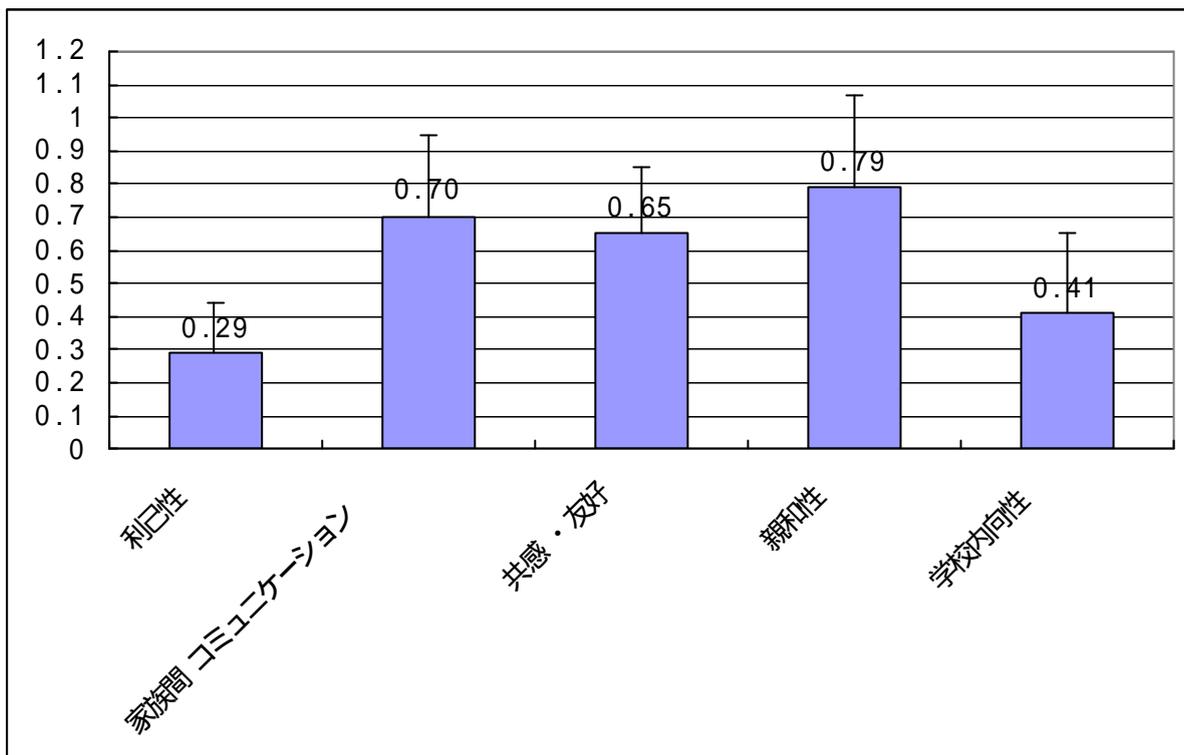
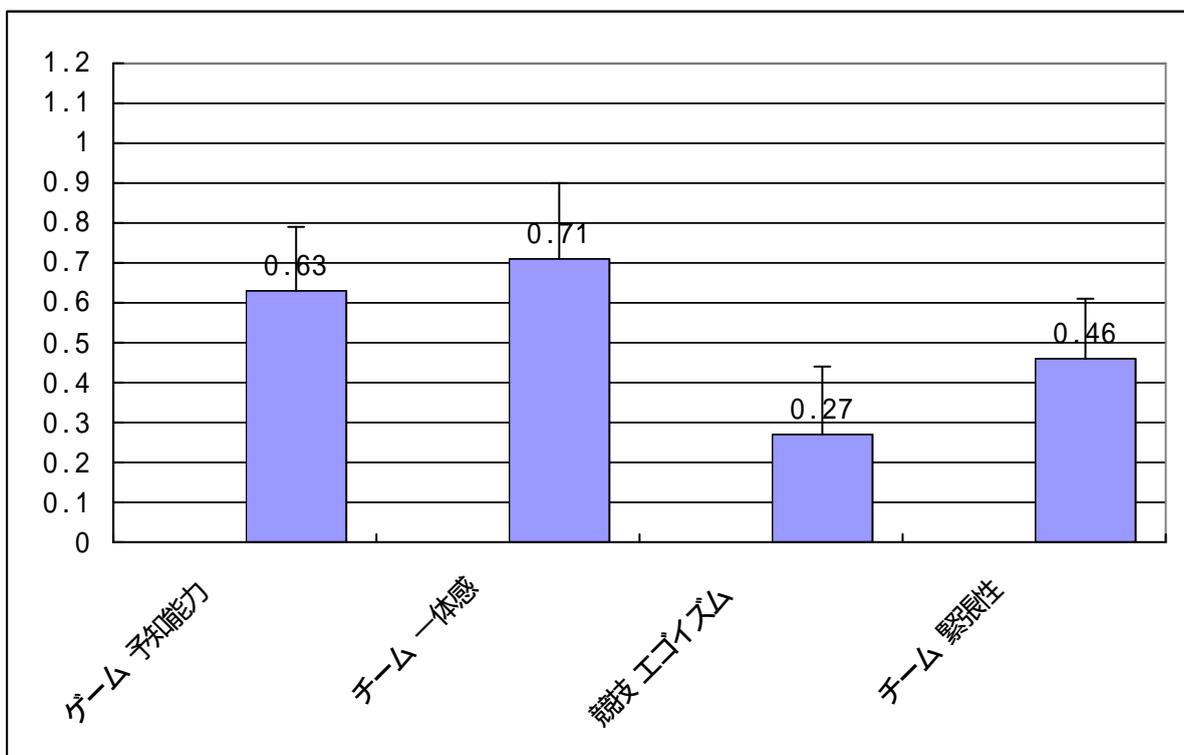


図 3-B 小学生サッカー選手の競技尺度の平均値と標準偏差



4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各因子について尺度得点を用いてそれぞれの相関を求め、その関係について表 3-4 に表記した。5%水準で有意な相関が見られたものについて、主に述べる。

日常面の“利己性”因子は、競技面の“競技エゴイズム”因子、“チーム緊張性”因子との間で各々、有意な正の相関が示され、日常面での利己性は、競技面でのエゴイズムや、チームで緊張状態に置かれていることと関連していた。競技面の“ゲーム予知能力”因子は、日常面の“家族間コミュニケーション”因子、“共感・友好”因子と各々、有意な正の相関が示され、ゲームでの予知能力は、家庭でのコミュニケーション、さらに周囲との共感性や友好関係とやや関連していた。その他については、日常面の“親和性”因子と競技面の“チーム一体感”因子との間で僅かに相関が見られたにとどまった。

次に、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目について相関を求め、相関係数 0.30 以上で 5%水準で有意な 16 組について表 3-5 に示し、第 2 章と本章の「2.2. 調査項目」で設定した項目内容を示す言葉によってその内容を記載した。また、各因子に含まれる 4 組については、A~D の番号を付した。まず、因子に含まれる項目について述べる。

A は日常面の“利己性”因子に含まれる共感的行動（逆転項目）と競技面の“チーム一体感”因子に含まれるチームワークの関連、B は日常面の“親和性”因子に含まれる温かい友人関係と競技面の“チーム一体感”因子に含まれるチームメイトとの関係の関連を示していた。また、C では、日常面における“利己性”因子に含まれる友人に対する自己中心的行動と競技面における“競技エゴイズム”因子に含まれる利己性の関連が、D では日常面の“利己性”因子に含まれる利己性と競技面の“ゲーム予知能力”因子に含まれる状況把握についての関連が示された。

この他、2、3 は日常面での共感性・友人関係と競技面での予測や状況判断・冷静さの関連、5 は日常面での温かい家族環境と競技面での家族のサポートの関連を示していた。6 は日常面での家族に対する素直な態度と競技面での指導者への信頼感を持てるようなリラックスできる環境の関連、7 は日常面での教師への信頼感を持てるような温かい環境とチームでの調和的姿勢の関連であった。8、9 は日常面での想像と競技面でのチームメイトとの一体感や意思の表現されたプレーとの関連であった。10 では日常面での自然への関心や接触と競技面の洞察・独創的なプレーとの関連、11 では日常面での自然への関心や接触・感受性の欠如と競技面での冷静な反応の欠如の関連が示された。また、12 は日常面での自己中心性と競技面での利己性の関連、15、16 は日常面における学校生活での利己的姿勢と競技面における利己性や、冷静な反応の欠如を示していた。

表 3-4 小学生サッカー選手の日常面と競技面の尺度間相関

	競技面/日常面	第1因子 利己性	第2因子 家族間コミュニケーション	第3因子 共感 友好	第4因子 親和性	第5因子 学校内向性
第1因子	ゲーム予知能力	n.s.	r=0.24**	r=0.25**	n.s.	n.s.
第2因子	チーム一体感	n.s.	n.s.	n.s.	r=0.17*	n.s.
第3因子	競技エゴイズム	r=0.25**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
第4因子	チーム緊張性	r=0.37**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ で、有意な相関があることを示す。

数値は相関係数、n. s.は有意な相関が見られなかったことを示す。

表 3-5 小学生サッカー選手の日常項目と競技項目の項目間相関

番号	分類	項目番号	因子名	項目内容	相関係数	有意水準
1	日常面	52	利己性	共感的行動*	r = 0.32	p < .001
A	競技面	5	チーム一体感	チームワーク		
2	日常面	4		共感性・友人関係	r = 0.32	p < .001
	競技面	48	ゲーム予知能力	予測		
3	日常面	3		共感性・友人関係	r = 0.31	p < .001
	競技面	31	ゲーム予知能力	状況判断・冷静さ		
4	日常面	77	親和性	温かい環境・友人関係	r = 0.38	p < .001
B	競技面	35	チーム一体感	チームメイトとの関係		
5	日常面	84	家族間コミュニケーション	温かい環境・家族関係	r = 0.35	p < .001
	競技面	8		家族関係		
6	日常面	76		素直な態度・家族関係	r = 0.31	p < .001
	競技面	37		リラックスできる環境 指導者との関係		
7	日常面	41		温かい環境・教師との関係	r = 0.32	p < .001
	競技面	65		調和的姿勢 チームメイトとの関係		
8	日常面	69		想像	r = 0.38	p < .001
	競技面	20	チーム一体感	チームメイトとの一体感 チームメイトとの関係		
9	日常面	69		想像	r = 0.34	p < .001
	競技面	24	チーム一体感	意思の表現されたプレー		
10	日常面	1		自然への関心や接触	r = 0.30	p < .001
	競技面	56	チーム一体感	洞察・独創的なプレー		
11	日常面	8		感受性(-) 自然への関心や接触(-)	r = 0.30	p < .001
	競技面	21	チーム緊張性	冷静な反応(-)		
12	日常面	56		自己中心性	r = 0.40	p < .001
	競技面	63		競技での利己性		
13	日常面	75	利己性	自己中心的行動・友人関係(-)	r = 0.31	p < .001
C	競技面	59	競技エゴイズム	競技での利己性		
14	日常面	26	利己性	利己性	r = 0.30	p < .001
D	競技面	7	ゲーム予知能力	状況把握		
15	日常面	29		利己的姿勢・学校生活(-)	r = 0.34	p < .001
	競技面	59	競技エゴイズム	競技での利己性		
16	日常面	29		利己的姿勢・学校生活(-)	r = 0.31	p < .001
	競技面	21	チーム緊張性	冷静な反応(-)		

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

A~Dは因子に含まれる項目、~は因子の番号を示す。

5 . 考察

5.1. 日常面における心理的要因

山田（1987）は、サッカー少年団に所属する小学生の特徴として、他人を思いやらない態度の強さや情緒的興奮を報告しているが、第1因子の“利己性”はこうした側面や、サッカー競技の特性として示されるような攻撃的で気性が激しい側面が強調されて表れたとも推測できる。

一方、ハイレベルの選手が順調な競技生活を送るために様々な点で家族の支援が重要であることが指摘されているが（Cote, 1999）、第2因子の“家族間コミュニケーション”は、今回の調査対象者が小学生であることもあり、競技生活を送る上での家族間の親密さが表れた側面と捉えることもできる（高橋ら, 1999）。また、第3因子の“共感・友好”は、向社会的行動（Hoffman, 1982）や周囲との調和を促進する側面であり、スポーツにおいても、すぐれたチームワークの発揮の条件とされ（春木・岩下, 1981）、第4因子の“親和性”も、チーム内での人間関係を円滑にする側面として競技にもプラスに働くと考えられる。さらに、第5因子の“学校内向性”は、小学生サッカー選手が通常の部活動と違って、学校外での競技中心の生活を送っているために学校に対しては疎遠な様子が表れた側面と考えられる。この点については、青木（1995）もスポーツ少年団に所属する小学校高学年児童の特徴として挙げている。Smoll と Smith（1990）は、外向的であることは、スポーツ選手として強い相手や厳しい指導に直面する際に必要とされることを挙げているが、利己的な側面は、小学生選手においては他の因子と共に内向性をカバーするような、むしろ競技に欠かせない積極性的一部分として必要なのかもしれない（江口ら, 1992）。

以上のような特徴と、各尺度の平均値を含めて検討すると、Jリーグ・ジュニア・サッカーチーム所属の小学生選手は、家族とのコミュニケーションを語り、共感し合いながら友好的、親和的に交流するといった、周囲と調和している特性と、利己性や内向性といった、周囲と調和していない特性の両側面を持ち合わせているが、調和している側面は強い傾向にあり、不調和の側面は弱い傾向

にある。したがって、感性という観点では、情報処理はスムーズに行われている傾向にあるといえる。

児童期後半にあたる小学校高学年という年代は、一般に自己中心的な思考を持ち、行動するといった特性は弱まっている時期ではあるものの、その傾向が未だ残っていることが“利己性”として表れたと考えられる(木下, 1982)。しかし、因子として、周囲と調和している側面がむしろ強い傾向にあり、また第2章で述べたように非スポーツ群と比較しても同等程度であることより、利己性の側面については、この時期においては問題視する要因ではないであろう。

5.2. 競技面における行動様式

第1因子の“ゲーム予知能力”はゲームで周囲の状況を把握しながら次の展開を予測した上で効率よく働くために欠かせない情報を予め獲得するという、勝利を得るために重要な要素であり(五島・松本, 1994)、対戦相手の特徴や作戦など意識的にインプットした情報や、それまでの競技経験を通じて心身が無意識的に記憶している様々な感覚情報によっても支えられていると思われる(坂出, 1995)。第2因子の“チーム一体感”は、ベストパフォーマンスの条件であるチームワークや、心身の一体感についての側面と考えられる(太田, 1990; 徳永, 1995)。第3因子の“競技エゴイズム”は日常面の“利己性”と同種の側面が競技にも表面化したものと思われるが、調査対象者がJリーグの下部組織に所属する選手であることから、強い上昇志向を持つことが必要とされ、競技面においても、周囲の状況よりもまず競技能力や自分に対する関心を強めることを重視している側面が表れたと思われる(中塚ら, 1998)。第4因子の“チーム緊張性”は、こうした個人の側面がチーム全体の傾向として示されたと考えられるが、チームメイトや指導者との信頼関係が薄く、リラックスをしにくい緊張した状況に置かれていると考えられる。

以上のような特徴と各尺度の平均値を含めて検討すると、Jリーグ・ジュニア・サッカーチーム所属の小学生選手は、競技面において予知する力があり、

チームメイトとの一体感を持っている傾向が強く、独善的で緊張状態にある傾向は弱いと思われた。競技面においても、日常面と同様、周囲との調和、不調和の両側面の特性が見られたが、調和している傾向が強く、不調和の傾向は弱いといえる。したがって、感性という観点でも、日常面と同様に情報処理がスムーズに行われている傾向にあると考えられる。

5.3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の関連性については、相関係数は、尺度間が最高で 0.37、項目間が最高で 0.38 と、予測したほどの強い関連性は見られなかったが、有意な相関が見られた尺度と項目をまとめて見ていくと、以下のようなことが考察される。

日常面での利己性・利己的行動や自己中心性・自己中心的行動と、競技面での利己性や冷静な反応の欠如、チームで緊張状態に置かれていることと関連が見られたことから、日常面で利己的・自己中心的であることは、競技面でも同様な行動様式にあり、冷静に行動することが必要とされる場面でうまく対応できない状況をチーム全体として作り出すことに影響していると思われる。

また、日常面の共感的行動と競技面のチームワークの関連、日常面の温かい友人関係と競技面のチームメイトとの関係の関連、日常面での共感性・友人関係と競技面での予測や状況判断・冷静さの関連がそれぞれ見られたことは、周囲との良好な人間関係は日常面と競技面で関連しており、日常面での共感性が、ゲームで必要な情報の獲得や冷静さに関わっているといえる。日常面での温かい家族環境と競技面での家族のサポートの関連が示されたことも、家族の温かい支援は日常面と競技面では同様の状況にあると思われる。さらに、日常面での家族に対する素直な態度と競技面での指導者への信頼感を持てるようなリラックスできる環境との関連、日常面での教師への信頼感を持てるような温かい環境とチームでの調和的姿勢の関連がそれぞれ見られたことから、指導者に対する肯定的な感触は日常面と競技面で関連があることや、学校生活で温かさを

感じられることとチームに調和することと関連があると考えられる。

日常面での想像と競技面でのチームメイトとの一体感や意思の表現されたプレーとの関連が示されたことから、感性という観点からは、日常生活での情報の受け取りから処理までの情報の流れのスムーズさは、プレーを通じた情報の発信やチームメイトとの情報の共有をスムーズにすることと関連していると推測できる。また、日常面での自然への関心や接触と競技面の洞察・独創的なプレーとの関連が見られたことから、日常面での自然との交感は、競技面での情報の受け取りから発信までの情報の一連の流れをスムーズにしていることが考えられる。日常面での自然への関心や接触の欠如や感受性の欠如と競技面での冷静な反応の欠如の関連は、自然などの日常面での情報に対する鈍感さが、競技面におけるその場に合った正しい情報の発信を妨げることと関連していることを示していると思われる。

本調査における日常面での利己性は、いわば自分自身の心理的な快適さを追求することに関心が強く、他者の感情や状況に疎いような、周囲への関心が薄い状態である。感性という観点からは、自分にとって都合の良い情報のみを受け入れ、それ以外の情報を入手することが苦手な状況を示している。このような側面と、競技面においてチームで周囲と調和していない状況が関連していた。一部の少年スポーツチームは、技能偏重や結果を重視するような、常に緊張した状態にあり、心情面の指導が疎かになっているという状況があるが（山田，1987）、競技スポーツを行っている子どもは多くの場合、何らかのストレスを感じている（Gould et al.，1993）。このようなことは「防衛機制」のような状況を引き起こすことも懸念される（中西，1999）。チーム内で常に緊張状態に置かれていることは、チーム内でのコミュニケーションが取りにくく、ストレスが溜まる原因にもなり得るため、ストレスから逃れたいという防衛反応が働いて無意識的に情報をシャットアウトしてしまう可能性も考えられる。このように、他者の感情や状況などの情報に疎くなることが、個人の利己性を強めたり、また個人の利己性がチームの不調和を増幅する、といった悪循環を生むと推測で

きる。山本(1988)は、有名スポーツ選手やスポーツ有名校の不祥事を踏まえ、スポーツの厳しい練習が日常面での心理的要因に与えるマイナスの影響について指摘しているが、日常面における周囲との不調和と競技面における不調和は関連していると考えられる。

さらに、日常面における家族や友人など周囲との調和している側面と、競技面において、チームやゲームに融けこみ、調和しているような側面が関連していた。一般に、スポーツを行う利点として社会的調和が促進されるという報告もあるが(Wankel & Berger, 1990)、逆に、日常面で様々な形で他者と交流を行うような周囲との調和が、情報に対する敏感さや適切な処理、さらに最適な情報を発信する、といったような情報処理の訓練になり、競技面でも相手の心理を読んだり、状況を予測したりするような無意識レベルの情報処理を促進させ、ゲームで勝利に必要な情報を入手しやすくする可能性が考えられる。以上のことから、調和、不調和に関わる側面は日常面と競技面で関連していたが、調和、不調和といったことは、感性という観点から考えれば、情報の受け取り、処理、発信・伝達がスムーズになされていることとその反対のことを示していると考えられ、日常面と競技面でのこれらの関連性が示されたことにより、日常面、競技面の各々の場面で扱う情報の種類とそれに伴う心理的要因での相違はあるものの、情報の受け取り、処理、発信・伝達、といった、感性の働く仕組みは何ら変わらないものと考えられる。

今回、Jリーグ・ジュニア・サッカーチーム所属の小学生選手は、その心理的要因から、日常面、競技面共に、周囲と調和している傾向が強いことが明らかになった。同時に、日常面での利己性や競技面での個人またはチームとしての利己的・自己中心的な側面も多少表れていたように、不調和の傾向も見られた。これは、サッカーという競技が、記録やパフォーマンスの美しさを追求するような個人競技ではなく、団体の中で相手チームの選手と駆け引きをしたり、ぶつかり合ったりする中で争いながら点を取り合う、といった特性を持っていることが、競技面だけでなく、日常面にも反映していたり、逆に、普段からこの

ような特徴を持っていることが競技面に表れている可能性も示唆される。しかし、Bredemeier ら（1986）によって、競技のこうした側面が人格発達に悪影響を及ぼすことが指摘されており、成長と共に利己性がこのままの状態であると、人間形成に問題が出てくることが懸念される。したがって、利己性・自己中心性・緊張性といった、周囲との不調和の側面と、周囲との一体感・共感・友好・親和・予知能力といった、周囲との調和の側面をいかにバランス良く成長させてゆくかが、本章の冒頭で述べたような、スポーツ界が担っている社会的役割を果たすことに貢献するような、人間性の基盤となる心理的要因と競技面で良い成績や勝利を得るために必要な行動様式を共に育成する鍵となるだろう。

今回、調査対象者となったエリートの小学生サッカー選手は、競技中心の生活を送っており、競技以外のことには関心が薄かった。日常面において“学校内向性”因子として、学校生活に消極的な側面が表れていたが、競技に偏った生活を送るのではなく、体育以外の授業や学校の行事にも積極的に参加するなどして、学校生活を蔑ろにしないように指導することが必要であろう。

6．本章のまとめ

小学生サッカー選手 172 名を対象として、日常面における感性に関わる心理的要因に関する項目 90、競技面における感性に関わる行動様式に関する項目 68 から成るアンケート調査を実施し、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式との関わりについて、統計的手法を用いて解析を行った。その結果、以下のようなことが得られた。

- 1．日常面における心理的要因の因子としては、利己性、家族間コミュニケーション、共感・友好、親和性、学校内向性、といった因子が抽出された。
- 2．競技面における行動様式の因子としては、ゲーム予知能力、チーム一体感、競技エゴイズムやチーム緊張性、といった因子が抽出された。

3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性については、日常面において周囲と親しく交流しているような調和に関わる側面と、競技面におけるゲームの流れやチームに融けこんでいるような側面が関連を示した。また、日常面における不調和に関わる側面は、競技面における個人・チームの利己性のような不調和に関わる側面との関連が示された。

これらにより、Jリーグ・ジュニア・サッカーチーム所属の小学生選手は、全体として周囲と積極的に関わり、調和している、といった心理的要因を有するものと思われた。さらに、不調和に関しては、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式は一部関連していることが明らかになり、小学生選手については、競技において良い成績を収めるために必要な行動様式と、一人の人間として豊かな人生を送るために欠かせない心理的要因は一部で関連していることが示唆された。

第4章 Jリーグ・ジュニアユース・チーム所属の中学生サッカー選手の 心理的要因について

1. 目的

第3章において、小学生のエリートサッカー選手について、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の特徴や両面の関連性を明らかにした。小学生選手に特徴的に見られた心理的要因は、競技を続けてゆくことでどのように変化してゆくのだろうか。

そこで、本章ではその詳細を見るために、中学生のエリートサッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の特徴を把握し、両面の関連性について探ることを目的とした。

2. 方法

2.1. 調査対象

ジュニア期サッカー選手のモデルケースとして、Jリーグ下部組織のジュニアユース・チーム、4チームに所属する中学生 227名のサッカー選手を対象とした。これらの選手達は年齢 12～15才の、中学1年生 51名、2年生 88名、3年生 88名の男子で、中学1年次以降に適性試験に合格してジュニアユースのサッカーチームに入り、1年を通して平均1週間に1回の割合で試合に出場し、週4回、毎回2時間15分～2時間45分程度の練習を行っている。チームでの1年間の長期休暇は約2週間である。学校では月曜日から金曜日までが平均、約7時間～7時間半、平均睡眠時間は8時間程度である。

2.2. 調査方法ならびに内容

第2章、第3章で設定し、使用した、日常面における感性に関わる心理的要因の90項目、競技面における感性に関わる行動様式の68項目から成る2種類

の質問紙を用い、調査を実施した（表 2-1、表 3-1）。

3．分析方法

収集したデータについては、第 2 章、第 3 章と同様、ほとんど全員の被験者が同一の回答をしているような、分布の極端に歪んだ項目を削除した。日常面における感性に関わる心理的要因については、90 項目中、19、23、25、39、51、65 の 6 項目を、競技面における感性に関わる行動様式については、68 項目中、30、60 の 2 項目を削除し、それぞれ 84 項目、66 項目を分析に使用した。また、回答に不備のあった被験者のデータをあらかじめ削除したところ、有効回答数は 227 名のうち 206 名であった。

本研究においても、第 2 章、第 3 章と同様に、四分相関係数行列を用いて因子分析を行い、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目の構造を調べ、中学生のエリートサッカー選手全体としての傾向を調べた（萩生田・繁樹，1996；柳井ら，1999）。各々の主たる因子を抽出して因子の検討を加え、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定した。また、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の傾向を見るため、尺度得点を用いて各因子の平均値を求めた。さらに、日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性を検討するため、第 3 章と同様、尺度間、項目間それぞれについて、ピアソンの積率相関係数を求めた。

4．結果

4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析結果

因子分析の結果、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定し、日常面における感性に関わる心理的要因 5 因子、競技面における感性に関わる行動様式 4 因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が 0.40 以上の項目を表 4-1-A、表 4-1-B に示した。また、尺度得点により算出した各因子の平均値と標準偏差

をグラフ化したものを図 4-A、4-B に表わした。

4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果

表 4-1-A は日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目と因子負荷量を示したものである。

第 1 因子は、友人関係や教師との関係などを中心とした、利己性や自己中心性、利己的姿勢、自己中心的行動、調和的姿勢・素直さ・共感性・共感的行動の欠如、といった内容の 17 項目が抽出され、主に学校での人間関係において利己的・自己中心的である様子や、社会の中で他者と共生する姿勢が欠けている面が示されていたことから、“利己性”因子と命名した。

第 2 因子は、想像、表現、温かい環境、教師や友人との良好な関係、自然への関心や接触、直感や共感性、などといった内容の 13 項目が抽出され、学校を中心とした人間関係や自然など、周囲との関係において想像力や表現力を働かせている面が示されていたことから、“想像・表現”因子と命名した。

第 3 因子は、主に、一体感、感受性、誠実さ、家庭で温かい環境にいるような家族との良好な関係、といった内容の 7 項目が抽出され、家族を中心とした周囲と一体感を感じている面が示されていたことから、“一体感”因子と命名した。

第 4 因子は、主に、調和的姿勢、地域の人や友人・家族との良好な関係、といった 6 項目が抽出され、地域を中心として広い範囲での周囲との調和やコミュニケーションがとれている面が示されていたことから、“コミュニケーション”因子と命名した。

第 5 因子は、主に、共感性や感受性についての 4 項目が抽出され、主に、友人に対する共感性についての側面が示されていたことから、“共感性”因子と命名した。

ただし、項目番号 56 は第 3 因子で-0.40、項目番号 48 は第 5 因子で-0.42、項目番号 49 は第 5 因子で 0.54、項目番号 53 は第 4 因子で 0.44、項目番号 86 は第

2 因子で 0.40、項目番号 22 は第 1 因子で 0.64 と、これらの項目は他の因子においても因子負荷量が高かった。したがって、“利己性”因子に含まれている項目番号 56 と 48 は、各々、逆転項目として“一体感”因子、“共感性”因子にも複合的に含まれることになる。また、“一体感”因子に含まれている項目番号 49 と 53 は、各々、“共感性”因子、“コミュニケーション”因子にも複合的に含まれる。さらに、“共感性”因子に含まれている項目番号 86 と 22 は、各々、“想像・表現”因子、“利己性”因子にも複合的に含まれる。

なお、尺度得点により算出した各因子の平均値については、一体感、共感性、想像・表現の順に高い傾向にあり、利己性、コミュニケーションはやや低い傾向にあった。

表 4-1-A 中学生サッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷 量					共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
75	自己中心的行動・友人関係(-)	0.84	0.06	0.12	0.01	-0.05	0.72
26	利己性	0.83	0.05	0.00	-0.05	0.02	0.70
54	利己性	0.81	0.04	0.02	-0.08	-0.08	0.68
56	自己中心性	0.60	0.17	-0.40	-0.08	0.00	0.56
70	自己中心性	0.59	0.03	-0.16	0.17	-0.18	0.44
48	素直さ(-)	0.57	0.01	-0.33	0.21	-0.42	0.66
40	自己中心的行動・学校生活(-)	0.56	0.03	-0.39	-0.15	0.04	0.49
73	利己的姿勢・教師との関係(-)	0.55	0.03	-0.25	-0.21	0.01	0.42
68	自己中心性	0.53	0.13	-0.12	-0.18	-0.15	0.37
58	利己性	0.53	-0.10	-0.25	-0.07	-0.05	0.36
32	調和的姿勢(-)	0.52	-0.10	0.04	0.02	-0.19	0.32
82	共感性(-)	0.51	-0.16	0.01	0.00	-0.08	0.29
6	自己中心性・友人関係(-)	0.48	-0.18	-0.12	-0.03	-0.06	0.29
61	自己中心性	0.46	0.17	-0.34	-0.04	-0.15	0.38
29	利己的姿勢・学校生活(-)	0.44	-0.18	-0.16	-0.16	0.10	0.28
78	自己中心的行動	0.41	-0.36	0.06	0.01	0.24	0.36
*33	共感的行動・友人関係	-0.52	0.12	-0.12	0.14	-0.01	0.32
90	直感	0.27	0.78	0.03	0.27	-0.03	0.76
37	教師との関係・温かい環境	-0.26	0.68	0.22	-0.05	0.12	0.59
74	感受性	-0.20	0.63	0.34	-0.13	0.19	0.61
69	想像	-0.18	0.53	0.15	0.07	0.05	0.34
83	表現	0.08	0.53	-0.10	-0.02	-0.05	0.30
21	表現	0.10	0.52	0.04	0.15	0.02	0.31
2	表現	0.07	0.51	-0.20	0.07	-0.17	0.34
57	想像	-0.13	0.50	0.05	-0.05	0.03	0.28
77	友人関係・温かい環境	0.16	0.48	0.02	0.28	-0.05	0.33
64	感受性・自然への関心や接触	-0.29	0.45	-0.02	0.18	0.22	0.37
35	共感性	-0.21	0.44	0.23	0.09	0.27	0.37
88	感受性	0.03	0.44	0.20	0.20	0.26	0.34
*15	感受性(-)	0.05	-0.41	0.06	-0.27	-0.29	0.34
55	感受性・一体感	-0.12	0.02	0.76	-0.06	0.35	0.72
49	感受性・共感性	0.12	0.16	0.75	0.10	0.54	0.91
9	家族関係・温かい環境	-0.07	0.02	0.63	0.16	-0.19	0.46
53	一体感・家族関係	-0.16	0.25	0.54	0.44	-0.05	0.57
47	調和的姿勢・家族関係・一体感	-0.16	0.12	0.52	0.28	0.02	0.39
81	感受性・学校生活	0.10	0.25	0.52	0.10	-0.23	0.41
*50	誠実さ(-)	0.37	0.08	-0.53	0.22	-0.09	0.48
71	調和的姿勢・地域での人間関係	-0.11	-0.08	0.20	0.72	0.29	0.67
79	調和的姿勢	-0.15	0.18	0.24	0.60	-0.23	0.53
18	調和的姿勢・家族関係	-0.13	0.28	0.30	0.60	0.06	0.55
17	調和的姿勢・地域での人間関係	-0.20	0.09	0.00	0.58	0.11	0.40
87	友人関係	0.15	0.10	-0.04	0.57	0.04	0.36
46	感受性・地域での人間関係	-0.29	0.12	-0.03	0.53	0.37	0.51
86	感受性	-0.15	0.40	0.10	0.22	0.73	0.77
22	教師との関係(-)	0.64	0.00	0.15	-0.14	0.66	0.89
4	共感性・友人関係	-0.21	-0.05	-0.11	0.10	0.48	0.30
3	共感性・友人関係	-0.16	0.10	0.06	0.34	0.46	0.37
	因子寄与	7.21	4.64	3.99	3.34	2.97	22.16

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果

表 4-1-B は、競技面における感性に関わる行動様式の調査項目と因子負荷量を示したものである。

第 1 因子は、ゲームの予測、状況把握、状況判断、洞察、独創的なプレー、などといった 12 項目が抽出され、ゲーム中に相手やチームメイト、ボールの動き、ゲームの流れなどといった、勝利を得るために必要な情報を予め掴むような能力に関する内容であった。これは、小学生選手の第 1 因子とほぼ同様の内容であったことから“ゲーム予知能力”因子と命名した。

第 2 因子は、チームメイトや指導者との良好な関係、チームメイトとの一体感、サッカーとの接触や関心、競技や応援に対する感受性、リラックスできる環境、などといった 10 項目が抽出され、主に周囲との良好な関係や萎縮せずにリラックスして過ごしているような環境の中で一体感を得ることに関する内容が示されていたことから、“競技一体感”因子と命名した。

第 3 因子は、利己性、自己中心性、調和的姿勢の欠如、チームメイトへの否定的姿勢についての 3 項目が抽出され、主にチームワークを乱す要因となる独善的な考え方や姿勢を示す内容であったことから、“競技エゴイズム”因子と命名した。

第 4 因子は、冷静さ、チームメイトとの調和した関係やチームワーク、といった 4 項目が抽出され、チームメイトとの関係やゲームの状況など、周囲との関係において冷静で協調的に行動している側面が示されていたことから、“協調性”因子と命名した。

ただし、項目番号 5 は第 4 因子で 0.40、項目番号 44 は第 1 因子で 0.47 と、これらの項目は他の因子においても因子負荷量が高かった。したがって、“ゲーム予知能力”因子に含まれている項目番号 5 は、“協調性”因子、“競技一体感”因子に含まれている項目番号 44 は、“ゲーム予知能力”因子にも複合的に含まれることになる。

なお、尺度得点により算出した各因子の平均値については、協調性が最も高

く、次に競技一体感、ゲーム予知能力が高い傾向にあり、競技エゴイズムが最も低い傾向にあった。

表 4-1-B 中学生サッカー選手の競技面における感性に関わる行動様式の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷 量				共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
29	洞察・状況判断	0.74	-0.01	-0.08	-0.06	0.55
48	予測	0.60	0.37	-0.08	-0.25	0.57
57	状況判断	0.57	0.20	-0.24	0.07	0.42
7	状況把握	0.52	0.04	0.10	-0.07	0.29
2	独創的なプレー	0.52	0.05	0.02	-0.16	0.30
5	チームワーク	0.52	0.09	-0.27	0.40	0.51
52	状況把握	0.52	0.36	0.19	0.31	0.52
38	予測	0.49	0.14	-0.19	-0.08	0.31
56	洞察・独創的なプレー	0.47	0.02	0.03	0.19	0.26
41	洞察	0.46	0.19	0.04	0.35	0.37
4	予測	0.44	0.24	0.37	-0.18	0.42
*36	状況判断(-)	-0.48	-0.01	0.30	0.02	0.33
62	サッカーとの接触や関心	0.18	0.74	-0.14	-0.02	0.61
35	チームメイトとの関係	0.17	0.61	-0.10	-0.19	0.45
37	指導者との関係・リラックスできる環境	0.04	0.51	-0.30	0.10	0.36
20	チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係	0.31	0.50	-0.08	0.21	0.40
50	チームメイトとの関係	0.37	0.50	-0.18	-0.06	0.42
45	サッカーとの接触や関心	-0.06	0.47	-0.01	0.33	0.34
34	競技に対する感受性	0.17	0.44	-0.05	0.03	0.22
*51	状況把握(-)・チームメイトとの関係(-)	-0.06	-0.44	-0.17	-0.11	0.24
*3	応援に対する感受性(-)	0.04	-0.48	0.13	-0.23	0.30
*44	指導者との関係・リラックスできる環境	0.47	-0.53	0.01	0.06	0.51
15	競技での利己性	-0.04	-0.22	0.77	-0.13	0.66
66	調和的姿勢(-)・チームメイトとの関係	-0.11	-0.08	0.72	-0.15	0.55
18	競技での自己中心性	-0.16	-0.12	0.63	-0.14	0.46
46	冷静さ	-0.08	-0.03	-0.29	0.68	0.55
11	チームワーク	-0.23	0.25	-0.26	0.43	0.36
*26	調和的姿勢(-)・チームメイトとの関係(-)	0.08	-0.07	0.32	-0.51	0.37
*55	冷静さ(-)	-0.08	-0.09	-0.02	-0.70	0.51
	因子寄与	4.08	3.39	2.41	2.28	12.16

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

図 4-A 中学生サッカー選手の日常尺度の平均値と標準偏差

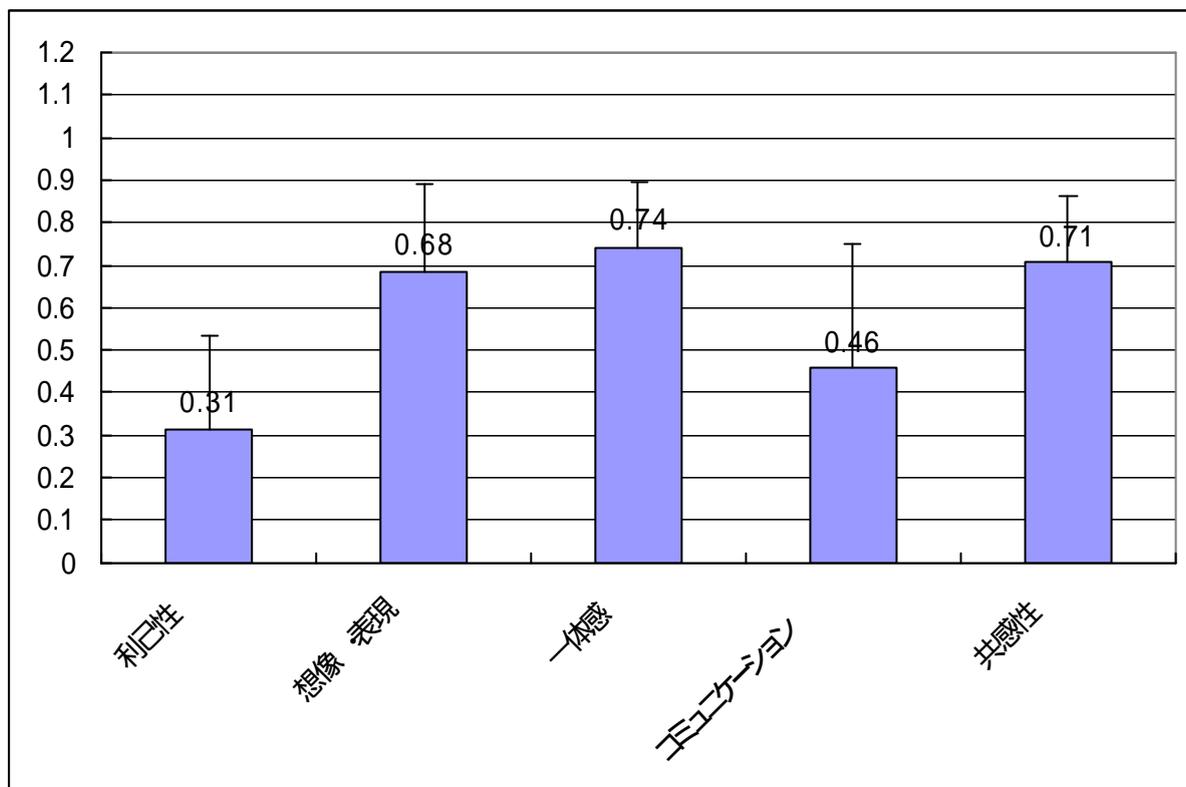
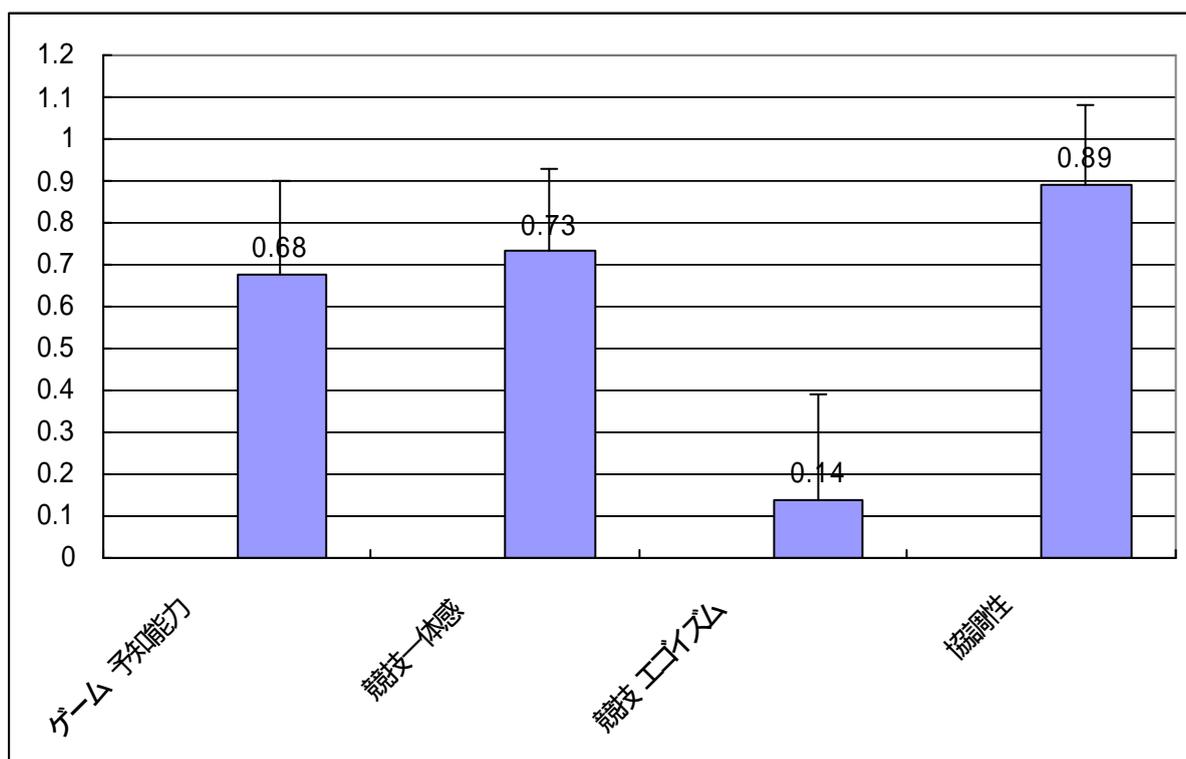


図 4-B 中学生サッカー選手の競技尺度の平均値と標準偏差



4.2. 日常面に心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各因子について尺度得点を用いてそれぞれの相関を求め、その関係について表 4-2 に表記した。5%水準で有意な相関が見られたものについて、主に述べる。

日常面の“利己性”因子は、競技面の“競技エゴイズム”因子との間で有意な正の相関が、“競技一体感”因子、“協調性”因子との間では有意な負の相関が示され、日常面での利己性は、競技面でのエゴイズムや、競技での一体感や協調性の欠如と関連していた。日常面の“想像・表現”因子は競技面の“ゲーム予知能力”因子との間で有意な正の相関が見られ、日常面での想像力や表現力は競技での予知能力と関連していた。日常面の“コミュニケーション”因子は競技面の“競技一体感”因子と有意な正の相関が示され、日常面でのコミュニケーションと競技での一体感は関連していた。また、いずれも値は低いが、日常面の“想像・表現”因子と競技面の“競技一体感”因子、日常面の“一体感”因子と競技面の“ゲーム予知能力”因子、“競技一体感”因子、日常面の“コミュニケーション”因子と競技面の“ゲーム予知能力”因子、“協調性”因子の間で各々、有意な正の相関が見られた。さらに、競技面の“競技エゴイズム”因子と日常面の“コミュニケーション”因子、“共感性”因子の間で各々、有意な負の相関が示された。

次に、日常面に関わる感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目について相関を求め、相関係数 0.30 以上で 5%水準で有意な 16 組について表 4-3 に示し、第 2 章、第 3 章の「2.2. 調査方法ならびに内容」で設定した項目内容を示す言葉によってその内容を記載した。また、各因子に含まれる 8 組については、番号の下に A~H と付した。まず、因子に含まれる項目について述べる。

A、B、C は日常面の“想像・表現”因子に含まれる直感と競技面の“ゲーム予知能力”因子に含まれる予測や洞察、独創的なプレーの関連を示していた。

また、D、Eでは、日常面における”利己性“因子に含まれる友人に対する非共感的行動と競技面における”競技エゴイズム“因子に含まれる利己性、自己中心性の関連が見られた。F~Hでは日常面の”利己性“因子に含まれる利己性や自己中心性、友人に対する自己中心的行動と、競技面の”協調性“因子に含まれるチームメイトに対する調和的姿勢の欠如についての関連が示された。

この他、4、5は競技面でのチームメイトとの良好な関係や一体感と、日常面での友人との良好な関係を築いているような温かい環境、気持ちの自由な表現との関連を示していた。6と8は競技面での家族からの応援に対する肯定的な感じ方や家族との良好な関係と、日常面での家族との一体感や良好な関係との関連であった。7は日常面での家族からの理解を感じている温かい環境にいることと、競技面での家族のサポートの関連を示していた。9は日常面での友人に対する誠実さとサッカーへの関心との関連、10は自然への関心や接触とゲームの状況把握の関連であった。11は日常面での友人に対する共感的行動と競技面でのチームメイトに対する調和的姿勢の関連を示していた。

表 4-2 中学生サッカー選手の日常面と競技面の尺度間相関

	競技面/日常面	第1因子 利己性	第2因子 想像・表現	第3因子 一体感	第4因子 コミュニケーション	第5因子 共感性
第1因子	ゲーム予知能力	n.s.	r=0.33***	r=0.15*	r=0.23**	n.s.
第2因子	競技一体感	r=-0.32***	r=0.23**	r=0.15*	r=0.36**	n.s.
第3因子	競技エゴイズム	r=0.33***	n.s.	n.s.	r=-0.14**	r=-0.14**
第4因子	協調性	r=-0.43***	n.s.	n.s.	r=0.13**	n.s.

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意な相関があることを示す。

数値は相関係数、n.sは有意な相関が見られなかったことを示す。

表 4-3 中学生サッカー選手の日常項目と競技項目の項目間相関

番号	分類	項目番号	因子名	項目内容	相関係数	有意水準
1	日常面	90	想像・表現	直感	r= 0.35	p < .001
A	競技面	48	ゲーム予知能力	予測		
2	日常面	90	想像・表現	直感	r= 0.33	p < .001
B	競技面	29	ゲーム予知能力	洞察		
3	日常面	90	想像・表現	直感	r= 0.32	p < .001
C	競技面	2	ゲーム予知能力	独創的なプレー		
4	日常面	77	想像・表現	友人関係・温かい環境	r= 0.40	p < .001
	競技面	35		チームメイトとの関係		
5	日常面	24		表現 (-)	r= 0.30	p < .001
	競技面	19		チームメイトとの一体感 (-) チームメイトとの関係 (-)		
6	日常面	53	一体感	一体感・家族関係	r= 0.34	p < .001
	競技面	9		応援に対する感受性・家族関係		
7	日常面	84		家族関係・温かい環境	r= 0.35	p < .001
	競技面	8		家族関係		
8	日常面	67		家族関係・温かい環境	r= 0.30	p < .001
	競技面	9		応援に対する感受性・家族関係		
9	日常面	23		誠実さ・友人関係	r= 0.33	p < .001
	競技面	45	競技一体感	サッカーとの接触や関心		
10	日常面	12		自然への関心や接触	r= 0.30	p < .001
	競技面	52	ゲーム予知能力	状況把握		
11	日常面	33	利己性	共感的行動・友人関係*	r= 0.33	p < .001
	競技面	65		調和的姿勢		
12	日常面	33	利己性	共感的行動・友人関係*	r= -0.31	p < .001
D	競技面	15	競技エゴイズム	競技での利己性		
13	日常面	70	利己性	自己中心性	r= 0.32	p < .001
E	競技面	18	競技エゴイズム	競技での自己中心性		
14	日常面	54	利己性	利己性	r= 0.31	p < .001
F	競技面	26	協調性	調和的姿勢 (-) チームメイトとの関係 (-)*		
15	日常面	26	利己性	利己性	r= 0.36	p < .001
G	競技面	26	協調性	調和的姿勢 (-) チームメイトとの関係 (-)*		
16	日常面	75	利己性	自己中心的行動・友人関係 (-)	r= 0.41	p < .001
H	競技面	26	協調性	調和的姿勢 (-) チームメイトとの関係 (-)*		

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

A~Hは因子に含まれる項目、~は因子の番号を示す。

5. 考察

5.1. 日常面における心理的要因

一般に、中学生という年代は、自我に目覚めるものの、内的衝動と発達課題としての外圧、といった内外界の圧力により、自我が弱く不安定になり、激しい自我拡張感と自我収縮感が入り乱れて生じる時期である（北村，1991）。自我は拡張の方向に動くことで健全な人格発達を遂げるが、拡張と収縮の間で揺れ動いている中で、中学生は利己性と利他性など、相反するような特徴が時と場に応じて現れるような心理的動揺が見られるという（吉田，1990）。こうした状況の中で、小学生選手において第1因子に見られた“利己性”が中学生選手にも同様に表れていたのは、自我を防衛しようとする反動で一時的に自己主張が強くなる場合があることも一因と考えられる。したがって、“利己性”は、このような成長過程における一般的な中学生の特性といえる。

一方、中学生は、知的創造性や、自らの内面を見る目が発達し始め、それを形として表現する力が育ってくる時期でもある（詫摩・安香，1987）。つまり、内界の情報に敏感になり、その情報を形にして外界に表出する力がついてくるといえる。第2因子の“想像・表現”は、このような側面が示されたと思われる。

また、調和的一体感に欠けるという中学生の一般的特徴に反し（村瀬，1996）今回の調査結果では、第3因子において家族を中心としての“一体感”、第4因子において家族以外の人々も含めた“コミュニケーション”が特徴として示された。“一体感”では、主に、家庭で安らぎを感じ、融け込んでいる様子や喜怒哀楽を分かち合う様子が見られたが、これは、どのような競技においても、ハイレベルのジュニア選手は競技生活を送る上で家族のサポートを得ることが多いため（Cote，1999）感性の観点で言えば、競技を通じて情報を共有することが多い側面が表れたものと推測できる。さらに、家族だけでなく、学年の異なる友人や地域の人など様々な人々と調和し、交流している側面が示されたことは、中学生は家庭中心だった小学生よりも行動範囲が広がり、クラブを中心と

した家庭外での交流が中心になることが、全般的に社交的な側面として表れたと捉えることもできる（高橋ら，1999）。

Hoffman(1972)は、“共感性”を道徳性の情意的側面として強調しているが、スポーツにおいても、すぐれたチームワークの発揮の条件とされていることから、人間性の育成に関わる重要な側面であるだけでなく、競技面でも重視されるべき特徴と考えられる（春木・岩下，1981）。これは、小学生選手と同じ特徴であった。

以上のような特徴と、各因子の平均値を含めて検討すると、Jリーグ・ジュニアユース・チーム所属の中学生サッカー選手は、共感性や想像力、表現力があり、周囲とコミュニケーションをはかり、一体感を感じているといった、周囲と調和している特性と、利己性のような周囲と調和していない特性の両面を持ち合わせていると思われる。しかし、調和している側面が強い傾向にあり、不調和の側面は弱い傾向にあるといえる。したがって、感性という観点では、情報処理がスムーズな傾向にあるといえる。

5.2. 競技面における行動様式

“ゲーム予知能力”は、小学生においても第1因子として抽出された。これは、どの競技においても競技パフォーマンスに直結する重要なスキルとして挙げられている状況判断を中心とした情報の収集と処理に関わる側面であり、中学生選手においてもその重要度は変わらないと思われる（今中，1998；関矢，2000）。第2因子の“競技一体感”は、日常面における第3因子と同様の側面が競技面にも表れたと考えられ、チームメイトや指導者との信頼関係やコミュニケーション、一体感、さらに観客の応援を心地良く感じているような状況など競技に関わる人との一体感や、競技力を向上させるために必要なサッカーの実技に関する情報に対する敏感さについての側面であった。つまり、競技で力を発揮するために必要な情報の流れがスムーズな側面が示されたといえる。第3因子の“競技エゴイズム”は日常面の“利己性”と同様の側面が競技にも表わ

れたものと思われるが、小学生選手と同様、強い上昇志向を持つことが必要とされ、競技面においても、周囲の状況よりもまず自分自身の能力を向上させることを重視している側面が表れたと考えられる（中塚ら，1998）。第4因子の”協調性“は、スポーツ選手に必要とされる心理的競技能力を備えている側面が示されたと考えられるが（磯貝ら，1993）因子として最も高い平均値にあることから、チームとして機能するために欠かせない要素であることを理解し、実践している特徴が表れたものと推測できる。

以上のような特徴と各因子の平均値を含めて検討すると、Jリーグ・ジュニア・ユースチーム所属の中学生サッカー選手は、競技面において予知する力があり、競技に関わる周囲との一体感を感じている傾向が強く、協調性に富み、利己的な特性が弱いと思われる。したがって、競技面においても、日常面と同様、ゲームの流れやチームに融けこんでいる傾向にあり、感性という点でも情報処理がスムーズに行われているといえる。

5.3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の関連については、相関係数が0.30以上で有意な相関が見られたのは尺度間で5組、項目間では16組であった。有意な相関が見られた尺度と項目をまとめて見ていくと、以下のようなことが考察される。

日常面において共感的行動に欠け、自己中心的で友人関係がうまくいっていない、といったことが、競技面で協調性に欠け、自己中心的でチームメイトとの関係に支障がある、といったことと関連していた。また、競技面でのチームメイトとの良好な関係や一体感と、日常面での友人との良好な関係を築いているような温かい環境にいることや気持ちの自由な表現の関連、日常面での友人に対する共感的行動と競技面でのチームメイトに対する調和的姿勢の関連がそれぞれ見られたことから、日常面、競技面での利己性や人間関係の状況は両面に互いに影響を与え合うことが考えられる。競技面での家族からの応援に対す

る肯定的な感じ方や家族との良好な関係と、日常面での家族との一体感や良好な関係との関連、日常面での家族からの理解を感じている温かい環境にいることと、競技面での家族のサポートの関連が見られたことは、家族からの理解や支援を得られているような良好な家族関係は日常面と競技面で関連しており、両面における家族関係が互いに好影響をもたらしていることが推察される。また、日常面でのコミュニケーションが競技面での一体感と関連していたことから、日常面で周囲と積極的に交流をはかることは、感性という観点では情報交流を活発にし、その活発さは競技面で勝利に必要な周囲との調和一体感を生むことに貢献すると思われる。日常面での直感や想像力、表現力は競技面での予測や洞察、独創的なプレーといったゲーム予知能力と関連していたことから、日常面で情報を受け取り、処理し、発信するという情報の流れがスムーズである様子と、競技面で重要とされるボールの軌跡を予測したり、相手の動きを読んだりするような直感的情報の収集や、その情報を元にした瞬間的判断による情報処理、さらには処理した情報をプレーとして表現する情報の発信、といった情報の流れのスムーズさと関連しており、感性という観点では、日常面と競技面における情報処理のスムーズさは関連していると思われた。

さらに、日常面での友人に対する誠実さとサッカーへの関心とが関連していたことから、感性という観点では、日常面での他者に対する情報の正確な発信と競技面で必要な情報の獲得に貪欲なことと関連していると思われる。また、自然への関心や接触とゲームの状況把握が関連していたことは、日常面での自然との関わりと競技面での情報に対する敏感さが関連していることが示唆される。

以上のような点で、中学生選手においては、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式は中等度の関連があり、小学生選手と同様、周囲との一体感などの調和に関わる側面と利己性のような不調和に関わる側面について各々、関連が示されたことになる。また、情報の流れのスムーズさについても、日常面と競技面での関連があったといえる。したが

って、両面における感性に関わる心理的要因と行動様式を育成することは、双方の面に良い効果をもたらすことが示唆される。つまり、競技面で勝利に必要なゲーム予知能力や協調性、一体感、といった側面を育成し、チームワークを乱す要因となるエゴを抑えるためには、日常面での利己性を抑制し、共感性を高め、周囲とコミュニケーションをはかって一体感を感じられるような良好な人間関係を築き、自然と触れ合いながら想像力や表現力を養うことが求められることになる。

今回の調査結果では、利己性は因子として抽出されていたものの、傾向は弱く、日常面における利己性も同様であった。ただし、両面での利己性は関連しており、利己性は日常面では強すぎると人間形成に支障をきたしたり、競技面ではチームワークを乱すマイナス要因となる。したがって、中学生選手においては自我の収縮と拡張のバランスを維持する努力が必要と考えられる（吉田，1990）。

また、日常面、競技面共に、中学生の一般的特徴である内向的な側面や、調和一体感に欠けるような様子も見られなかった。これは、サッカーがチームスポーツであり、チームワークや周囲とのコミュニケーションを必要とされることや（阿江，1985）レギュラーを獲得したり、獲得してからも常に上昇志向を持つことを要求される状況にあるために小学生に見られた外向的な側面が一方で継続しているためと推測できる。このような外向的な側面は、学業や競技力の向上など、年齢が上がるにつれて強まってくる日常面、競技面、両面でのストレスを内に溜めないことに役立っている面もあると推測される。

Jリーグ・ジュニアユース・チーム所属の中学生サッカー選手については、感性に関わる心理的要因は、小学生選手より日常面と競技面の関連性が多く見られた。これは、一つには、小学生においては自我の確立、中学生においては自我の収縮と拡大への揺れ動きといった成長過程に応じた自我の状態の相違による可能性が考えられる（平岡，1989）。また、サッカーチームで過ごす時間が小学生より全体的に長くなるため、競技面における行動様式が日常面における心

心理的要因の育成に影響を与える部分が小学生選手より増えていることも推測される。今回の結果では、利己性の強さよりも、周囲との調和一体感が特徴的であったことから、中学生のエリートサッカー選手の自我は、揺れ動いている中でも、どちらかと言えば拡大している傾向が強いと考えられる。ゆえに、この拡大を抑制しないことがその後の人間的成長と競技面での向上には欠かせないものと思われる。

6 . 本章のまとめ

中学生サッカー選手 227 名を対象として、日常面における感性に関わる心理的要因に関する 90 項目、競技面における感性に関わる行動様式に関する 68 項目から成るアンケート調査を実施し、日常面における心理的要因と競技面における心理的要因との関わりについて、統計的手法を用いて解析を行った。その結果、以下のようなことが得られた。

- 1 . 日常面における心理的要因の因子としては、利己性、想像・表現、一体感、コミュニケーション、共感性、といった因子が抽出された。
- 2 . 競技面における行動様式の因子としては、ゲーム予知能力、競技一体感、競技エゴイズム、協調性、といった因子が抽出された。
- 3 . 日常面における心理的要因と競技面の行動様式は、利己性や人間関係の状況を中心に、調和と不調和の側面について各々、関連が見られた。感性という観点では、情報交流の活発さや情報処理のスムーズさの点で、関連が示された。

これらにより、Jリーグ・ジュニア・ユースチーム所属の中学生サッカー選手は、小学生選手と同様、日常面、競技面共に利己的な側面があるものの、小学生と異なる点としては、日常面では想像力や表現力が養われ、チームでは協調的な状態にあることがわかった。全体的な傾向としては周囲と調和一体感を感

じている、といった心理的要因を有するものと思われた。さらに、周囲との調和、不調和の点では、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式は小学生選手よりも多く関連があることが明らかになり、中学生選手については、競技において良い成績を収めるために必要な行動様式と、一人の人間として豊かな人生を送るために欠かせない心理的要因は小学生選手よりも関連が強いことが示唆された。

第5章 Jリーグ・ユース・チーム所属の高校生サッカー選手の心理的要因について

1. 目的

第3章では小学生のエリートサッカー選手、第4章では中学生のエリートサッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の特徴と両面の関連について明らかにした。本章においても、第4章と同様に、エリート・ジュニアサッカー選手の心理的要因が競技経験によってどのように変化するかを探るため、さらに上の成長段階にある高校生のエリートサッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の特徴を把握し、両面の関連性について調査・検討を行うことにした。

2. 方法

2.1. 調査対象

ジュニア期サッカー選手のモデルケースとして、Jリーグ・ユース・チーム、4チームに所属する高校生103名のサッカー選手を対象とした。これらの選手達は年齢15~18才の、高校1年生35名、2年生36名、3年生32名の男子で、中学3年時に適性試験に合格してサッカーチームに所属し、1年を通して平均1週間に1~2回の割合で試合に出場し、週5回、毎回2時間~2時間半程度の練習を行っている。チームでの1年間の長期休暇は1週間程度であり、2年に1回は海外遠征をしている。学校で過ごす時間は月曜日から金曜日までが平均、約7時間~7時間半、土曜日は約4.5時間であり、平均睡眠時間は約6時間半~7時間である。

2.2. 調査方法ならびに内容

第2章、第3章、第4章で使用した、日常面における感性に関わる心理的要因の90項目、競技面における感性に関わる行動様式の68項目から成る2種類の調査票を用い、第3章、第4章と同様に調査を実施した。

3. 分析方法

収集したデータについては、ほとんど全員の被験者が同一の回答をしているような、分布の極端に歪んだ項目を削除した。日常面における感性に関わる心理的要因については、90項目中3、4、5、15、19、23、25、39、48、51、55、65、82、86の14項目を、競技面における感性に関わる行動様式についても68項目中、30、45、60、64、66の5項目を削除し、それぞれ76項目、63項目を分析に使用した。有効回答数は103名であった。

本研究においても、第2章、第3章、第4章と同様に、四分相関係数行列を用いて因子分析を行い、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目の構造を調べ、高校生のエリートサッカー選手全体としての傾向を調べた(萩生田・繁樹, 1996; 柳井ら, 1999)。各々の主たる因子を抽出して因子の検討を加え、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定した。また、日常面における感性に関わる心理的要因および競技面における感性に関わる行動様式の傾向を見るため、尺度得点を用いて各因子の平均値を求めた。

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の関連性を検討するため、本章においても第3章、第4章と同様、尺度間、項目間それぞれについて、ピアソンの積率相関係数を求めた。

4. 結果

4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析結果

因子分析の結果、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定し、最終的に日常面における感性に関わる心理的要因4因子、競技面における感性に

関わる行動様式 4 因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が 0.40 以上の項目を表 5-1-A、表 5-1-B に示した。また、各因子の平均値と標準偏差をグラフ化したものを図 5-A、5-B に表わした。

4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果

表 5-1-A は日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目と因子負荷量を示したものである。

第 1 因子は、主に、学校生活や友人関係を中心とした利己性、自己中心性、自己中心的行動、直感の欠如、感受性、想像、共感性、などといった内容の 14 項目が抽出され、主に学校や社会の中で他者と共生する姿勢がなく、利己的であるが、やや多感的な側面が示されていたことから、“利己的・多感”因子と命名した。

第 2 因子は、表現、想像、調和的姿勢、共感的行動、学校での温かい環境、家庭・地域・学校での良好な人間関係、自然との接触や関心、といった 15 項目が抽出され、主に、周囲と調和した状況の中で気づきを得たり、自分の意思を表現している側面が示されていたことから、“気づき・表現”因子と命名した。

第 3 因子は、家族や教師との関係の中での素直さや素直な態度、一体感、自然との接触の中での感受性、といった内容の 7 項目が抽出され、主に、周囲の人間関係や事象に対して素直に受け止めて行動し、一体感を感じている側面が示されていたことから、“一体感”因子と命名した。

第 4 因子は、自己中心性、表現・調和的姿勢の欠如についての内容の 3 項目が抽出され、周囲に対して冷淡で薄情な側面が示されていたことから、“冷淡さ”因子と命名した。

ただし、項目番号 6 は第 3 因子で 0.45、項目番号 44 と 60 は第 2 因子で、各々、0.44、0.51、項目番号 88 は第 2 因子で 0.51、第 3 因子で 0.40、項目番号 36 は第 2 因子と第 4 因子で共に 0.48 と、これらの項目は他の因子においても因子負荷量が高かった。したがって、これらの項目はすべて“利己的・多感”因子に含

まれているが、項目番号 6 は“ 一体感 ” 因子、項目番号 44 と 60 は “ 気づき・表現 ” 因子に、項目番号 88 は “ 気づき・表現 ” 因子と “ 一体感 ” 因子に、項目番号 36 は “ 気づき・表現 ” 因子と “ 冷淡さ ” 因子にも複合的に含まれることになる。また、項目番号 59、41、37 は第 3 因子で、各々、0.41、0.47、0.47、項目番号 63、83、13、57、33 は、各々、第 1 因子で 0.44、0.46、0.53、0.59、0.46、第 3 因子で 0.44、0.45、0.40、0.40、0.41、項目番号 21 と 12 は各々、第 1 因子で 0.51、0.46 と、これらの項目も他の因子で因子負荷量が高かった。ゆえに、これらの項目はすべて “ 気づき・表現 ” 因子に含まれているが、項目番号 59、41、37 は “ 一体感 ” 因子に、項目番号 63、83、13、57、33 は “ 利己的・多感 ” 因子と “ 一体感 ” 因子に、項目番号 21 と 12 は “ 利己的・多感 ” 因子にも複合的に含まれる。さらに、項目番号 7、20、67、53 は第 2 因子で 0.40、0.44、0.44、0.52、項目番号 47 は第 1 因子と第 2 因子で、0.47、0.48、項目番号 28 は第 1 因子で 0.43、第 2 因子で 0.53 と、他の因子においても因子負荷量が高かった。よって、これらの項目はすべて “ 一体感 ” 因子に含まれているが、項目番号 7、20、67、53 は “ 気づき・表現 ” 因子、項目番号 28 と 47 は、“ 利己的・多感 ” 因子と “ 気づき・表現 ” 因子にも複合的に含まれるといえる。“ 冷淡さ ” 因子に含まれている項目番号 32 は、第 1 因子でも 0.45 とやはり因子負荷量が高かったことから、“ 利己的・多感 ” 因子に複合的に含まれる。

なお、尺度得点により算出した各因子の平均値については、気づき・表現が高い傾向にあり、その他の因子はいずれも 0.50 以下であったが、利己的・多感、一体感は比較的高い傾向にあり、冷淡さは低い傾向にあった。

表 5-1-A 高校生サッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子負荷量				共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
40	自己中心的行動・学校生活(-)	0.86	0.24	0.18	0.21	0.87
6	自己中心性・友人関係(-)	0.80	0.05	0.45	-0.24	0.90
89	学校生活(-)	0.78	0.29	0.15	0.32	0.82
56	自己中心性	0.77	0.30	0.10	0.31	0.79
54	利己性	0.72	0.33	0.09	0.31	0.73
44	共感性	0.69	0.44	0.27	0.28	0.82
26	利己性	0.68	0.36	0.31	0.31	0.79
88	感受性	0.66	0.51	0.40	0.26	0.92
68	自己中心性	0.65	0.60	0.15	0.07	0.80
1	自然への関心や接触	0.62	0.18	0.35	0.21	0.58
60	想像	0.62	0.51	0.18	0.10	0.68
58	利己性	0.58	0.34	0.22	0.35	0.62
78	自己中心的行動	0.54	0.34	0.14	0.25	0.49
36	直感(-)	0.54	0.48	0.21	0.48	0.79
2	表現	0.28	0.81	0.21	0.21	0.82
59	学校生活・温かい環境	0.22	0.79	0.41	0.10	0.85
14	学校生活	0.21	0.75	0.26	0.19	0.72
63	調和的姿勢・友人関係	0.44	0.71	0.44	0.31	0.99
11	調和的姿勢・家族関係	0.37	0.69	0.38	0.35	0.88
17	調和的姿勢・地域での人間関係	0.33	0.68	0.34	0.30	0.77
83	表現	0.46	0.67	0.45	0.19	0.91
41	教師との関係・温かい環境	0.29	0.65	0.47	-0.06	0.73
13	共感性・友人関係	0.53	0.65	0.40	0.36	0.99
57	想像	0.59	0.64	0.40	0.22	0.97
21	表現	0.51	0.63	0.37	0.09	0.80
46	感受性	0.38	0.62	0.37	0.13	0.69
33	共感的行動	0.46	0.57	0.41	0.35	0.83
37	教師との関係・温かい環境	0.33	0.54	0.47	0.12	0.64
12	自然への関心や接触	0.46	0.53	0.23	0.37	0.68
7	素直な態度・教師との関係	0.03	0.40	0.80	0.16	0.82
20	素直さ・家族関係	0.21	0.44	0.77	0.24	0.89
67	家族関係・温かい環境	0.35	0.44	0.70	0.33	0.92
47	調和的姿勢・家族関係・一体感	0.47	0.48	0.67	0.25	0.97
53	一体感・家族関係	0.24	0.52	0.64	0.37	0.88
64	感受性・自然への関心や接触	0.23	0.23	0.59	0.03	0.66
28	家族関係・一体感	0.43	0.53	0.57	0.33	0.90
24	表現(-)	0.15	0.12	0.19	0.94	0.96
70	自己中心性	0.38	0.15	0.20	0.71	0.72
32	調和的姿勢(-)	0.45	0.35	0.11	0.55	0.64
	因子寄与	10.31	10.23	6.45	4.25	31.24

(-)は項目内容の逆の意味を示す。

4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果

表 5-1-B は、競技面における感性に関わる行動様式の調査項目と因子負荷量を示したものである。

第 1 因子は、ゲームの予測、状況把握、状況判断、洞察、独創的なプレー、チームメイトとの一体感、チームワーク、リラックスできる環境、チームメイトや指導者、家族との良好な関係、などといった 18 項目が抽出され、ゲーム中に相手やチームメイトの心理、ボールの動き、ゲームの流れなどといった、勝利を得るために必要な情報を予め掴む、といった内容だけでなく、ゲーム以外でもチームメイトと交流したり、家族や指導者と信頼関係を築いていたり、プレッシャーを感じないですむような、周囲との情報交流に関する内容であった。すなわち、競技に関する様々な情報を受け取ったり、発信したりするような側面が示されていたことから“競技交流”因子と命名した。

第 2 因子は、状況把握や状況判断、冷静な反応に苦慮し、プレーに意思が表現されていない様子、チームメイトとの一体感の欠如、などといった 8 項目が抽出され、主にチームでの消極的な側面が示されていたことから、“競技消極性”因子と命名した。

第 3 因子は、利己性や自己中心性、冷静さの欠如についての 3 項目が抽出され、主にチームワークを乱す要因となる独善的な考え方や周囲と共生できない姿勢を示す内容であったことから、“競技エゴイズム”因子と命名した。

第 4 因子は、ゲーム中の利己性、自己中心的行動についての 2 項目が抽出され、ゲームにおいて、自分の役目に対する責任感に欠ける内容であったことから、“競技無責任”因子と命名した。

ただし、項目番号 54 と 6 は第 2 因子で、各々、0.41、0.42、項目番号 2 は第 4 因子で 0.44 と、これらの項目は他の因子においても因子負荷量が高かった。したがって、これらの項目はすべて“競技交流”因子に含まれているが、項目番号 54 と 6 は“競技消極性”因子、項目番号 2 は“競技無責任”因子に、それぞれ複合的に含まれることになる。また、項目番号 67 と 19 は第 1 因子で、各々、

0.50、0.46、項目番号 33 は第 3 因子で 0.43 と、これらの項目も他の因子で因子負荷量が高かった。ゆえに、これらの項目はすべて“競技消極性”因子に含まれているが、項目番号 67 と 19 は“競技交流”因子に、項目番号 33 は“競技エゴイズム”因子にも複合的に含まれる。

なお、尺度得点により算出した各因子の平均値はどの因子も 0.50 以下であったが、競技交流が比較的高く、次に競技消極性が高い傾向にあり、競技エゴイズム、競技無責任が比較的低い傾向にあった。

表 5-1-B 高校生サッカー選手の競技面における感性に関わる行動様式の
因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷 量				共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
7	状況把握	0.94	0.24	0.13	-0.17	0.98
4	予測	0.93	0.21	0.18	0.21	0.99
41	洞察	0.89	0.15	0.24	0.26	0.93
38	予測	0.87	0.33	0.15	0.05	0.89
57	状況判断	0.84	0.33	0.30	0.26	0.98
29	洞察・状況判断	0.83	0.15	0.22	0.11	0.77
56	洞察・独創的なプレー	0.81	0.11	0.25	0.22	0.79
54	チームメイトとの一体感	0.80	0.41	0.36	-0.11	0.95
53	競技以外の刺激	0.79	0.34	0.38	0.05	0.89
13	洞察	0.75	0.25	-0.10	0.22	0.68
42	チームメイトとの関係	0.73	0.17	0.23	0.07	0.62
14	チームワーク(-)	0.72	0.29	0.37	0.18	0.77
50	チームメイトとの関係	0.70	0.37	0.29	0.15	0.74
37	指導者との関係・リラックスできる環境	0.67	0.39	0.12	-0.12	0.63
2	独創的なプレー	0.66	0.34	0.31	0.44	0.84
32	指導者との関係	0.66	0.34	-0.08	0.37	0.69
6	家族関係・リラックスできる環境	0.62	0.42	0.38	0.29	0.79
44	指導者との関係・リラックスできる環境	0.62	0.05	0.09	0.25	0.46
10	状況把握(-)	0.20	0.87	0.01	0.17	0.83
36	状況判断(-)	0.23	0.83	0.30	0.14	0.85
68	意思の表現されたプレー(-)	0.18	0.80	0.16	0.18	0.72
21	冷静な反応(-)	0.36	0.69	0.30	0.14	0.72
67	調和的姿勢・指導者との関係	0.50	0.68	0.32	0.29	0.90
33	競技での利己性	0.20	0.58	0.43	0.10	0.57
51	状況把握(-)・チームメイトとの関係(-)	0.28	0.58	0.39	0.11	0.58
19	チームメイトとの一体感(-)	0.46	0.56	0.35	0.17	0.68
55	冷静さ(-)	0.31	0.34	0.76	-0.08	0.80
15	競技での利己性	0.24	0.30	0.68	0.35	0.74
18	競技での自己中心性	0.23	0.30	0.62	0.33	0.64
63	競技での利己性	0.22	0.34	0.27	0.84	0.93
27	自己中心的行動	0.16	0.53	0.13	0.59	0.68
	因子寄与	11.92	6.26	3.45	2.41	24.03

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

図 5-A 高校生サッカー選手の日常尺度の平均値と標準偏差

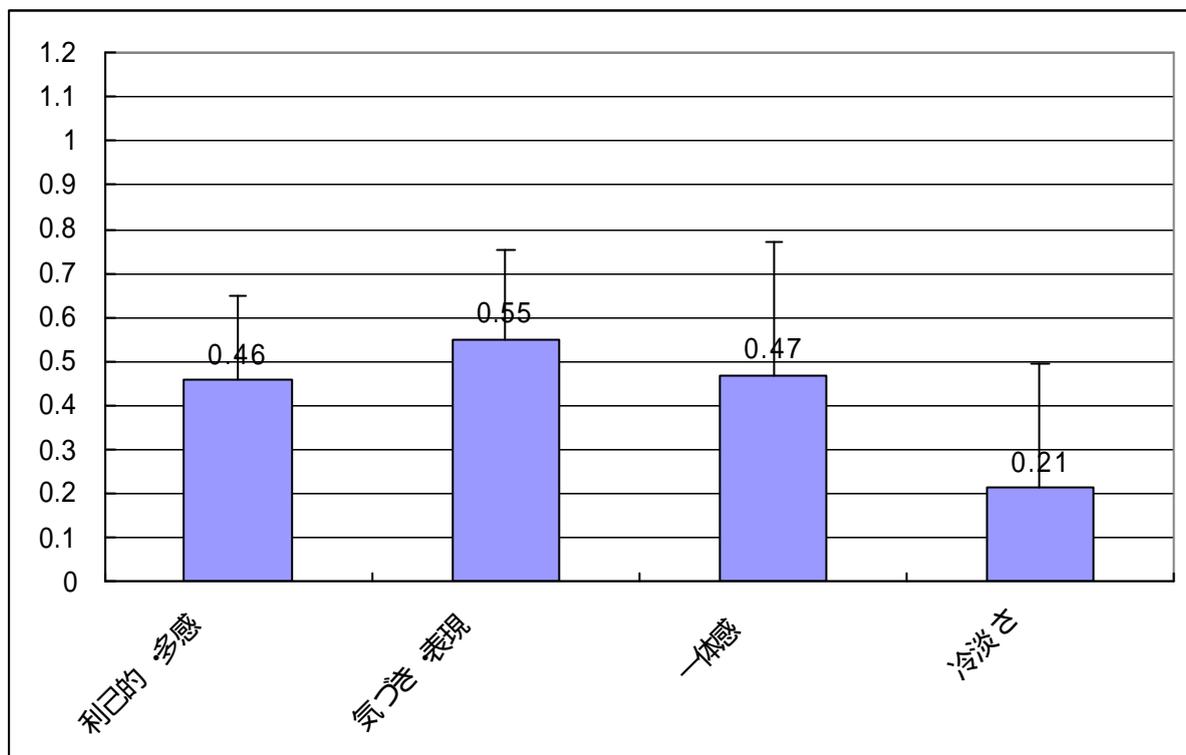
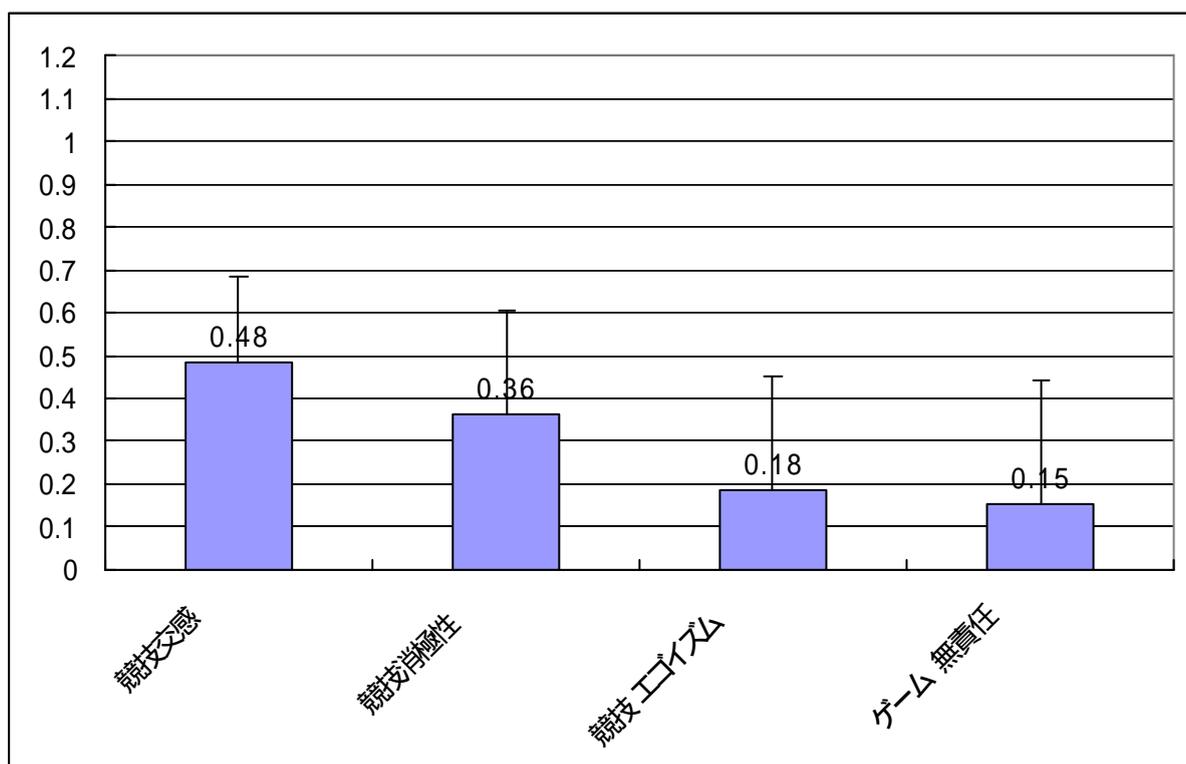


図 5-B 高校生サッカー選手の競技尺度の平均値と標準偏差



4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因および競技面における感性に関わる行動様式の各因子について尺度得点を用いてそれぞれの相関を求め、その関係について表 5-2 に表記した。5%水準で有意な相関が見られたものについて、主に述べる。

日常面の“利己的・多感”因子は、競技面の“競技消極性”因子との間で低い有意な正の相関が示され、日常面での利己性や多感的な側面は、競技面での消極的な側面とわずかに関連していた。競技面の“競技交流”因子は、日常面の“気づき・表現”因子と低い有意な正の相関が、“冷淡さ”因子とは低い有意な負の相関が示され、競技における周囲との交流と、日常面での気づきや表現、温かさやや関連が見られるにとどまった。

次に、日常面における心理的要因と競技面における行動様式の各項目について相関を求め、相関係数 0.30 以上で 5%水準で有意な 32 組について表 4-3 に示し、第 2 章、第 3 章の「2.2. 調査方法ならびに内容」で設定した項目内容を示す言葉によって、その内容を記載した。また、各因子に含まれる 3 組については、番号の下に A~C と付した。まず、因子に含まれる項目について述べる。

A は日常面の“一体感”因子に含まれる家族との一体感と競技面の“競技交流”因子に含まれる洞察の関連、B は日常面の“冷淡さ”因子に含まれる表現力と競技面の“競技交流”因子に含まれる競技以外の刺激との関係の関連を示していた。また、C では、日常面における“利己的・多感”因子に含まれる友人に対する自己中心性と競技面における“競技エゴイズム”因子に含まれる競技での利己性の関連が示された。

この他、2、3 は日常面での家族に対する素直さや調和的姿勢と競技面での家族の応援に対する感受性や家族との良好な関係の関連を示していた。4 は日常面での感受性と競技面での予感の関連、5 は日常面での直感とサッカーとの接触や関心の関連であった。6、7 は日常面での友人に対する共感性と競技面での直感的反応やチームメイトとの一体感、チームメイトとの良好な関係の関連を示し

ていた。8～12は日常面での地域や友人関係における調和的姿勢と、競技面での応援や競技に対する肯定的な感じ方やチームワーク、チームメイトとの一体感、チームメイトとの良好な関係の関連であった。13は日常面での冷静な判断と競技面での指導者に対する素直さの関連、14、15は日常面での誠実な行動と競技面での感情に流されないような冷静さやチームワークの関連を示していた。16、17は日常面での家族からの理解を感じられるような温かい環境にいることと競技面での家族のサポートや家族の応援に対する肯定的な感じ方の関連であり、18、19は日常面での教師や友人などの温かいサポートを受けられるような学校環境にいることと競技面での状況把握や冷静な状況判断の関連であった。20、21、22は日常面で友人との交流が活発であることと競技面でのチームワークや競技以外の刺激を入れる気分転換をしていることとの関連、24は日常面での表現と競技面での状況把握との関連、25は日常面での想像と競技面での洞察の関連を示していた。26は日常面での自然への関心や接触があることと競技面でのチームメイトとのスムーズなコミュニケーションがとれていることとの関連、27は日常面での友人に対する自己中心性と競技面での利己性の関連を示していた。さらに、30は教師との関係で素直な反応をしていないことと競技面でのプレーに意思が表現されないこととの関連であった。

表 5-2 高校生サッカー選手の日常面と競技面の尺度間相関

	競技面 / 日常面	第 1 因子 利己的・多感	第 2 因子 気づき・表現	第 3 因子 一体感	第 4 因子 冷淡さ
第 1 因子	競技交流	n.s.	r=0.26**	n.s.	r=-0.20**
第 2 因子	競技消極性	r=0.21*	n.s.	n.s.	n.s.
第 3 因子	競技エゴイズム	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
第 4 因子	競技無責任	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ で、有意な相関があることを示す。

数値は相関係数、n. s. は有意な相関が見られなかったことを示す。

表 5-3 高校生サッカー選手の日常項目と競技項目の項目間相関

番号	分類	項目番号	因子名	項目内容	相関係数	有意水準
1	日常面	53	一体感	一体感・家族関係	r = 0.33	p < .01
A	競技面	41	競技交流	洞察		
2	日常面	47	一体感	調和的姿勢・家族関係	r = 0.32	p < .01
	競技面	9		応援に対する感受性・家族関係		
3	日常面	20	一体感	素直さ・家族関係	r = 0.40	p < .001
	競技面	9		応援に対する感受性・家族関係		
4	日常面	72		感受性	r = 0.31	p < .01
	競技面	1		予感		
5	日常面	90		直感	r = 0.34	p < .01
	競技面	43		サッカーとの接触や関心		
6	日常面	13		共感性・友人関係	r = 0.30	p < .01
	競技面	25		直感的反応		
7	日常面	3		共感性・友人関係	r = 0.30	p < .01
	競技面	20		チームメイトとの一体感 チームメイトとの関係		
8	日常面	79		調和的姿勢	r = 0.31	p < .01
	競技面	34		競技に対する感受性		
9	日常面	79		調和的姿勢	r = 0.34	p < .01
	競技面	61		応援に対する感受性		
10	日常面	62		調和的姿勢・地域での人間関係	r = 0.30	p < .01
	競技面	5		チームワーク		
11	日常面	62		調和的姿勢・地域での人間関係	r = 0.44	p < .001
	競技面	20		チームメイトとの一体感 チームメイトとの関係		
12	日常面	66		調和的姿勢・友人関係	r = -0.30	p < .01
	競技面	26	競技無責任	調和的姿勢 (-) チームメイトとの関係 (-)		
13	日常面	31		冷静な判断	r = 0.46	p < .001
	競技面	47		周囲に対する素直さ・指導者との関係		
14	日常面	39		誠実な行動	r = 0.34	p < .001
	競技面	46		冷静さ・チームワーク		
15	日常面	43		誠実な行動 (-)	r = -0.32	p < .01
	競技面	46		冷静さ・チームワーク		

(-)は項目内容の逆の意味、A~C は因子に含まれる項目、~ は因子の番号を示す。

表 5-3 高校生サッカー選手の日常項目と競技項目の項目間相関

16	日常面	84		家族関係・温かい環境	r = 0.40	p < .001
	競技面	8		家族関係		
17	日常面	84		家族関係・温かい環境	r = 0.33	p < .01
	競技面	9		家族関係・応援に対する感受性		
18	日常面	41	気づき・表現	教師との関係・温かい環境	r = 0.32	p < .01
	競技面	52		状況把握		
19	日常面	59		学校生活・温かい環境	r = 0.31	p < .001
	競技面	31		状況判断・冷静さ		
20	日常面	42		友人関係	r = 0.32	p < .01
	競技面	12		チームワーク		
21	日常面	87		友人関係	r = 0.33	p < .01
	競技面	12		チームワーク		
22	日常面	42		友人関係	r = 0.31	p < .01
	競技面	53	競技交流	競技以外の刺激		
23	日常面	24	冷淡さ	表現 (-)	r = -0.30	p < .01
	B 競技面	53	競技交流	競技以外の刺激		
24	日常面	24	冷淡さ	表現 (-)	r = -0.32	p < .01
	競技面	52		状況把握		
25	日常面	69		想像	r = 0.30	p < .01
	競技面	13	競技交流	洞察		
26	日常面	80		自然への関心や接触	r = 0.33	p < .01
	競技面	50	競技交流	チームメイトとの関係		
27	日常面	6	利己的・多感	自己中心性・友人関係 (-)	r = 0.31	p < .01
	C 競技面	15	競技エゴイズム	競技での利己性		
28	日常面	60	利己的・多感	想像	r = 0.37	p < .001
	競技面	49		リラックスできる環境 (-)		
29	日常面	73		利己的姿勢	r = 0.30	p < .01
	競技面	6		冷静さ・家族関係		
30	日常面	22		教師との関係 (-)	r = 0.33	p < .01
	競技面	68	競技消極性	意思の表現されたプレー		
31	日常面	34		感受性・学校生活	r = 0.33	p < .01
	競技面	10		状況把握 (-)		
32	日常面	46	気づき・表現	感受性・地域での人間関係	r = 0.33	p < .01
	競技面	49		リラックスできる環境 (-)		

(-)は項目内容の逆の意味、A~Cは因子に含まれる項目を示す。

~ は因子の番号を示す。

5 . 考察

5.1. 日常面における心理的要因

第1因子の“利己的・多感”は、まず、小中学生選手と同様、他者との調和ができず、攻撃的で気性が激しい側面が利己性として表れたことが考えられるが、それだけでなく、同時に多感的な側面も表れたのは、中学生選手の第2因子に見られたような感受性や想像力、共感性などが絡み合った複雑な側面が出ているためと推測される。すなわち、自分自身にとって都合の良い情報のみを受け取り、都合の良いような処理や発信をするだけでなく、他者への感情移入や事象に対して情緒的に反応したりするような、受け取った情報に対して敏感に反応する側面が出てきていると思われる。このことは、別の見方をすれば、ちょっとしたことにも傷つきやすい繊細さがあることも示唆される。

第2因子の“気づき・表現”は、他者の気持ちや状況に対する敏感さや自分自身が内発的に生み出して外界に発信するような、人間的成長において価値のある情報に気づき、それを形にするという情報のスムーズな流れに関する側面が示されたと思われる。片岡(1997)は感性を「価値あるものに気づく力」と捉えているが、感性という観点で言えば、その力が働いているといえる。

第3因子の“一体感”は、思春期の自我の不安定さが残っている場合にはむしろ捻くれたり、歪んだりすることもあるという高校生特有の特徴にはあてはまらず(竹内, 1989)むしろ、教師や親に対する素直さや信頼感を持ち、家族とのコミュニケーションをとりながら一体感を感じている様子が見られた。このような状況は、一方では自我の不安定さが落ち着いてきている側面と捉えることもできるであろうが、因子の平均値としてはむしろ低めであり、小中学生選手には見られなかった第4因子の“冷淡さ”が高校生において特徴的であったことから、未だ自我は拡張しきれていないといえる。“冷淡さ”は、主に感情的な冷たさについての側面であり、成長したがゆえの冷静さや感情には流されない様子を示していると捉えることもできるが、改めて項目内容と検討すると、他者に同情したり、他者のミスを許したり、といった温かさには欠けている。

これは、冷酷な気まぐれが見られやすい側面や、内向的な一面が現われるという自我の不安定さを示す特徴であるため、自我を安定させるという青年期の発達課題はまだ克服されていないと考えられる（久世，1982）。

以上のような特徴と、各因子の平均値を含めて検討すると、Jリーグ・ユース・チーム所属の高校生サッカー選手は、多感的で表現力があり、周囲との一体感を感じているといった、周囲と調和している特性と、利己性や冷淡さといった、周囲と調和していない特性の両面を持ち合わせていた。

一般に、青年期においては、中学生時代に見られるような自我の不安定さが落ち着いてくる時期であり、自我が拡張方向に動いていれば、利他性が強まり、健全な人格発達を遂げようとする時期である（久世，1982）。また、他者への関心と共感性の発達がこの時期における人格発達の課題の一つであるが（加藤・斎藤，1985）、利己性や冷淡さはこの課題の克服を妨げる要因になる可能性がある。一方、Cole（福鎌，1951）は、この時期には、情緒的場面に客観的に反応することを発達課題の一つに挙げているが、やや多感的な点は、利己性や冷淡さを中和させることに有効な側面と捉えることができる。しかし、全体として、特に不調和の傾向が強いわけではないものの、同時に調和の傾向も強くないため、情報の交流が不活発であり、感性という観点では働きが鈍化していると思われる。

高校生選手においては、小中学生選手に見られたコミュニケーション、共感性、といった因子が現れず、小中学生選手では見られなかった気づきや冷淡さといった因子が現れていた。こうしたことから、高校生選手は、小中学生選手より日常面では周囲とコミュニケーションをとってはず、共感性が弱く、冷淡な特性を持っていると考えられる。したがって、共感性の強さや心理的な温かさを備えていることを人間性の価値の一部と考えるならば、高校生選手の人間性は順調な育成がなされているとは言い難い。

5.2. 競技面における行動様式

第1因子の“競技交流”は、小中学生選手における第1因子の“ゲーム予知能力”と同様の、周囲の状況を素早く察知し、適切な判断を下すような側面や（大橋，1991）、ゲーム以外でもチームメイトや指導者とのコミュニケーションを大切にしたり、家族のプレッシャーが少なかったり、といったように、小中学生選手の第2因子に見られた“一体感”、中学生選手の第3因子に見られた“協調性”因子を含むような周囲との情報交流が行いやすい状況にいる様子が示されたと考えられる。

第2因子の“競技消極性”は、高校生特有の内向的な側面や、日常面で見られた冷淡さのように、周囲の状況に鈍感であることや、判断や行動に迷う内容を含んでいたことから、感性という観点では、まず、受け取る情報量が少なく、さらに受け取った情報の処理から発信の流れもスムーズでないことが推測される。つまり、適切な判断や行動を行うために必要な情報を受け取ることができていないと考えられる。

第3因子の“競技エゴイズム”は日常面の“利己性”と同様の側面が競技にも表われたものと思われ、小中学生選手と同様、レギュラーを獲得することだけでなく、プロチームに入るために自分自身が活躍することが切実な問題となることから、強い上昇志向を持ち、競技力を向上させることが第一になっている側面や自分自身の能力に自信を持っている側面が表れたと思われる（中塚ら，1998）。

第4因子の“競技無責任”は、特にゲームにおける利己的な側面が示されたと考えられるが、第4因子と同様に、自分自身が体力を温存するようなベストな状態にいることを最優先にし、チームメイトやチーム全体のことは二の次になっている様子が表れていると思われる。因子の平均値は低かったものの、競技面で小中学生選手に見られなかった消極的で無責任な側面が特徴的であったのは、チーム全体のことはおざなりで自分自身の活躍がまず優先にしているような利己性が表れたものと推測できる。

以上のような特徴と各因子の平均値を含めて検討すると、Jリーグ・ユース・チーム所属の高校生サッカー選手は、競技面において周囲と情報を交流する力があるものの、消極的で無責任な側面があり、利己的でやや内向的であると思われる。調和に関わる側面である“競技交流”因子の平均値は、“競技消極性”や“競技エゴイズム”、“競技無責任”、といった他の不調和に関わる因子よりは高かったものの、0.50 以下にとどまり、小中学生選手の第1因子に見られた“ゲーム予知能力”より低い数値であったことから、ゲームで必要な情報を効果的に収集したり、処理したりするような能力は、競技の経験と共に高められる、といった工藤（1994）の報告とは対照的に、むしろ小中学生選手より劣っている可能性が考えられる。

高校生選手においては、小中学生選手に見られた一体感や協調性といった因子が現れず、小中学生選手に見られなかった消極性や無責任といった因子が現れていたことから、高校生選手は、競技面において小中学生選手よりもチームワークが苦手であり、無難にやり過ごそうとしている様子が窺える。高校生選手は、競技生活が長くなり、小中学生時よりも競技に対する新鮮さが薄れたり、競技そのものを楽しむことが困難な状況になっていると思われ、こうした点が利己性や消極性、無責任といった側面に反映していると思察される。全体として、競技面においては調和、不調和のどちらの傾向が強いとも言い難く、感性という観点では働きは不活発であると考えられる。

5.3. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の関連性については、相関係数は、尺度間が最高で 0.26、項目間が最高で 0.46 と、予測したほどの強い関連性は見られなかった。相関係数 0.30 以上で有意な相関が見られた項目について考察を行う。

競技面での相手チームの選手の心理を洞察することや競技生活の合間を縫って友人と交流をはかっていることと、日常面で家族と一体感を感じたり、それ

を楽しんでいる様子や自分の気持ちを表現することが関連していたことから、ゲームで必要な情報をスムーズに受け取ったり、処理したりすることや、忙しい競技生活の中でも他分野での交流を大切にしていることは、日常面での家族との心の交流や気持ちの素直な表現と関わっていることが考えられる。これは、家族との触れ合いや感情の表出が競技面での人の心理に対する敏感さや競技だけの生活に偏らない姿勢を養うと考えられる。また、日常面で家族と調和した温かい家庭環境にあることと競技面で温かいサポートを受けているような家族との良好な関係にあることが関連していたことから、家庭環境は日常面と競技面で関連しており、良好な家族関係は両面に好影響をもたらすと思われる。さらに、日常面での地域や友人関係における調和的姿勢と、競技面での応援や競技に対する肯定的な感じ方やチームワーク、チームメイトとの一体感、チームメイトとの良好な関係が関連していたことから、日常面で周囲に調和した状態は、競技面で周囲と調和した状態と関わっていると推察される。したがって、周囲と良好な関係を築いているような調和した状態については、家庭や地域、学校など日常面での様々な場面での状況と競技面での状況は同様であるといえる。

日常面での感受性と競技面での予感、日常面での直感とサッカーとの接触や関心が関連していたことから、日常面において情報を受け取る感受性の鋭敏さと競技面で必要とされるスピーディーな情報の入手が関連しており、すなわち、情報に対する敏感さは日常面と競技面で関連していることを示していると推測できる。また、日常面での友人に対する共感性と競技面での直感的反応やチームメイトとの一体感、チームメイトとの良好な関係の関連が見られたことから、感性という観点で言えば、日常面での他者の内面の情報を受け取り、その情報を共有していることは、競技面で必要な情報の受け取りから発信までの一連の流れがスムーズであり、内面のすべての情報を共有していることと関連していることになる。したがって、ある場面でチームメイトと共有している情報が完全に一致するという一体感を味わう経験は、日常面での他者との内面の情報の

共有を可能にすると考えられる。

日常面での冷静な判断と競技面での指導者に対する素直さの関連、日常面での誠実な行動と競技面での感情に流されないような冷静さやチームワークの関連が示されたことから、日常面での正確で適切な情報処理は、競技面での周囲とのスムーズな情報交流や適切な情報処理と関連していると考えられる。すなわち、情報処理の的確さは日常面と競技面で関連があるといえる。また、日常面で教師や友人などの温かいサポートを受けられるような学校環境にいることと、競技面での状況把握や冷静な状況判断が関連していたことから、学校での温かい人間関係は、競技面での情報の受け取りから処理までの過程が正確で適切であることと関係があるといえる。したがって、学校で他者の温もりを感じられる状況は、競技面における情報処理の働きの活発さと関連していると考えられる。こうしたことは、日常面での友人との活発な交流と、チームメイトとの情報交流のスムーズさを示す競技面でのチームワークや競技以外の情報を入手することと関連していたことから、情報交流の活発さは日常面と競技面は互いに影響を与え合うことが推察される。さらに、日常面での表現と競技面での状況把握との関連が示されたことから、日常面での情報の発信は競技面での情報の受け取りが関連しており、日常面での想像と競技面での洞察の関連が見られたことから、情報の受け取りから処理までの過程は日常面と競技面で関連しているといえる。つまり、情報処理のスムーズさは日常面と競技面で関連していることがわかる。このことは、日常面での自然への関心や接触があることと競技面でのチームメイトとのスムーズなコミュニケーションがとれていることが関連していたことにも表れていると思われ、日常面での自然との交感とチームメイトとのスムーズな情報交流には関連があることになる。

また、競技面で自分の活躍だけを望むような利己性は、日常面での友人に対する思いやりに欠けるような自己中心的な側面と関連していたことから、競技面の利己的な側面は、日常面の人間関係において同様の側面と関わっているといえる。感性という観点では、自分自身に都合の良い情報の処理をすることは

日常面と競技面で関連していると考えられる。また、教師との関係で素直な反応をしていないことと競技面でのプレーに意思が表現されないことが関連していたことから、教師に対する内面の情報を不正確に発信することは競技面での内面の情報の発信がスムーズでないことと関連していると思われる。

このようなことから、高校生選手においても、日常面における良好な人間関係や一体感のような調和に関わる側面と、競技面でのスムーズな情報処理のような調和に関わる側面は関連していること、反対に、日常面での利己性のような不調和に関わる側面は、競技面でも同様の側面と関連していることが示された。すなわち、情報の処理がスムーズであることとその反対の状況は日常面と競技面で関連があったことになる。

日常面においては、第 1 因子で単に利己的な側面のみならず、利己的でありながらもやや多感的な部分があり、第 2 因子、第 3 因子で物事に敏感に気づいたり、一体感を感じたりする側面が現れていたが、このような人間性に関わる感性という観点での好ましい特性は、競技面においてはあまり見られず、むしろ日常面の第 4 因子で見られた冷淡さのような、高校生特有の内向的な側面が強調されていると思われた。高校生選手は小中学生選手が競技面では積極的な傾向であったのに対し、やや対照的な特性を示していた。

高校生選手は、日常面では人間性の完成に向けて利己性と利他性を融合させるべく利他性を強めることが求められる時期であり（上田，1999）、競技面においてもチーム全体の目標の達成には利他性が発揮されることが欠かせない。そのためには、高校生選手においては日常面と競技面の関連が少なかったものの、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式が関連することを認識し、競技面の交流と関連していた日常面での気づき・表現や温かさの点を中心に、日常生活の過ごし方を見直すことも必要と思われる。

6 . 本章のまとめ

高校生サッカー選手 103 名を対象として、日常面における感性に関わる心理的要因に関する 90 項目、競技面における感性に関わる行動様式に関する 68 項目から成るアンケート調査を実施し、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式との関わりについて、統計的手法を用いて解析を行った。その結果、以下のようなことが得られた。

- 1 . 日常面における心理的要因の因子としては、利己的・多感、気づき・表現、一体感、冷淡さ、といった因子が抽出された。
- 2 . 競技面における行動様式の因子としては、競技交流、競技消極性、競技エゴイズムや競技無責任、といった因子が抽出された。
- 3 . 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性については、日常面における家族との触れ合いなどの周囲との調和に関わる側面と、競技面における周囲との情報交流のような調和に関わる側面が関連を示した。また、日常面における利己性のような不調和に関わる側面は、競技面における自己中心性のような不調和に関わる側面との関連が示された。

これらにより、Jリーグ・ユース・チーム所属の高校生サッカー選手は、全体として多感的で周囲と調和している側面を備えているものの、どちらかといえば内向的で利己的な側面が目立ち、やや冷めている、といった心理的要因を有するものと思われた。さらに、感性という観点では、周囲との調和、不調和の側面では、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式は一部関連していることが明らかになったが、その関連性は中学生選手より少なく、また、小中学生選手より、情報処理は不活発な傾向にある可能性も見られた。高校生選手については、競技において良い成績を収めるために必要な行動様式と、一人の人間として豊かな人生を送るために欠かせない

心理的要因の関連はどちらかといえば薄いことが示唆された。

第6章 Jリーグ下部組織所属の小・中・高校生サッカー選手における 心理的要因の年代別比較

1. 目的

第3、4、5章においては、小学生選手、中学生選手、高校生選手における、日常面における心理的要因と競技面における行動様式の特徴と、両側面の関連性について調査し、検討を行った。小学生選手については172名のうち、中高生選手と同時期に調査を行った91名、中学生選手162名、高校生選手103名について分析を行い、検討を加える。

本章では、成長や競技での経験等によって、日常面における心理的要因と競技面における行動様式の特徴が年代別にどのように変化するかを探ることにした。

2. 方法

2.1. 調査対象

ジュニア期サッカー選手のモデルケースとして、Jリーグ下部組織のジュニア・チーム、ジュニアユース・チーム、ユース・チーム4チームに所属する、小学生91名、中学生162名、高校生103名、合計356名のサッカー選手を対象とした。これらの選手達は年齢10～17才の、小学5年生46名、6年生45名、中学1年生19名、2年生80名、3年生63名、高校1年生36名、2年生37名、3年生30名の男子で、小学校2年次以降に適性試験に合格してサッカー・スクールに入校し、1年を通して平均1週間に1～2回の割合で試合に出場し、週3～5回、毎回2～2時間45分程度の練習を行っている。

2.2 調査方法ならびに内容

第2、3章で設定し、第3、4、5章において使用した、日常面における感性に関わる心理的要因の90項目、競技面における感性に関わる行動様式の68項目から成る2種類の調査票を用い、調査を実施した。

3. 分析方法

3.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析

収集したデータについては、ほとんど全員の被験者が同一の回答をしているような、分布の極端に歪んだ項目、日常面における感性に関わる心理的要因については、90項目中、23、25、39、51、65の5項目を、競技面における感性に関わる行動様式についても68項目中、30、60の2項目を削除し、それぞれ85項目、66項目を分析に使用した。有効回答数は320名であった。

本研究においても、第2、3、4、5章と同様に、四分相関係数行列を用いて因子分析を行い、日常生活における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目の構造を調べ、小・中・高校生のエリートジュニアサッカー選手全体としての傾向を調べた(萩生田・繁樹,1996;柳井ら,1999)。各々の主たる因子を抽出して因子の検討を加え、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定した。また、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の傾向を見るため、尺度得点を用いて各因子の平均値を求めた。さらに、各選手の因子得点を用いて各グループ、各学年の平均値を求めた。

3.2. グループ間の相違

各々のグループ間での相違を検討するため、各因子について、各選手の尺度得点を用いて一元配置の分散分析を実施し、チューキー法による多重比較を行った(芝・南風原,1990)。有意水準は、5%とした。また、同様に各項目についても各項目の素点を用いて一元配置の分散分析を実施し、チューキー法によ

る多重比較を行った(芝・南風原,1990)。この場合も、有意水準は5%とした。

さらに、各選手の因子得点を用いて、尺度得点と同様に、一元配置の分散分析を実施し、テューキー法による多重比較を行った(芝・南風原,1990)。有意水準は、5%とした。また、各選手の因子得点を用いて各グループの因子得点の平均値、各学年の因子得点の平均値を求めた。次に、グループ間で有意差が見られた因子について、日常因子同士、競技因子同士、日常因子と競技因子の各々の組み合わせでピアソンの積率相関係数を求め、0.30以上で有意な相関が見られた因子同士の組み合わせで、各グループの因子得点の平均値、各学年の因子得点の平均値、各選手の因子得点をグラフにプロットした。

4. 結果

4.1. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の因子分析結果

因子分析の結果、固有値の減少度や共通性の値などから因子数を特定し、日常面における感性に関わる心理的要因5因子、競技面における感性に関わる行動様式4因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が0.40以上の項目を表6-1-A、表6-1-Bに示した。また、各グループ間での心理的要因の相違を検討するため、抽出された各因子と各項目について分析し、有意差の見られたものを挙げて検討を行った。

4.1.1. 日常面における心理的要因の因子分析結果

表6-1-Aは、日常面における感性に関わる心理的要因の調査項目と因子負荷量を示したものである。第1因子は、一体感、素直さ、素直な態度、感受性、家族や地域での人に対する調和的姿勢、温かい環境、自然への関心や接触、などといった内容の12項目が抽出され、主に家庭や地域などの周囲との調和をはかり、コミュニケーションがとれている様子が示されていたことから、“コミュニケーション”因子と命名した。

第2因子は、特に友人関係において、利己性、自己中心性、自己中心的行動、

素直さ・共感性・共感的行動・調和的姿勢・誠実な行動の欠如、といった内容の10項目が抽出され、主に冷淡で共感性に欠ける面が示されていたことから、“非共感性”因子と命名した。

第3因子は、教師との関係等、学校生活における自己中心性、自己中心的行動、利己性、利己的姿勢、といった内容の7項目が抽出され、学校生活において他者と共生する姿勢がなく、利己的で自己中心的な面が示されていたことから、“学校利己性”因子と命名した。

第4因子は、自然や様々な出来事に対する感受性、直感、共感性、家族からサポートを受けているような温かい環境にいること、などといった内容の9項目が抽出され、様々な対象との関係で感受性が敏感な様子が示されていたことから、“感受性”因子と命名した。

第5因子は、自己中心的行動、感受性、一体感、表現の欠如、といった内容の4項目が抽出され、人の気持ちを感じ取り、一体感を感じたり、正しい判断をしたり、といったことはできるが、実際に行動に移すことを苦手としているような側面が示されていたことから、“優柔不断”因子と命名した。

ただし、第2因子に含まれている項目番号54は第3因子で0.49、第3因子に含まれている項目番号26は第2因子で0.41と、これらの項目は他の因子においても因子負荷量が高かった。したがって、これらの項目は各々、“非共感性”因子、“学校利己性”因子に含まれているが、項目番号54は“学校利己性”因子、項目番号26は“非共感性”因子にも複合的に含まれることになる。また、第5因子に含まれている項目番号55は第4因子で0.47、項目番号61は第3因子で0.43と、これらの項目も他の因子での因子不可量が高く、共に“優柔不断”因子に含まれているが、項目番号55は“感受性”因子に、項目番号61は“学校利己性”因子にも複合的に含まれる。

なお、各因子の平均値については、図6-1-Aに示すように、感受性、優柔不断、コミュニケーションが高い傾向にあり、非共感性、学校利己性は低い傾向にあった。

表 6-1-A エリートジュニアサッカー選手の日常面における感性に関わる
心理的要因の因子分析結果

項目番号	項目内容	因子					共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
53	一体感・家族関係	0.78	0.09	-0.25	0.18	-0.10	0.71
71	調和的姿勢・地域での人間関係・温かい環境	0.71	-0.01	-0.26	0.02	0.16	0.60
47	一体感・調和的姿勢・家族関係	0.65	-0.04	-0.02	0.20	0.03	0.46
67	家族関係・温かい環境	0.59	-0.19	0.03	0.25	0.02	0.45
18	調和的姿勢・家族関係	0.58	0.04	-0.13	0.12	-0.14	0.39
76	素直な態度・家族関係	0.54	-0.02	-0.12	-0.05	-0.07	0.32
20	素直さ・家族関係	0.52	-0.29	-0.12	0.07	0.07	0.38
46	感受性・地域での人間関係	0.51	-0.17	-0.13	0.06	-0.06	0.32
62	調和的姿勢・地域での人間関係	0.51	-0.36	-0.27	0.24	0.25	0.58
17	調和的姿勢・地域での人間関係	0.49	0.11	-0.27	0.08	-0.01	0.34
11	調和的姿勢・家族関係	0.47	-0.10	-0.23	0.11	-0.17	0.32
38	自然への関心や接触・学校生活	0.40	-0.09	-0.34	0.00	0.07	0.28
75	自己中心的行動・友人関係(-)	-0.04	0.81	0.34	0.00	-0.04	0.77
48	素直さ(-)	-0.01	0.76	0.11	0.00	0.04	0.59
43	誠実な行動(-)	-0.22	0.57	0.02	0.10	-0.03	0.38
70	自己中心性	-0.05	0.56	0.27	-0.05	-0.12	0.40
54	利己性	-0.15	0.52	0.49	0.09	0.17	0.57
82	共感性(-)	-0.03	0.48	0.12	-0.23	0.27	0.37
32	調和的姿勢(-)	0.09	0.47	0.12	-0.09	0.04	0.26
*33	共感的行動・友人関係	0.19	-0.50	-0.20	-0.01	-0.25	0.39
*3	共感性・友人関係	0.09	-0.56	0.06	0.32	0.22	0.48
*4	共感性・友人関係	0.16	-0.57	0.29	0.22	0.28	0.56
40	自己中心的行動・学校生活(-)	-0.29	0.15	0.73	0.16	0.03	0.67
56	自己中心性	-0.13	0.14	0.69	0.06	-0.05	0.51
29	利己的姿勢・学校生活(-)	-0.33	0.08	0.67	-0.08	0.04	0.58
73	利己的姿勢・教師との関係(-)	-0.36	0.15	0.61	0.06	0.01	0.53
26	利己性	-0.13	0.41	0.49	0.22	-0.05	0.47
89	学校生活(-)	-0.22	0.18	0.47	-0.13	0.06	0.32
*34	感受性・学校生活	0.20	-0.07	-0.55	0.20	-0.18	0.42
30	感受性	0.06	-0.03	0.11	0.66	-0.01	0.45
44	共感性	0.12	0.13	0.06	0.66	-0.02	0.47
35	共感性	0.18	-0.25	-0.05	0.60	0.06	0.46
90	直感	0.11	0.21	0.00	0.51	-0.35	0.44
27	感受性	0.04	-0.13	0.04	0.51	0.01	0.28
88	感受性	0.08	0.09	0.09	0.48	0.03	0.25
9	家族関係・温かい環境	0.16	-0.04	-0.14	0.41	0.08	0.22
13	共感性・友人関係	0.23	-0.20	-0.25	0.41	-0.03	0.32
*8	感受性(-)・自然への関心や接触(-)	0.07	0.25	0.18	-0.53	-0.04	0.38
78	自己中心的行動	0.06	0.28	0.32	-0.01	0.63	0.58
55	感受性・一体感	0.10	-0.10	-0.38	0.47	0.62	0.77
*2	表現	0.21	0.02	-0.05	0.05	-0.40	0.21
*61	自己中心性	-0.09	0.27	0.43	-0.20	-0.46	0.52
	因子寄与	4.74	4.50	4.27	3.46	1.82	18.78

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

4.1.2. 競技面における行動様式の因子分析結果

表 6-1-B は、競技面における感性に関わる行動様式の調査項目と因子負荷量を示したものである。第 1 因子は、ゲームにおける状況把握や状況判断、予測、洞察、独創的なプレー、チームメイトとの良好な関係や一体感、といった内容の 13 項目が抽出され、主にゲームで勝利を得るために必要な情報を予知する能力について示されていたことから、“ゲーム予知能力”因子と命名した。

第 2 因子は、競技での利己性や自己中心性、指導者など周囲に対する素直さ・チームメイトとの良好な関係や一体感・状況把握・冷静さ・冷静な反応・チームワーク・競技に対する感受性の欠如、などといった内容の 11 項目が抽出され、主にチームメイトとの協調性や周囲への素直さに欠け、利己的で、競技能力が高い選手や自分だけは特別である、といったような、独善的な考え方や姿勢が示されていたことから、“競技エゴイズム”因子と命名した。

第 3 因子は、意思の表現されたプレー、チームメイトとの良好な関係、チームワーク、指導者との関係でリラックスできる状況、などといった内容の 6 項目が抽出され、チームでの人間関係においてコミュニケーションが取れていることを示す内容であったことから、“チームコミュニケーション”因子と命名した。

第 4 因子は、チームワークやチームメイトに対する調和的姿勢、指導者との良好な関係、成功や競技に対する感受性、といった内容の 6 項目が抽出され、主に周囲と調和している姿勢が示されていたことから、“競技調和性”因子と命名した。

ただし、第 1 因子に含まれている項目番号 48 と 36 は、各々、第 3 因子で 0.42、第 2 因子で 0.43 と、これらの項目は他の因子においても因子負荷量が高かった。したがって、これらの項目は共に“ゲーム予知能力”因子に含まれているが、項目番号 48 は“チームコミュニケーション”因子、項目番号 36 は“競技エゴイズム”因子に、それぞれ複合的に含まれることになる。また、第 2 因子に含まれている項目番号 22 と 45 は共に、第 4 因子で -0.49、0.41 と因子負荷量が高

かった。ゆえに、“競技エゴイズム”因子に含まれているこれらの項目は、共に“競技調和性”因子にも複合的に含まれる。さらに、第4因子に含まれている項目番号61は第3因子で0.41と因子負荷量が高かったことから、“競技調和性”因子だけでなく、“チームコミュニケーション”因子にも含まれるといえる。

なお、各因子の平均値については、図6-1-Bに示すように、ゲーム予知能力、チームコミュニケーション、競技調和性が高い傾向にあり、競技エゴイズムが低い傾向にあった。

表 6-1-B エリートジュニアサッカー選手の競技面における感性に関わる
行動様式の因子分析結果

項目番号	項目内容	因子 負 荷				共通性
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	
29	洞察・状況判断	0.74	-0.07	0.04	0.01	0.56
52	状況把握	0.71	-0.13	-0.07	0.12	0.55
41	洞察	0.64	-0.08	0.05	0.11	0.43
7	状況把握	0.59	0.01	0.13	-0.12	0.38
4	予測	0.59	-0.05	0.09	-0.13	0.37
56	洞察・状況判断・独創的なプレー	0.58	0.09	0.06	0.00	0.35
57	状況判断	0.52	-0.29	0.26	-0.09	0.43
2	独創的なプレー	0.51	0.00	0.05	0.08	0.27
48	予測	0.50	0.07	0.42	-0.36	0.57
20	チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係	0.43	-0.09	0.37	0.20	0.37
54	状況把握・チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係	0.42	0.06	0.26	0.11	0.25
38	予測	0.40	-0.24	0.33	0.11	0.34
*36	状況判断 (-)	-0.51	0.43	0.02	0.16	0.48
59	競技での利己性	0.00	0.70	0.02	-0.18	0.52
18	競技での自己中心性	0.07	0.61	-0.28	-0.01	0.46
63	競技での利己性	-0.05	0.58	-0.22	0.15	0.41
22	周囲に対する素直さ (-)・指導者との関係 (-)	-0.15	0.54	0.12	-0.49	0.56
15	競技での利己性	-0.03	0.49	-0.30	-0.26	0.40
19	チームメイトとの一体感 (-)・チームメイトとの関係 (-)	-0.06	0.44	-0.27	-0.21	0.31
21	冷静な反応 (-)	-0.20	0.42	0.09	0.07	0.23
28	状況把握 (-)・指導者との関係 (-)	-0.09	0.40	0.16	0.00	0.19
*47	周囲に対する素直さ・指導者との関係	0.02	-0.40	0.39	0.04	0.32
*46	冷静さ・チームワーク	-0.03	-0.41	-0.01	0.29	0.25
*45	競技に対する感受性	-0.12	-0.46	0.09	0.41	0.41
24	意思の表現されたプレー	-0.04	0.11	0.72	0.08	0.54
12	チームワーク	0.36	-0.10	0.62	-0.05	0.52
50	チームメイトとの関係	0.37	0.12	0.49	0.17	0.42
35	チームメイトとの関係	0.20	-0.13	0.42	-0.06	0.23
37	リラックスできる環境・指導者との関係	0.29	-0.04	0.40	0.25	0.31
*66	調和的姿勢 (-)・チームメイトとの関係 (-)	0.00	0.29	-0.42	-0.03	0.26
11	チームワーク	0.05	-0.08	0.22	0.62	0.45
61	成功に対する感受性	-0.03	-0.14	0.41	0.58	0.53
65	調和的姿勢・チームメイトとの関係	-0.03	-0.07	-0.09	0.49	0.26
34	競技に対する感受性	0.32	-0.22	0.16	0.48	0.40
32	指導者との関係	0.27	0.05	0.19	0.43	0.29
*26	調和的姿勢 (-)・チームメイトとの関係 (-)	0.17	-0.04	0.11	-0.59	0.39
	因子寄与	4.77	3.40	3.06	2.78	14.01

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。

図 6-1-A エリートジュニアサッカー選手の日常面における尺度の平均値と標準偏差

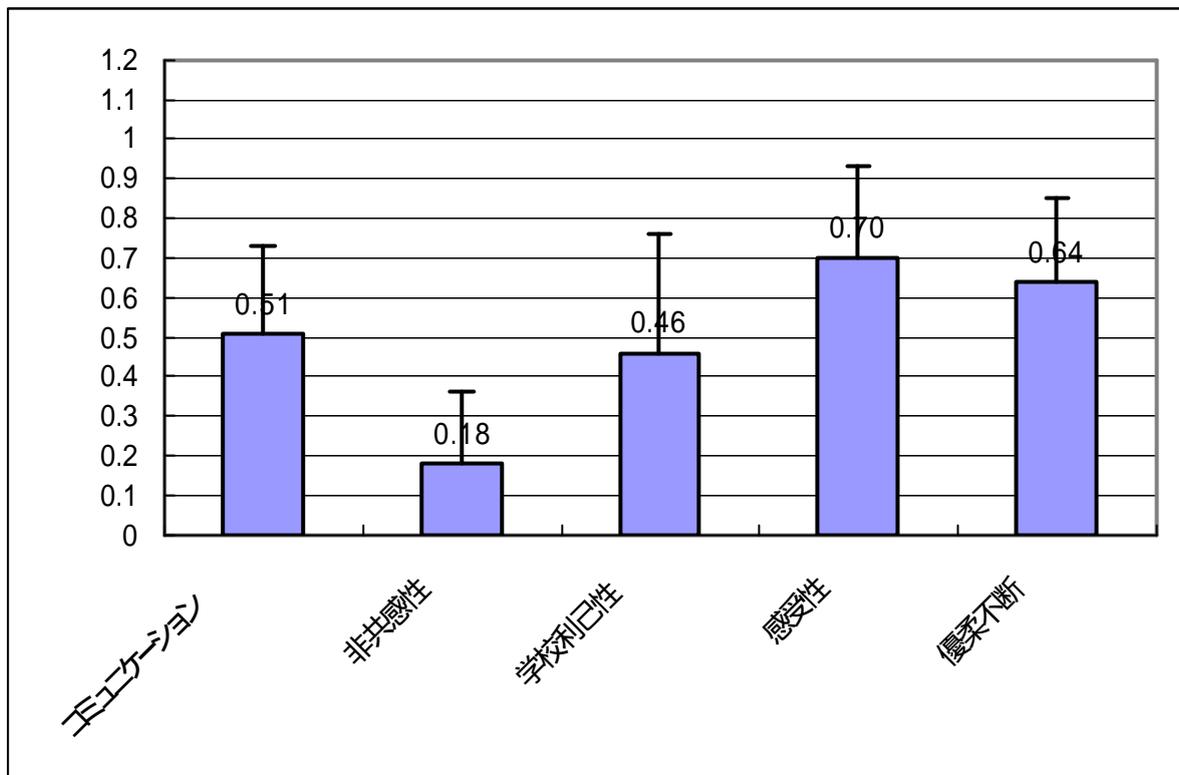
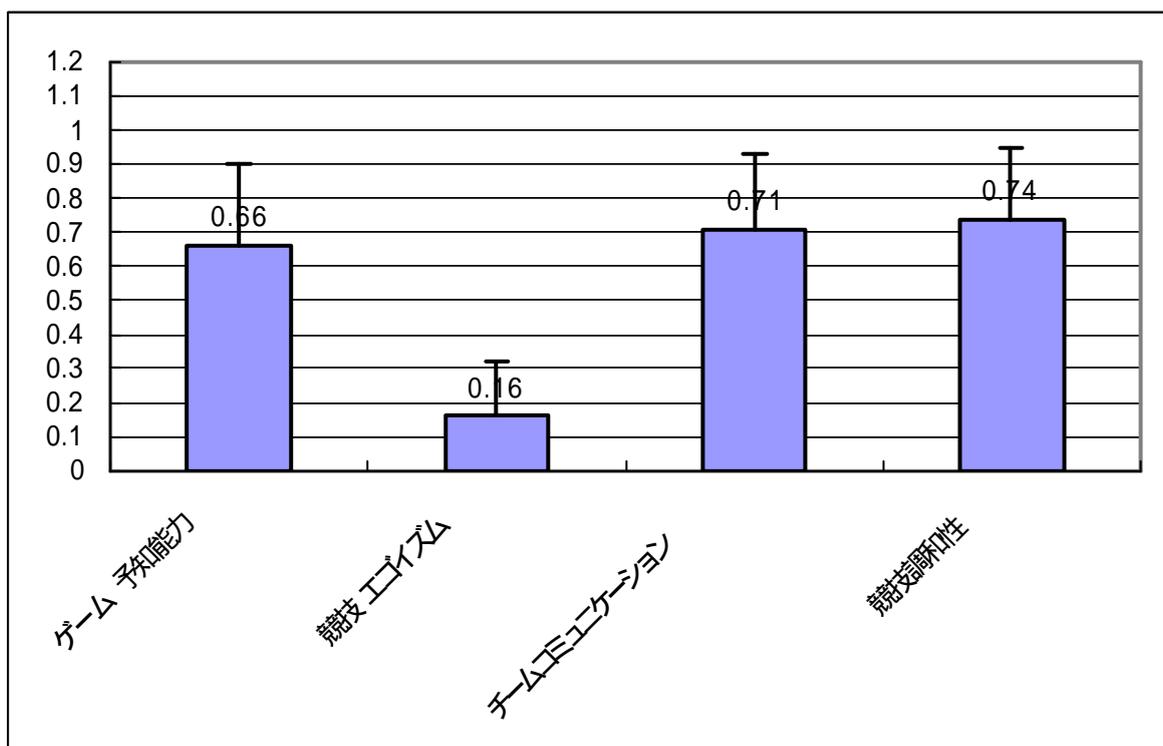


図 6-1-B エリートジュニアサッカー選手の競技面における尺度の平均値と標準偏差



4.2. 日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連性

日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各因子について尺度得点を用いてそれぞれの相関を求め、その関係について表 6-2 に表記した。5%水準で有意な相関が見られたものについて、主に述べる。

日常面の“コミュニケーション”因子は競技面の“競技調和性”因子と、日常面の“非共感性”因子は競技面の“競技エゴイズム”因子との間で各々、有意な正の相関が示され、日常面の“学校利己性”因子は競技面の“競技調和性”因子と有意な負の相関が示された。したがって、日常面での周囲とのコミュニケーションは競技面の周囲との調和と関連し、日常面での共感性の欠如は競技面のエゴイズムと関連しており、学校での利己性は、競技面での周囲との調和に欠ける様子と関連していた。

また、いずれも値は低いですが、日常面の“コミュニケーション”因子は競技面の“ゲーム予知能力”因子、“チームコミュニケーション”因子と各々、有意な正の相関が示され、“競技エゴイズム”因子とは有意な負の相関が見られた。日常面の“非共感性”因子は、競技面の“チームコミュニケーション”因子、“競技調和性”因子と各々、有意な負の相関が僅かに示された。その他については、日常面の“学校利己性”因子は競技面の“競技エゴイズム”因子と有意な正の相関が、“チームコミュニケーション”因子と有意な負の相関が僅かに見られ、競技面の“ゲーム予知能力”因子は日常面の“感受性”因子と有意な正の相関が、“優柔不断”因子とは有意な負の相関が各々、僅かに見られたにとどまった。

次に、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の各項目について相関を求め、相関係数 0.30 以上で 5%水準で有意な 4 組について表 6-3 に示し、第 2 章と第 3 章の「2.2. 調査項目」で設定した項目内容を示す言葉によってその内容を記載した。各因子に含まれるの項目同士の相関については、3 のみであった。まず、3 は、日常面の“学校利己性”因子に含まれる利己性と競技面の“競技調和性”因子に含まれるチームメイトと

の良好な関係や調和的姿勢の欠如の関連を示していた。

また、1と2では、競技面における家族の応援に対する感受性と日常面における家族に対する素直さや家族との一体感との関連が示された。4は、日常面での友人関係において温かい環境にあることと競技面でのチームメイトとの関係でリラックスできる環境にあることの関連を示していた。

表 6-2 エリートジュニアサッカー選手の日常面と競技面の尺度間相関

	競技面 / 日常面	第 1因子 コミュニケーション	第 2因子 非共感性	第 3因子 学校利己性	第 4因子 感受性	第 5 因子 優柔不断
第 1因子	ゲーム予知能力	r=0.26***	n.s.	n.s.	r=0.12*	r=-0.27***
第 2因子	競技エゴイズム	r=-0.15**	r=0.35**	r=0.20***	n.s.	n.s.
第 3因子	チームコミュニケーション	r=0.28***	r=-0.13*	r=-0.11*	n.s.	n.s.
第 4因子	競技調和性	r=0.34***	r=-0.23***	r=-0.34***	n.s.	n.s.

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ で、有意な相関があることを示す。

数値は相関係数、n.sは有意な相関が見られなかったことを示す。

表 6-3 エリートジュニアサッカー選手の日常項目と競技項目の項目間相関

番号	分類	項目番号	因子名	項目内容	相関係数	有意水準
1	日常面	20	コミュニケーション	素直さ・家族関係	r= 0.32	p < .001
	競技面	9		応援に対する感受性 家族関係		
2	日常面	53	コミュニケーション	一体感・家族関係	r= 0.35	p < .001
	競技面	9		応援に対する感受性 家族関係		
3	日常面	26	学校利己性	利己性	r= 0.33	p < .001
	競技面	26	競技調和性 (-)	調和的姿勢 (-) チームメイトとの関係 (-)		
4	日常面	77	チームコミュニケーション	友人関係・温かい環境	r= 0.32	p < .001
	競技面	35		チームメイトとの関係 リラックスできる環境		

(-)は項目内容の逆の意味、*は逆転項目を示す。 ~ は因子の番号を示す。

4.3. 尺度得点によるグループ間比較

各因子の尺度得点により、小学生、中学生、高校生、各々のグループ間の比較を表したのが表 6-4-A、表 6-4-B である。分散分析およびチューキー法による多重比較の結果、各因子について、小学生、中学生、高校生のグループ別で有意差が見られたのは、日常面では、“コミュニケーション”因子で小学生と中学生・高校生 ($F=39.28$, $p < .001$)、中学生と高校生 ($F=39.28$, $p < .001$) の間、“非共感性”因子で中学生と小学生・高校生 ($F=4.24$, $p < .05$) の間、“学校利己性”因子で高校生と小学生・中学生 ($F=35.46$, $p < .001$)、小学生と中学生 ($F=35.46$, $p < .05$) の間、“感受性”因子で高校生と小学生 ($F=5.60$, $p < .05$)・中学生 ($F=5.60$, $p < .01$) の間であった。

競技面では、“ゲーム予知能力”因子で小学生と中学生 ($F = 10.55$, $p < .01$)・高校生の間 ($F = 10.55$, $p < .001$) “チームコミュニケーション”因子で小学生と中学生の間 ($F=7.06$, $p < .01$) “競技調和性”因子で小学生と中学生・高校生 ($F=26.62$, $p < .001$) の間であった。

以上の結果と表 6-4-A、表 6-4-B に記した平均値、各因子の内容からして、次のようなことが導かれた。グループ別では、小学生は日常面において周囲とのコミュニケーションが最もとれており、学校での利己性が最も見られなかった。共感性は中学生より強いが、高校生より感受性は弱かった。競技面においては、ゲームの予知能力、周囲との調和の点で最も優れており、中学生よりチームでのコミュニケーションもとれている、といった特徴を持っていた。

高校生は、日常面において、学校で最も利己的で周囲とのコミュニケーションが最もとれていなかった。その反面、感受性は最も強く、中学生より共感性も強かった。競技面においては、小学生より、ゲームの予知能力、周囲との調和の点で劣っていた。

また、中学生は、日常面において、共感性が最も弱く、高校生より感受性が弱かった。周囲とのコミュニケーション、学校での利己性については、小学生と高校生の間であった。競技面においては、ゲームの予知能力、チームでのコ

コミュニケーション、周囲との調和の点では小学生より劣っていた。

表 6-4-A エリートジュニア・サッカー選手の日常面の尺度得点によるグループ間比較

日常面 尺度	第1因子 コミュニケーション			第2因子 非共感性			第3因子 学校利己性		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
グループ									
小学生	89	0.67	0.19	89	0.15	0.17	87	0.26	0.24
中学生	160	0.48	0.20	161	0.21	0.20	160	0.47	0.30
高校生	103	0.42	0.21	103	0.15	0.14	103	0.60	0.27
有意差の見られた グループ	小>中 高***, 中>高***			中>小 高*			高>小 中***, 中>小*		
日常面 尺度	第4因子 感受性			第5因子 優柔不断					
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
グループ									
小学生	87	0.69	0.21	90	0.61	0.17			
中学生	161	0.67	0.25	162	0.63	0.23			
高校生	103	0.77	0.20	103	0.67	0.20			
有意差の見られた グループ	高>小* 中**								

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ でそれぞれ有意差があることを示す。

表 6-4-B エリートジュニア・サッカー選手の競技面の尺度得点によるグループ間比較

競技面 尺度	第1因子 ゲーム予知能力			第2因子 競技エゴイズム			第3因子 チームコミュニケーション		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
グループ									
小学生	87	0.75	0.23	89	0.14	0.13	84	0.78	0.20
中学生	156	0.65	0.22	160	0.17	0.17	155	0.67	0.23
高校生	103	0.59	0.25	102	0.18	0.16	103	0.71	0.20
有意差の見られた グループ	小>中** 高***						小>中**		
競技面 尺度	第4因子 競技調和性								
	度数	平均値	SD						
グループ									
小学生	89	0.87	0.15						
中学生	158	0.71	0.20						
高校生	103	0.67	0.23						
有意差の見られた グループ	小>中 高***								

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ でそれぞれ有意差があることを示す。

4.4. 各項目のグループ間比較

各項目について、各選手の素点を用い、小学生、中学生、高校生、各々のグループ間での比較を行った。分散分析およびテューキー法による多重比較の結果、グループ別で5%水準で有意差が見られた項目を、表 6-5-A、表 6-5-B に記した。日常項目については 40 項目、競技項目については 29 項目で有意差が見られた。

日常項目においては、感受性と共感が 14 項目、想像と表現が 2 項目、利己的・自己中心的側面について 7 項目、一体感や素直な態度、調和的姿勢など調和に関する側面について 10 項目、家族関係について 5 項目、教師・友人との関係を含む学校について 16 項目、自然や地域について 8 項目、温かい環境が 2 項目であった。競技項目においては、予測や状況把握などゲームの予知能力については 8 項目、感受性や冷静さ・素直さ・競技以外の刺激・独創的なプレーについて 8 項目、一体感や調和的姿勢など調和に関する側面について 4 項目、利己的・自己中心的な面について 2 項目、家族関係について 4 項目、チームについて 8 項目、リラックスできる環境について 4 項目であった。グループ別に特徴をまとめると以下のようなになる。

小学生選手は、日常面については、家庭で最も一体感があり、調和がとれていた。学校生活に対してもプラスイメージがあり、教師に対する素直さや友人への共感性、感受性が強く、利己的・自己中心的な面が一番見られなかった。地域においては、自然や人との交流が最も活発で敏感であった。また、想像力が一番豊かで高校生より独創的な表現にも優れていたが、一部、高校生より感受性が弱い側面も見られた。学校と地域では周囲の温かいサポートを最も受けていた。

競技面については、家庭のサポートを最も受けているものの、高校生選手よりプレッシャーの強い状況に置かれていた。チームではチームメイトや指導者との関係が最も良好で調和した状態にあった。ゲームでは、ゲームの予知能力に最も優れ、高校生より応援や競技に関する感受性が強かったが、高校生より

冷静さには欠けていた。利己的・自己中心的な側面は、最も弱い傾向にあった。

高校生選手は、日常面については、家庭では小学生より調和に欠け、一体感が最も欠如していた。学校生活に対してはマイナスイメージが最も強く、無関心な様子が利己的・自己中心的な側面と共に最も強く表れていた。小学生より学校での友人や教師との関係が希薄で素直さに欠けていたが、友人への共感性は中学生より強かった。地域においては自然や人との交流が最も少なかった。また、美的ものに対する感受性が最も強い一方、独創的な表現や想像力は小学生より乏しかった。

競技面については、家庭では小学生よりサポートは少ないが、最もリラックスできる状況にあった。チームでは最も調和がとれておらず、指導者との関係は小学生よりプレッシャーの強い状況であったが、全体的な環境としては中学生よりリラックスできる環境にいた。ゲームでは小学生よりゲームの予知能力が劣り、競技に関する感受性が乏しく、利己的な側面も見られたが、競技以外の刺激には最も敏感で冷静であった。

中学生選手は、小学生と高校生の中間的性質を有しており、日常面については、家庭、学校生活、地域における周囲との調和や交流は、高校生よりとれているものの、小学生よりはとれていない、といった状況であった。友人に対する共感性や感受性は最も弱かった。

競技面については、家庭では小学生よりサポートは少なく、高校生よりプレッシャーを感じている状況にあった。チームでの調和、競技に関する感受性の点では高校生より優れているが小学生よりは劣る、といった状況で、小学生よりゲームの予知能力に欠け、自己中心的な側面の強さについても小学生より傾向が強かった。

表 6-5-A エリートジュニア・サッカー選手の日常項目のグループ間比較

項目番号	項目内容	有意差の見られたグループ	度数			平均値			標準偏差		
			小	中	高	小	中	高	小	中	高
1	自然への関心や接触	小>高**	91	162	103	0.57	0.43	0.33	0.50	0.50	0.47
2	表現	小>高**	91	162	104	0.69	0.56	0.48	0.46	0.50	0.50
4	共感性・友人関係	中<高*	90	162	103	0.90	0.89	0.98	0.30	0.32	0.14
7	素直な態度 教師との関係	小>中*** 小>高***	90	162	102	0.56	0.32	0.26	0.50	0.47	0.44
8	自然への関心や接触(-)	小>高* 中>高**	91	162	103	0.35	0.36	0.17	0.48	0.48	0.37
11	調和的姿勢 家族関係	小>中** 小>高***	91	161	103	0.88	0.67	0.61	0.33	0.47	0.49
12	自然への関心や接触	中>高**	91	161	103	0.63	0.69	0.50	0.49	0.46	0.50
13	共感性・友人関係	小>中*	91	162	103	0.84	0.69	0.75	0.37	0.47	0.44
16	共感性(-)・友人関係(-)	小<中*	91	162	103	0.07	0.18	0.17	0.25	0.38	0.37
17	調和的姿勢 地域での人間関係	小>中*** 小>高*	91	162	103	0.68	0.40	0.48	0.47	0.49	0.50
18	調和的姿勢 家族関係	小>中* 小>高***	91	162	103	0.48	0.33	0.17	0.50	0.47	0.38
26	利己性	小<中** 小<高***	91	162	103	0.24	0.45	0.52	0.43	0.50	0.50
27	感受性	小<高** 中<高**	91	162	103	0.65	0.66	0.84	0.48	0.48	0.36
29	利己的姿勢 学校生活(-)	小<中*** 小<高***	91	162	103	0.21	0.52	0.65	0.41	0.50	0.48
30	感受性	小<高** 中<高**	90	162	103	0.66	0.66	0.86	0.48	0.48	0.34
33	共感的行動 友人関係	小>中*** 小>高*	90	162	103	0.88	0.64	0.70	0.33	0.48	0.46
34	感受性 学校生活	小>中*** 小>高*** 中>高*	90	162	103	0.54	0.30	0.15	0.50	0.46	0.35
38	自然への関心や接触 学校生活	小>中*** 小>高*** 中>高**	90	162	103	0.63	0.31	0.13	0.48	0.46	0.33
40	自己中心的行動 学校生活(-)	小<中** 小<高*** 中<高*	90	162	103	0.13	0.36	0.50	0.34	0.48	0.50
41	温かい環境 教師との関係	小>中*** 小>高***	90	162	103	0.81	0.54	0.42	0.39	0.50	0.50
42	友人関係	小>中*	90	162	103	0.89	0.76	0.82	0.32	0.43	0.39
46	感受性 地域での人間関係	小>中*** 小>高***	90	162	103	0.76	0.46	0.39	0.43	0.50	0.49
47	調和的姿勢 家族関係	小>高***	90	162	103	0.89	0.78	0.66	0.32	0.42	0.48
49	共感性 一体感	小<中*	90	162	103	0.09	0.13	0.08	0.29	0.34	0.27
52	共感的行動	小>中**	90	162	103	0.90	0.73	0.79	0.30	0.45	0.41
53	一体感 家族関係	小>中** 小>高*** 中>高**	90	162	103	0.89	0.70	0.50	0.32	0.46	0.50

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

表 6-5-A エリートジュニア・サッカー選手の日常項目のグループ間比較

項目番号	項目内容	有意差の見られたグループ	度数			平均値			標準偏差		
			小	中	高	小	中	高	小	中	高
54	利己性	小<中** 小<高*	90	162	103	0.23	0.42	0.43	0.43	0.50	0.50
55	感受性 一体感	中<高*	90	161	103	0.97	0.91	0.98	0.18	0.28	0.14
56	自己中心性	小<中* 小<高*	90	162	103	0.23	0.39	0.43	0.43	0.49	0.50
59	学校生活	小>中** 小>高***	91	162	103	0.79	0.60	0.47	0.41	0.49	0.50
60	想像	小>中*** 小>高***	91	162	103	0.70	0.41	0.42	0.46	0.49	0.50
61	自己中心性	小<中*	91	162	103	0.02	0.10	0.06	0.15	0.31	0.24
64	感受性 自然への関心や接触	小>中*** 小>高*** 中>高*	91	162	103	0.75	0.44	0.27	0.44	0.50	0.45
71	調和的姿勢 温かい環境 地域での人間関係	小>中*** 小>高***	91	162	103	0.37	0.16	0.15	0.49	0.37	0.35
73	利己的姿勢 教師との関係(-)	小<高*** 中<高*	91	162	103	0.22	0.50	0.67	0.42	0.50	0.47
76	素直な態度・家族関係	小>中*** 小>高***	91	162	103	0.23	0.05	0.07	0.42	0.22	0.25
81	感受性 学校生活	小>高**	91	162	103	0.96	0.88	0.82	0.21	0.33	0.39
86	感受性	小>中*	88	162	103	0.99	0.91	0.96	0.11	0.28	0.19
87	友人関係	小>中** 小>高**	88	162	103	0.84	0.62	0.62	0.36	0.49	0.49
89	学校生活(-)	小<高** 中<高**	88	162	103	0.34	0.38	0.57	0.48	0.49	0.50

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

表 6-5-B エリートジュニア サッカー選手の競技項目のグループ間比較

項目番号	項目内容	有意差の 見られた グループ	度数			平均値			標準偏差		
			小	中	高	小	中	高	小	中	高
3	応援に対する感受性 (-)	小 > 高*	90	162	103	0.34	0.30	0.17	0.48	0.46	0.38
6	リラックスできる環境 冷静さ 家族関係	小 < 高*** 中 < 高*	90	162	103	0.33	0.44	0.61	0.47	0.50	0.49
7	状況把握	小 > 中* 小 > 高*	90	161	103	0.66	0.50	0.45	0.48	0.50	0.50
8	家族関係	小 > 高*	90	162	103	0.82	0.87	0.94	0.38	0.34	0.24
9	応援に対する感受性 家族関係	小 > 中*** 小 > 高***	89	162	103	0.70	0.39	0.37	0.46	0.49	0.49
13	洞察	小 > 高*	90	162	103	0.47	0.34	0.28	0.50	0.48	0.45
15	競技での利己性	小 < 高*	90	162	103	0.07	0.15	0.20	0.25	0.36	0.40
16	予測	中 < 高*	90	162	103	0.70	0.60	0.76	0.46	0.49	0.43
17	予感 (-)	小 > 中* 小 > 高**	90	162	103	0.47	0.25	0.18	0.94	0.43	0.38
19	チームメイトとの一体感 (-) チームメイトとの関係 (-)	小 < 高*	90	162	103	0.22	0.31	0.38	0.42	0.47	0.49
22	周囲に対する素直さ (-) 指導者との関係 (-)	小 < 高*	91	162	103	0.03	0.07	0.15	0.18	0.26	0.35
23	リラックスできる環境 家族関係	小 < 高*** 中 < 高*	91	162	103	0.52	0.64	0.81	0.50	0.48	0.40
27	自己中心的行動	小 < 中**	91	162	103	0.07	0.21	0.12	0.25	0.41	0.32
29	洞察・状況判断	小 > 中** 小 > 高***	91	162	103	0.76	0.55	0.43	0.43	0.50	0.50
32	指導者との関係	小 > 中*** 小 > 高***	90	160	103	0.56	0.31	0.29	0.50	0.47	0.46
34	競技に対する感受性 サッカー との接触や関心	小 > 中* 小 > 高*** 中 > 高***	91	158	103	0.97	0.85	0.52	0.18	0.36	0.50
38	予測	小 > 高*	91	162	103	0.81	0.68	0.65	0.39	0.47	0.48
41	洞察	小 > 高*** 中 > 高**	91	160	103	0.85	0.74	0.56	0.36	0.44	0.50
42	チームメイトとの関係	小 > 中* 小 > 高*** 中 > 高*	91	162	103	0.69	0.54	0.36	0.46	0.50	0.48
44	リラックスできる環境 指導者との関係	小 > 高*** 中 > 高**	90	159	103	0.38	0.25	0.18	0.49	0.43	0.39
49	リラックスできる環境 (-)	中 > 高*	91	162	103	0.20	0.27	0.13	0.40	0.44	0.33
50	チームメイトとの関係	小 > 中*** 小 > 高***	90	162	103	0.77	0.49	0.52	0.43	0.50	0.50
52	状況把握	小 > 中* 小 > 高**	90	160	103	0.73	0.58	0.50	0.45	0.49	0.50
53	競技以外の刺激	小 < 高* 中 < 高*	91	160	103	0.49	0.52	0.68	0.50	0.50	0.47
54	チームメイトとの一体感 チームメイトとの関係	小 > 高*	91	162	103	0.70	0.59	0.53	0.46	0.49	0.50
55	冷静さ (-)	小 > 高**	91	162	103	0.03	0.13	0.19	0.18	0.34	0.40
56	独創的なプレー (-)	小 > 中** 小 > 高**	90	161	103	0.71	0.51	0.45	0.46	0.50	0.50
65	調和的姿勢 チームメイトとの関係	小 > 中*** 小 > 高*	91	162	103	0.84	0.58	0.68	0.37	0.50	0.47
67	調和的姿勢	小 < 中*	88	161	103	0.47	0.57	0.66	0.50	0.50	0.48

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。 <、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

4.5. 因子得点による各グループ間の比較

各因子の因子得点により、小学生、中学生、高校生、各々のグループ間の比較を表したのが表 6-6-A、表 6-6-B である。分散分析およびテューキー法による多重比較の結果、各因子について、小学生、中学生、高校生のグループ別で有意差が見られたのは、日常面では、“コミュニケーション”因子で小学生と高校生($F=3.45$, $p < .05$)の間、“非共感性”因子で高校生と小学生($F=9.10$, $p < .001$)・中学生($F=9.10$, $p < .05$)の間であった。

競技面では、“ゲーム予知能力”因子で小学生と中学生($F = 6.87$, $p < .05$)・高校生の間($F = 6.87$, $p < .01$)、“競技調和性”因子で小学生と中学生($F=5.48$, $p < .01$)・高校生($F=5.48$, $p < .01$)の間であった。

以上の結果と表 6-6-A、表 6-6-B に記した平均値、各因子の内容からして、次のようなことが導かれた。グループ別では、小学生は日常面において周囲とのコミュニケーションが高校生よりとれていた。また、高校生は共感性が最も強く見られた。競技面においては、小学生はゲームの予知能力、周囲との調和の点で最も優れていた。このような結果は、前述した尺度得点によるグループ間比較の結果を支持するものである。

さらに、成長に伴う相違についてさらに詳しい検討を行うため、因子得点によるグループ間での有意差が見られ、且つ因子間で相関係数 0.30 以上で有意な相関が見られた組み合わせについて、各グループの各因子の因子得点の平均値、各選手の各因子の因子得点をプロットした。これらは、日常面の“コミュニケーション”因子と日常面の“非共感性”因子、競技面の“ゲーム予知能力”因子と競技面の“競技調和性”因子の 2 組であった。これらの組み合わせについて、図 6-2-A ~ 、図 6-2-B ~ に表わした。図 6-2-A は、X 軸に日常面の“コミュニケーション”因子、Y 軸に日常面の“非共感性因子”をとって、各グループ、各学年の因子得点の平均値をプロットしたものである。第 象限に小学生、第 象限に高校生が位置しており、これらの中間付近に中学生が位置している。これは、小学生は、日常面でコミュニケーションがとれているも

の、非共感的であることを示している。高校生では、コミュニケーションはとれていないものの、共感的になっていることがわかる。中学生は、コミュニケーションの点でも、共感性の面でも傾向は共に弱くなり、小学生と高校生の中間の特徴を示すと思われる。

各学年の因子得点の平均値を見てみると、小学生では、5、6年生共に第 象限に位置しているが、小学生は学年が上がっても共感性の点では殆んど変化は見られないものの、コミュニケーションの点では学年が上がるにつれて傾向が弱まっていた。中学生においては、コミュニケーションの点ではどの学年もほぼ0付近に集中しており、変化は殆んどないといえる。非共感性の点では、2年生はプラス方向、1、3年生はマイナス方向にふれている。つまり、2年生はコミュニケーションがとれているが非共感的な傾向にあり、1、3年生はコミュニケーションがとれていないが共感的であることがわかる。高校生では、全学年がコミュニケーションの点でマイナス方向にふれているが、殆んど変化は見られない。非共感性の点では、1年生がわずかにプラス方向にふれているものの、2、3年生は共にマイナス方向にふれており、学年が上がると共に、マイナス値が高くなっている。すなわち、高校生は、コミュニケーションの点では殆んど変化はないが、学年が上がるにつれて共感的になっていることがわかった。

図 6-2-A 、図 6-2-A 、図 6-2-A は各グループの各選手の因子得点をプロットしたものである。図 6-2-A を見ると、小学生は、第 象限において81人中41人(50.6%)と高い比率で分布していた。第 象限に注目して見ていくと、図 6-2-A の中学生は154人中48人(31.1%)、図 6-2-A の高校生は102人中24人(23.5%)と、成長と共に比率が減少している。また、第 象限に注目すると、図 6-2-A の小学生は81人中19人(23.4%)、図 6-2-A の中学生は154人中53人(34.4%)、図 6-2-A の高校生は102人中46人(45.0%)と、成長と共に比率が増え、小学生ではコミュニケーションがとれているものの非共感的である特徴が、年代が上がるにつれて、コミュニケーションはとれていないものの共感的になっている特徴が顕著である。

表 6-6-A エリートジュニア・サッカー選手の日常面の因子得点によるグループ間比較

日常面 因子	第1因子 コミュニケーション			第2因子 非共感性			第3因子 学校利己性		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
グループ									
小学生	81	0.20	0.66	81	0.27	0.76	81	-0.16	1.44
中学生	154	-0.01	0.98	154	0.02	0.88	154	0.09	1.86
高校生	102	-0.14	0.87	102	-0.25	0.75	102	-0.01	1.64
有意差の見られた グループ	小>高*			高<小*** 中*					
日常面 因子	第4因子 感受性			第5因子 優柔不断					
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD			
グループ									
小学生	81	0.18	1.31	81	-0.16	1.18			
中学生	154	-0.18	1.70	154	0.16	1.53			
高校生	102	0.13	1.51	102	-0.11	1.44			
有意差の見られた グループ									

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

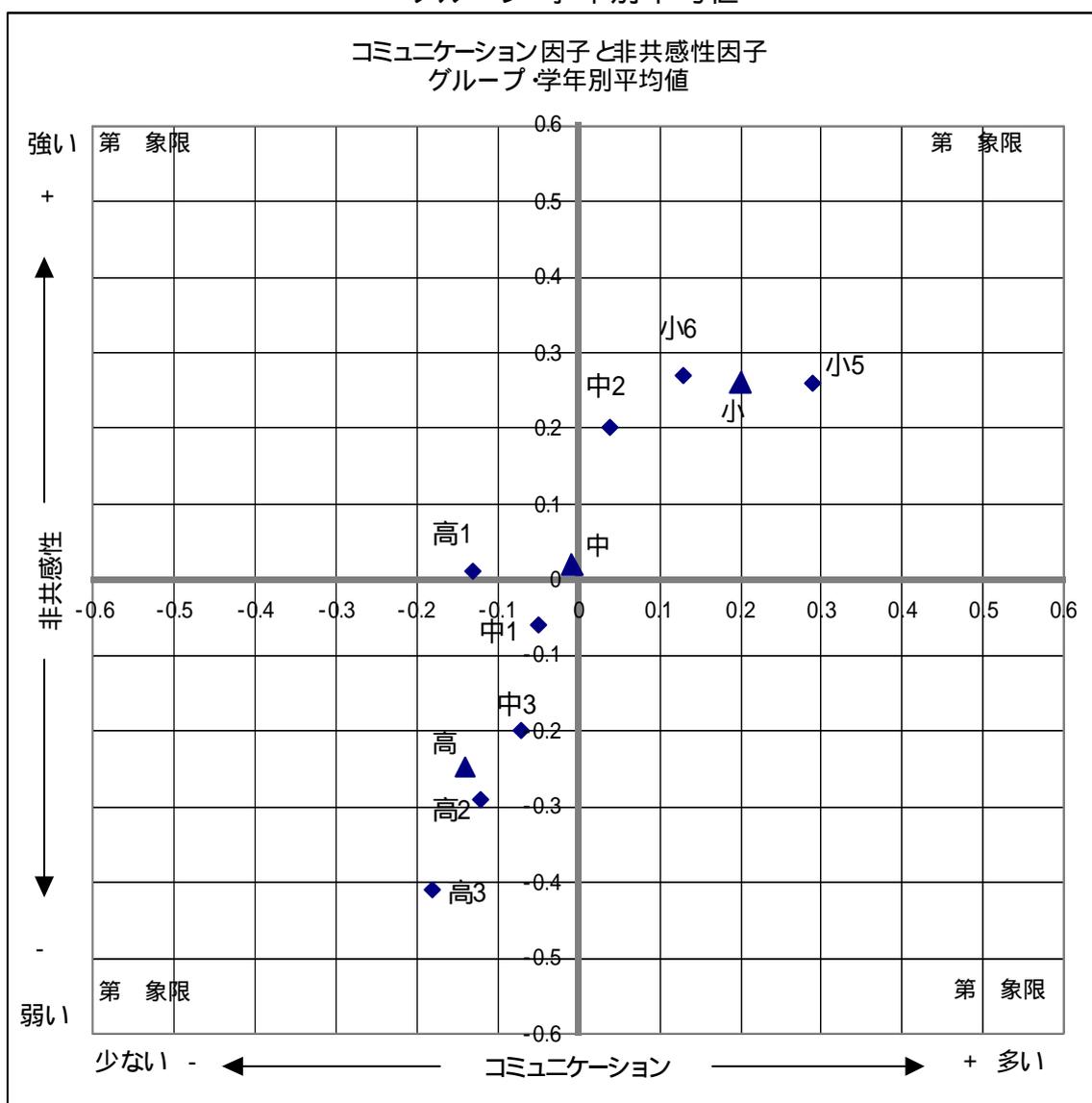
表 6-6-B エリートジュニア・サッカー選手の競技面の因子得点によるグループ間比較

競技面 因子	第1因子 ゲーム予知能力			第2因子 競技エゴイズム			第3因子 チームコミュニケーション		
	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD	度数	平均値	SD
グループ									
小学生	76	0.29	0.85	76	0.02	0.72	76	0.15	0.66
中学生	143	-0.01	0.84	143	0.00	0.95	143	-0.12	0.93
高校生	101	-0.20	0.95	101	-0.01	0.94	101	0.06	0.96
有意差の見られた グループ	小>中* 高**								
競技面 因子	第4因子 競技調和性								
	度数	平均値	SD						
グループ									
小学生	76	0.40	0.93						
中学生	143	-0.10	1.27						
高校生	101	-0.15	1.27						
有意差の見られた グループ	小>中** 高**								

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を表す。<、> は各グループの平均値の違いを示す。

*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ 、***は $p < .001$ で有意差があることを示す。

図 6-2-A 日常面のコミュニケーション因子と日常面の非共感性因子の
グループ・学年別平均値



小 :小学生 (0.20 ,0.27) 小 5 :小学校 5年生 (0.29 ,0.26) 小 6 :小学校 6年生 (0.13 ,0.27)
 中 :中学生 (0.01 ,0.02)
 中 1 :中学校 1年生 (-0.05 ,-0.06) 中 2 :中学校 2年生 (0.04 ,0.20) 中 3 :中学校 3年生 (-0.07 ,-0.20)
 高 :高校生 (0.14 , 0.25)
 高 1 :高校 1年生 (-0.12 ,-0.29) 高 2 :高校 2年生 (-0.18 ,-0.41) 高 3 :高校 3年生 (-0.13 ,0.01)

【因子に含まれる項目の内容】(-)は逆の内容を示す

コミュニケーション : 一体感・家族関係、地域での人間関係・温かい環境、調和的姿勢・家族関係、
 調和的姿勢・温かい環境、素直な態度・家族関係、素直さ、感受性・地域での
 人間関係、調和的姿勢・地域での人間関係、自然への関心や接触・学校生活
 非共感性 : 自己中心的行動・友人関係(-)、素直さ(-)、誠実な行動(-)、自己中心性、
 利己性、共感性(-)、調和的姿勢(-)、共感的行動(-)・友人関係(-)
 共感性(-)・友人関係(-)

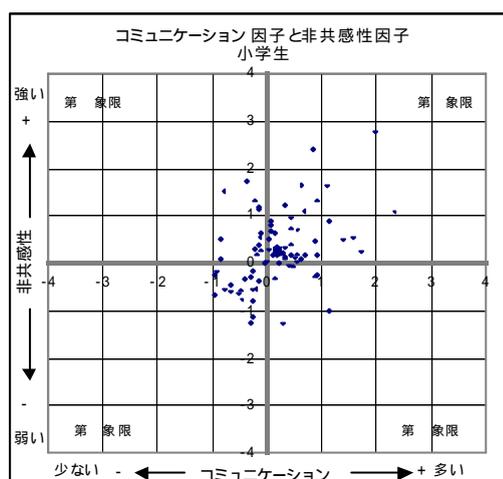


図 6-2-A
日常面のコミュニケーション因子と
日常面の非共感性因子の
小学生における各選手の因子得点

第 象限	41 人 / 81 人中 (50.6%)
第 象限	8 人 / 81 人中 (9.8%)
第 象限	19 人 / 81 人中 (23.4%)
第 象限	13 人 / 81 人中 (16.0%)

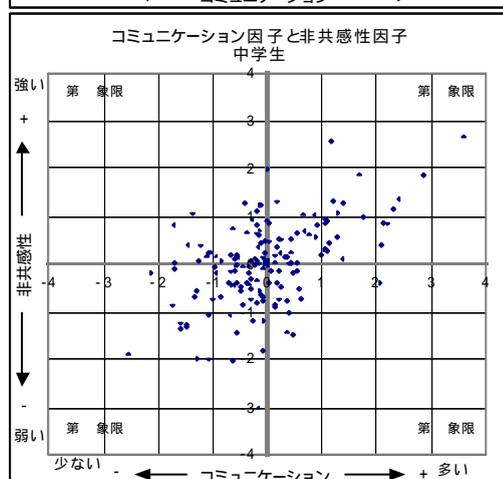


図 6-2-A
日常面のコミュニケーション因子と
日常面の非共感性因子の
中学生における各選手の因子得点

第 象限	48 人 / 154 人中 (31.1%)
第 象限	19 人 / 154 人中 (12.3%)
第 象限	53 人 / 154 人中 (34.4%)
第 象限	36 人 / 154 人中 (23.3%)

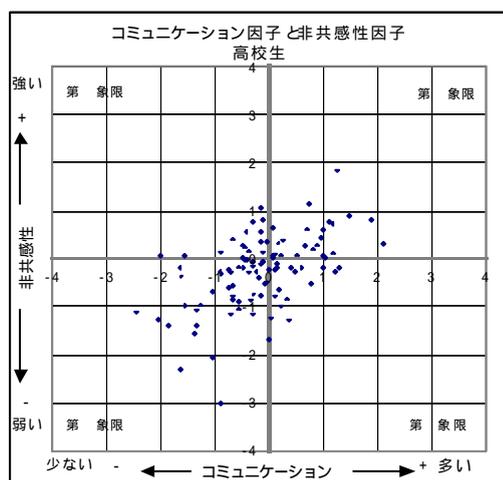


図 6-2-A
日常面のコミュニケーション因子と
日常面の非共感性因子の
高校生における各選手の因子得点

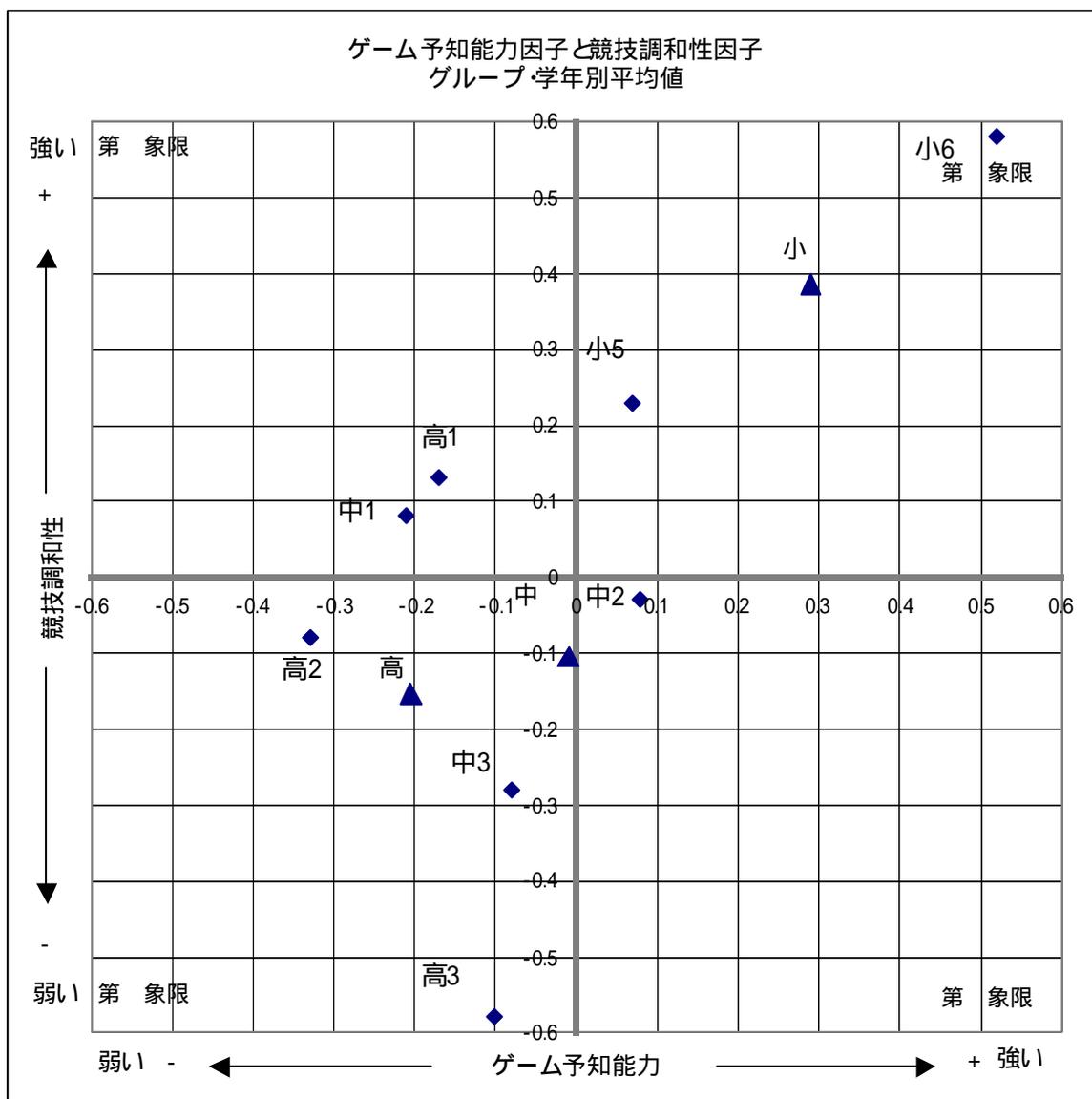
第 象限	24 人 / 102 人中 (23.5%)
第 象限	16 人 / 102 人中 (15.6%)
第 象限	46 人 / 102 人中 (45.0%)
第 象限	16 人 / 102 人中 (15.6%)

【因子に含まれる項目の内容】(-)は逆の内容を示す

コミュニケーション：一体感・家族関係、地域での人間関係・温かい環境、調和的姿勢・家族関係、調和的姿勢・温かい環境、素直な態度・家族関係、素直さ、感受性・地域での人間関係、調和的姿勢・地域での人間関係、自然への関心や接触・学校生活

非共感性：自己中心的行動・友人関係(-)、素直さ(-)、誠実な行動(-)、自己中心性、利己性、共感性(-)、調和的姿勢(-)、共感的行動(-)・友人関係(-)、共感性(-)・友人関係(-)

図 6-2-B 競技面のゲーム予知能力因子と競技面の競技調和性因子の
グループ・学年別平均値



小 :小学生 (0.29 ,0.40) 小5 :小学校 5年生 (0.07 ,0.23) 小6 :小学校 6年生 (0.52 ,0.58)
 中 :中学生 (-0.01 , -0.10)
 中1 :中学校 1年生 (-0.21 ,0.08) 中2 :中学校 2年生 (0.08 , -0.03) 中3 :中学校 3年生 (-0.08 , -0.28)
 高 :高校生 (-0.20 , -0.15)
 高1 :高校 1年生 (-0.17 ,0.13) 高2 :高校 2年生 (-0.33 , -0.08) 高3 :高校 3年生 (-0.10 , -0.58)

【因子に含まれる項目の内容】(-)は逆の内容を示す

ゲーム予知能力 :洞察・状況判断、状況把握、洞察、状況把握、予測、洞察・状況判断・独創的なプレー、状況判断、独創的なプレー、チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係、状況把握・チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係

競技調和性 : チームワーク、成功に対する感受性、調和的姿勢・チームメイトとの関係、競技に対する感受性、指導者との関係、調和的姿勢 (-)・チームメイトとの関係 (-)

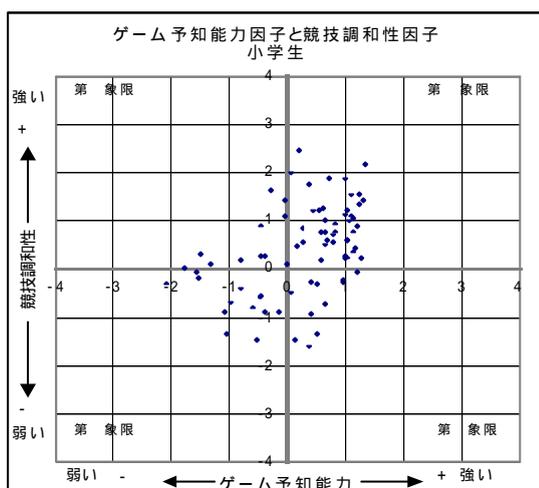


図 6-2-B

競技面のゲーム予知能力因子と
競技面の競技調和性因子の
小学生における各選手の因子得点

第 象限 42 人/ 81 人中 (55.2%)

第 象限 11 人/ 81 人中 (14.4%)

第 象限 13 人/ 81 人中 (17.1%)

第 象限 10 人/ 81 人中 (13.1%)

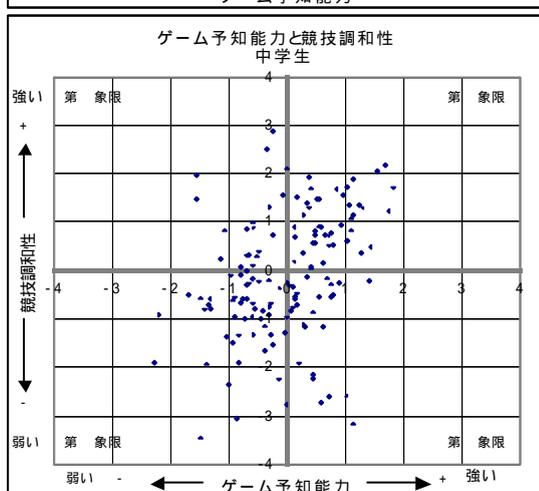


図 6-2-B

競技面のゲーム予知能力因子と
競技面の競技調和性因子の
中学生における各選手の因子得点

第 象限 46 人/ 154 人中 (32.1%)

第 象限 28 人/ 154 人中 (19.5%)

第 象限 51 人/ 154 人中 (35.6%)

第 象限 18 人/ 154 人中 (12.5%)

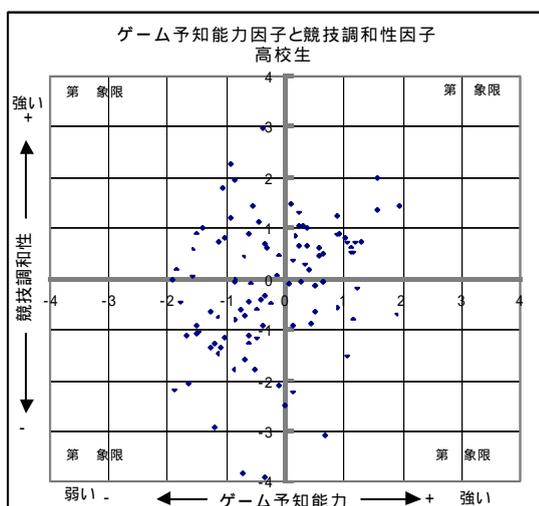


図 6-2-B

競技面のゲーム予知能力因子と
競技面の競技調和性因子の
高校生における各選手の因子得点

第 象限 27 人/ 102 人中 (26.7%)

第 象限 15 人/ 102 人中 (14.8%)

第 象限 39 人/ 102 人中 (38.6%)

第 象限 20 人/ 102 人中 (19.8%)

【因子に含まれる項目の内容】(-)は逆の内容を示す

ゲーム予知能力 : 洞察・状況判断、状況把握、洞察、状況把握、予測、洞察・状況判断・独創的なプレー、状況判断、独創的なプレー、チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係、状況把握・チームメイトとの一体感・チームメイトとの関係

競技調和性 : チームワーク、成功に対する感受性、調和的姿勢・チームメイトとの関係、競技に対する感受性、指導者との関係、調和的姿勢(-)・チームメイトとの関係(-)

図 6-2-B は、X 軸に競技面の“ゲーム予知能力”因子、Y 軸に競技面の“競技調和性”因子をとって、各グループ、各学年の因子得点の平均値をプロットしたものである。第 象限に小学生、第 象限に中学生と高校生が位置している。これは、小学生は、競技面でゲーム予知能力があり、周囲との調和がとれていることを示している。中学生になると、ゲーム予知能力の点でも、調和の点でも傾向は共に弱くなり、高校生では、その傾向がさらに弱まっている。すなわち、競技面では、成長と共に、ゲーム予知能力の点でも、調和の点でも劣っていくことがわかる。

各学年の因子得点の平均値を見てみると、小学生では、5 年生、6 年生共に第 象限に位置しているが、学年が上がるにつれ、ゲーム予知能力、調和、共に傾向が強まっている。中学生では、ゲーム予知能力の点では、1、3 年生ではマイナス方向、2 年生ではプラス方向にふれており、2 年生が最も優れていることになる。競技調和性の点では 1 年生はプラス方向、2、3 年生はマイナス方向にふれており、学年が上がるると共に傾向は弱くなっている。つまり、ゲーム予知能力の点では 2 年生が 1、3 年生より傾向が強く、競技調和性の点では、成長と共に傾向が弱くなっていることがわかる。高校生では、ゲーム予知能力の点では全学年がマイナス方向にふれているが、傾向は 2 年生が最も弱く、3 年生が最も強く見られた。ゲーム予知能力の点では、高校生は全体的に傾向が弱い、3 年生が最も優れていることがわかる。競技調和性の点では、1 年生のみがプラス方向、2、3 年生は共にマイナス方向にふれているが、学年が上がるると共に傾向が弱くなっている。したがって、中高生では、学年が上がるにつれて競技面での調和がとれなくなる、といった特徴が示された。

図 6-2-B 、図 6-2-B 、図 6-2-B は各グループの各選手の因子得点をプロットしたものである。図 6-2-B を見ると、小学生は第 象限において 81 人中 42 人（55.2%）と高い比率で分布していた。第 象限に注目して見ていくと、図 6-2-B の中学生は 154 人中 46 人（32.1%）、図 6-2-B の高校生は 102 人中 27 人（26.7%）と、成長と共に比率が減少している。第 象限に注目すると、

図 6-2-B の小学生では 81 人中 13 人 (17.1%) の比率が、図 6-2-B の中学生では 154 人中 51 人 (35.6%)、図 6-2-B の高校生では 102 人中 39 人 (38.6%) の比率に増え、小学生ではゲーム予知能力、調和、共に良好な状態にあるが、年代が上がるにつれて、競技面でのゲーム予知能力、調和は共に劣っていくことがわかる。

5. 考察

因子分析の結果から、エリートのジュニアサッカー選手は、日常面において感受性が強く周囲とのコミュニケーションがとれているが、非共感的で優柔不断であり、学校では利己的である、といった側面から全体としての特徴を捉えることができる。競技面においては、ゲームの予知能力があり、チーム内でのコミュニケーションや周囲との調和もとれているが、同時にチームワークを乱すような利己的な部分も備えている、といった側面からその特徴を捉えることができる。

次に、尺度得点、素点による各グループ間の特徴の相違について考察を行う。小学生選手は、家庭・学校・地域・チーム、といったすべてにおいて周囲との交流が最も活発で調和がとれており、感受性や共感性、想像力、独創的な表現などに優れていることが明らかになった。日常面・競技面共に、外界と積極的に交感し、情報の交流を最も活発に行っている時期にあるといえる。日常面だけでなく、競技面でも感受性が強いのは、競技を始めて間もない頃の新鮮さや楽しさを感じている側面が素直に示されたと推察できるが、ゲームでの予知能力が最も優れていたことから、競技の場で情報を自然体で受け取っていることがわかる。

高校生選手は、周囲との調和、交流の点では最も劣り、一部の感受性は最も強いが、学校生活や競技面などの点では感受性は弱い。独創的な表現、想像力が乏しい傾向が小学生選手より強く見られたことから、感性という観点から言えば、強い関心を持つような特定の情報には敏感であるものの、その他の情報

の受け取りや、情報を受け取った後の処理、発信・伝達までの情報の流れはやや滞っていると思われる。ただし、競技面での環境については、家庭・チーム共にリラックスした環境にあり、冷静さも養われていたことから、競技面については、環境や自分自身のコントロールがある程度できるようになっている可能性が示唆される。また、中学生選手は、全体として小学生選手から高校生選手への成長過程における移行期の特質が表れていると推測できる（笠井ら，1995）。以上のことをまとめて示すと、表 6-7-A、表 6-7-B のようになる。

表 6-7-A エリートジュニア・サッカー選手の日常面における感性に関わる
心理的要因の特性の変遷

尺度	内容	小	中	高
コミュニケーション			▲	▲
非共感性*		▲	▲	▲
学校利己性*		▲	▲	▲
感受性		▲	▲	▲
項目				
家族	素直さ	▲	▲	▲
	調和	▲	▲	▲
	一体感	▲	▲	▲
学校生活	プラスイメージ・関心	▲	▲	▲
	利己的・自己中心的*	▲	▲	▲
	友人への共感性	▲	▲	▲
	教師との関係	▲	▲	▲
地域	自然との交流	▲	▲	▲
	人との交流	▲	▲	▲
	温かい環境	▲	▲	▲
	想像表現	▲	▲	▲
	感受性	▲	▲	▲

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を示す。

▲ は有意な変化が見られたこと、— は有意な変化が見られなかったことを示す。

*は右肩上がりになるほど望ましくない傾向にあることを示す。

表 6-7-B エリートジュニアサッカー選手の競技面における感性に関わる
行動様式の特徴の変遷

	内容	小	中	高
尺度				
ゲーム予知能力			→	→
チームコミュニケーション			→	→
競技調和性				→
項目				
家族	サポート		→	→
	リラックスできる環境	→	→	→
チーム	調和		→	→
	リラックスできる環境	→	→	→
ゲーム	感受性		→	→
	冷静さ			→
その他	競技以外の刺激	→	→	→

小 = 小学生、中 = 中学生、高 = 高校生を示す。

- 

-  は有意な変化が見られたこと、 は有意な変化が見られなかったことを示す。
 は小学生と中学生、中学生と高校生の間では有意な変化が見られなかったが、小学生と高校生の間では有意な変化が見られたことを示す。

家庭、学校、地域、チームでの調和は小学生選手が最もとれており、成長と共に調和がとれなくなる一方、友人への共感性や美的ものへの感受性、競技面での冷静さ、家族からのプレッシャーの点では、高校生が最も良い状態にあると見られた。小学生選手では、日常面、競技面共に周囲と調和している側面が特徴的に現れていたのが、中学生選手を境に、日常面で利己的・自己中心的側面が表面化し、周囲との調和がしにくくなっていた。さらに、高校生選手では、嗜好興味の対象が一部に限られるようになり、周囲との調和は一層、見られなくなっていた。因子得点のグループ間、学年間比較による、日常面でのコミュニケーション、競技面でのゲーム予知能力や競技調和性の点で、成長と共に劣っていくという結果も含めて検討すると、日常面、競技面共に、感性に関わる心理的要因と行動様式については、小学生選手が最も情報交流が盛んでスムーズな状態にあり、成長と共に周囲との調和がとれにくくなり、情報交流が滞っていくことが明らかになった。したがって、成長と共に感性の働きは鈍くなるといえる。

日常面における周囲との調和やコミュニケーション、共感性は、人間同士の絆を深めたり、社会生活に適應するための条件であり（春木・岩下，1981）、競技面での調和やコミュニケーション、予知能力もまた、競技における理想的な心理状態の条件とされていることから（Loehr，1996；志岐・福林，2001）、成長と共に劣化していくこのような心理的要因を順調に育成することが日常面での問題を未然に防ぎ、なお且つ競技成績も落とさないための対策になると思われる。

心理的要因の育成を阻み、感性の正常な働きを妨げていると考えられる様々な要因として、一つには勉強と競技におけるストレスが考えられる。中高生における学校でのストレスは一般的ではあるものの（岡安，1992）、今回の調査対象者がエリートのジュニアサッカー選手であることから、学校の勉強が難しくなることと並行して競技生活に重点を置く度合いが強くなることが他の方面への関心を弱めたり、競技面では、新鮮さ・楽しさを減少させ、ストレスを増大

させられる。一流選手がバーンアウト症候群に陥る例も見られるように、プロを目指しているエリート選手達にとって、サッカーは趣味などという生易しいものではなく、競技そのものがストレスとして感じられる場合も多い(岸・中込 1990)。このことが、日常面における様々な情報のみならず、本来、関心が強く、敏感であろうはずの競技面における情報に対しても鋭敏さを損なわせると推察される。

競技生活と学校生活に追われ、なかなかリラックスをする機会を得られる状況にない選手達にとって、ストレスがあまりに強い場合、ストレスから逃れたいという本能的欲求が防衛機制として働き、ストレスを感じないですむ心理状況になることが推測される。すなわち、外界に対しては“ストレス”を受けるといふ外圧を遮断しようとし、内界に対してはストレスを「感じる」といふ苦痛を避けようとする防衛反応が起きると考えられる(Freud, 1894; 長尾, 1989)。そのため、結果的に内外界の情報に疎くなり、情報の交流を行う感性という内面の感覚器官はその機能を正常にはたせなくなると考えられる。

思春期は関心が自らの内面に向う時期であり、外界に対して一旦、消極的になることは、誰もが通る成長過程の特徴ではある(平岡, 1989)。また、高校生は、発達段階で考えると第2反抗期にあたり(齋藤, 1993)、小中学生よりも利己的・自己中心的であったり、周囲との調和を苦手としている状況は、むしろ当然と思われる。高校生選手は、小中学生選手よりも長く競技を続け、目標を掲げて一つのことに集中し続けてきたことにより、競技力を向上させるための集中力が身につけている可能性が考えられる一方で、目標を達成させるためには利他性を犠牲にしたり、家庭や学校生活、地域など競技面以外での交流には気が向かなくなることが考えられる。このようなことは、高校生選手がまだ成長過程の途上にあり、自我が未だ拡大しきれていないための特徴と捉えることもできる。このような過程を経て、成人のトップアスリートとして成長するにつれて自我を順調に拡大させることができるならば、高校生におけるこうした特徴は特に問題はないといえるが、この点を自我の発達過程の一つの経過点と

して考えるべきか否かは今後の課題として捉えるべきであろう。

しかし、小学生の段階では正常に機能していたと思われる感性の働きを、特に心理的要因の状況が変化し始める中学生から高校生の移行段階において鈍らせないためには、いかに外圧としてのストレスを軽減させ、また内圧としてのストレスを“感じること”に対する耐性を養うか、といったところが重要なポイントになる。

また、成長と共に、学校生活に無関心になり、消極的になる傾向も見られたが、学校で過ごす時間はむしろ長くなる。そのため、競技生活の忙しさを理由に学校生活から逃避するのではなく、むしろ学校での勉強や人間関係に対しても積極的になるなど、学校生活を充実させることを見直す必要があるだろう。

6. 本章のまとめ

エリートジュニアサッカー選手 356 名を対象として、日常面における感性に関わる心理的要因に関する 90 項目、競技面における感性に関わる行動様式に関する 68 項目から成るアンケート調査を実施し、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の両面におけるグループ間の相違について、統計的手法を用いて解析を行った。その結果、以下のようなことが得られた。

1. エリートジュニアサッカー選手は、日常面において周囲との調和やコミュニケーションがとれており、感受性は強いが共感性に欠け、優柔不断であり、学校では利己的な側面も持っていた。競技面においては、ゲームの予知能力があり、チームでのコミュニケーションもとれ、調和しているが、同時にチームワークを乱す要因となる利己的な側面も持っていた。
2. 日常面と競技面の相関については、日常面のコミュニケーションと競技面の競技調和性、日常面の非共感性と競技面の競技エゴイズムの間で有

意な正の相関が、日常面の学校利己性と競技面の競技調和性の間で有意な負の相関が示された。

- 3 . 成長段階別に見た場合、小学生選手では、家庭・学校・地域・チーム、といった日常生活、競技場面共にすべてにおいて最も周囲との交流が活発で調和がとれ、競技の予知能力にも優れていたが、中学生選手を境に、日常面、競技面共にそれらが鈍化している傾向が見られた。

第7章 本研究の総合考察と結論

1. エリートジュニアサッカー選手の日常面における心理的要因と競技面における行動様式の変遷と関連性について

本研究の目的は、エリートジュニアサッカー選手の日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式の特徴とその変遷を探ることにより、その育成状況を把握し、育成過程における問題点を見つけると共に、日常面と競技面の関連性を探ることで人間性と競技成績との関係やさらにそれらがどのように感性に関連するであろうかということを考察することであった。

第1章において、感性とは「様々な情報を無意識レベルで受け取り、処理し、発信する無意識的な情報処理機能を持ち、その機能を働かせて周囲との交感を行うことにより様々な心理的要因を育成する人間性の基盤であり、調和、一体感をもたらす愛を生み、感動や幸福感、満足感、癒しをもたらす働きをするいわゆる内面の感覚器官にあたる」と一応の概念化を考えた。こうした概念を元に、まず、第2章では小学生サッカー選手と一般の小学生の差異と特徴、第6章では小中高校生選手の特徴をそれぞれ比較し、その相違について分析を行うことにより、ハイレベルの競技スポーツが感性に関わる心理的要因に与える影響について検討した。第3章、第4章、第5章においては、小学生サッカー選手172名、中学生サッカー選手227名、高校生サッカー選手103名を対象として、日常面における心理的要因に関する90項目、競技面における行動様式に関する68項目から成るアンケート調査を実施し、日常面における心理的要因と競技面における行動様式の各々の特徴と両面の関連について探った。

その結果、第2章において、ハイレベルの競技スポーツは、周囲とのコミュニケーションや調和、共感性、外向性といった点で、日常面における心理的要因を増強させる一方、学校生活や自然・美的ものへの感受性を鈍化させている面もあることが明らかになった。

第3章では、Jリーグ・ジュニア・サッカーチームに所属するエリートの小学生サッカー選手の日常面における心理的要因の特徴として、家族を中心として周囲と積極的にコミュニケーションをとり、調和がとれている一方、利己的で学校軽視の傾向が見られた。競技面における行動様式の特徴としては、ゲームでの予知能力があり、チームでの一体感を感じている一方、利己的でチームで緊張状態にあることが明らかになった。また、日常面において周囲と親しく交流しているような調和に関わる側面と競技面におけるゲームの流れやチームに融けこんでいるような側面、日常面における利己性のような不調和に関わる側面と競技面における個人・チームの利己性のような不調和に関わる側面とがそれぞれ関連しており、日常面における心理的要因と競技面における行動様式は調和・不調和の点で一部の関連性が明らかになった。

第4章では、Jリーグ・ジュニア・ユースチーム所属のエリートの中学生サッカー選手の日常面における心理的要因の特徴として、利己的な側面はあるが、想像力や表現力、共感性があり、周囲とコミュニケーションがとれており、一体感を感じていたことが明らかになった。競技面における行動様式の特徴として、日常面と同様に利己的な側面も見られるが、ゲーム予知能力があり、周囲と協調しており一体感を感じていたことが明らかになった。また、周囲とのコミュニケーションや協調性、一体感のような調和、利己性のような不調和の点では、日常面における心理的要因と競技面における行動様式は関連があり、その関連性は小学生選手よりも多いことが明らかになった。中学生サッカー選手の小学生と異なる点は、日常面では想像力や表現力が養われ、チームでは協調的な状態にあることであった。

第5章では、Jリーグ・ユース・チームに所属しているエリートの高校生サッカー選手は、日常面では、気づきを得たり表現力があるなど多感的で周囲と一体感を感じているような調和している側面を備えているものの、利己的で冷淡な側面もあることが明らかになった。競技面では、様々な情報交流をしている側面が見られるものの、消極的で利己的であり、無責任な面もあることが明ら

かになった。また、日常面における家族との触れ合いなどの周囲との調和に関わる側面と競技面における周囲との情報交流のような調和に関わる側面が関連しており、さらに日常面における利己性のような不調和に関わる側面と競技面における自己中心性のような不調和に関わる側面が関連していた。しかし、その関連性は小中学生選手より少なく、情報処理は不活発な傾向にある可能性も見られた。このようなことから、エリートジュニアサッカー選手については、日常面における心理的要因と競技面における行動様式は、周囲との調和・不調和の点で関連しており、感性という観点では、情報交流の活発さや情報処理のスムーズさの点で関連していると考えられた。

第6章では、年代別に比較検討し、小中高校生選手すべてに共通した要因では、日常面において周囲との調和やコミュニケーションがとれており、感受性は強いが共感性に欠け、優柔不断であり、学校では利己的な側面も持っていた。競技面においては、ゲームの予知能力があり、チームでのコミュニケーションもとれ、調和しているが、同時にチームワークを乱す要因となる利己的な側面も持っていた。また、日常面のコミュニケーションと競技面の調和、日常面の非共感性と競技面の利己性、学校での利己性と競技面での不調和が、それぞれ関連しており、周囲との調和・不調和の点で、エリートジュニアサッカー選手の日常面における心理的要因と競技面における行動様式は一部関連していた。

成長段階別では、小学生選手では、家庭・学校・地域・チーム、といった日常面、競技面のすべてにおいて最も周囲との交流が活発で調和がとれ、ゲームでの予知能力にも優れていた。中学生選手、高校生選手では、日常面、競技面共に周囲との交流や調和、想像・表現、ゲーム予知能力が苦手になり、利己的・自己中心的な傾向が強まっていたが、日常面での優柔不断な側面や競技面での利己的な側面については変化が見られなかった。

一方で、第3章の結果から、小学生選手には、学校を軽視している傾向やチームで緊張状態にある側面が、第4章の結果から、中学生選手には日常面、競技面共に、周囲との一体感を感じている側面もあり、交流の幅広さや自分自身

で考えて表現をするような側面が出てきていた。しかしながら、第5章の結果から、高校生選手の日常面には、小中学生選手には見られなかった冷淡な側面が表れており、競技面では、小中学生選手にも見られたエゴイズムのみならず、競技面における消極性や無責任、といった側面が表われていた。このようなことから、感性という点では特に高校生時代に問題が出てきており、中学生から高校生に移行する過程がキーポイントであると考えられる。

第3章～第5章までの調査・検討により、エリートジュニアサッカー選手の日常面における心理的要因と競技面における行動様式の相関では、小中高校生を通じて調和・不調和に関わる点で一定程度見られ、中学生選手が小学生選手、高校生選手よりもやや高い関連性を示した。このことにより、日常面における心理的要因と競技面における行動様式は、成長段階によってその関連度に多少の違いはあるものの、競技において優れた成績を収めるために必要な行動様式と、一人の人間として豊かな人生を送るために欠かせない心理的要因は関連していることが一部示唆された。

第2章～第6章までの結果より、エリートジュニアサッカー選手の日常面における心理的要因と競技面における行動様式は、成長と共に両面において各年代特有の環境要因が絡みながらコミュニケーションがとれにくくなり、利己性が強くなるなど、周囲との調和を中心として問題が出てきていることが明らかになった。したがって、本研究において対象とした小中高校生のエリートジュニアサッカー選手については、競技スポーツを長く続けることによって、感性に関わる心理的要因と行動様式を順調に育成しているとは言い難く、競技スポーツを行う効果が日常生活に生かされているというよりはむしろ、逆に問題を生じさせている可能性が強いと思われた。

2. エリートジュニアサッカー選手の感性と環境要因について

エリートジュニアサッカー選手は、クラブチームに所属する児童である。クラブチームでの競技スポーツ活動は欧米において主流であるものの、国内にお

いては、サッカーをはじめ、水泳や硬式テニスなど数はまだ少ない。しかし、家庭、学校と同様、人間環境の一つとして、家族や学校の仲間、教師以外の人々と出会うクラブチームという環境が、選手の感性に関わる心理的要因に影響を与えることも示唆される。

このようなことを踏まえて、まず小学生選手で日常面と競技面の相関が比較的弱く止まった理由について、考えてみたい。今回の調査対象者となった選手たちは強豪チームの選手であり、選抜試験においては競技能力のみならず、そのチームでやってゆくに相応しい人格的特性を備えているかどうかも見極められた上で入団した子どもである。さらに、チームに入ってから、指導者がチームワークや自立心を意識した教育方針をとっており、競技面での厳しい躰がなされている。しかし、これらはチーム内におけることであり、小学校高学年という年代は、家庭や学校で過ごす時間の方が多く、こうした場では家族や教師の教育に委ねられるため、競技以外の生活については、チームの教育方針と異なる部分も多いと推測される。また、チーム内で心身共に厳しい状況に置かれているため、その反動で競技以外の生活では解放感を得ようとする意識が自然と働き、競技面とはむしろ異なる行動をとっていることも考えられる。

中学生選手になると、小学生選手において家庭中心だった生活が学校中心になり、家族よりも友人とのコミュニケーションが増えるなど行動範囲が広がってくる。岡安ら（1992）によると、近年の中学生は学業や部活動、学校での教師・友人との関係にストレスを感じる事が多く、心理的健康の面で問題が増加している。一方、ハイレベルの中学生サッカー選手の心理については、加藤・石井（1999）が家族とのコミュニケーション、親からの干渉、教師・友人・チームメイトとの人間関係、練習、チームメイトとの競争など、日常面、競技面の両面で受けるストレスの特徴を挙げており、一般の中学生に比べてはるかにストレスが多い状況にあることが窺える。また、Eli（1993）は、中学生サッカー選手は小学生サッカー選手よりも内向的であると報告している。

このようなことから、中学生サッカー選手は、交流する情報は小学生より多

角化してくるものの、心身の両面で大きな変化を遂げるという思春期特有の状況のみならず、時代や社会を反映したストレスや競技面でのストレスを多分に受けていることが考えられる。また、中学生サッカー選手の日常面における心理的要因と競技面における行動様式の関連が小学生より強まった要因としては、情報交流の活発化や、自我に目覚めた心理的に不安的な時期の一時的な傾向と考えることもできる。

高校生のエリートサッカー選手は、小中学生選手よりさらに少数精鋭のチームにいるが、競技に携る時間が小中学生選手より長く、プロ入りを目前にして練習の質も高くなるため、競技面でのプレッシャーが強い。また、一般に、高校生は小中学生に比べ、学校への適応感が高まり、ストレスへの対処能力を機能的に働かせるまでに人間的成長を遂げているというものの(菅・上地,1996) Omotayo (1991)は高校生サッカー選手の、家族や友人、所属する集団との関わりでのストレスが競技パフォーマンスに影響を与えていることを報告している。

このようなことから、高校生選手においては、中学生選手ほど日常面における心理的要因と競技面における行動様式の強い相関は見られなかったが、日常面・競技面共に不調和の傾向が強く見られたのは環境要因によるストレスの多さが一因と考えられる。競技成績が何よりも重視される状況に長く置かれ続けることで、競技力を高めるために競技面での集中力が高められる一方、日常面での集中力が低下することが考えられる。つまり、集中力が競技面に偏り、競技以外の日常生活がおざなりになってしまうことで、日常面と競技面の関連性が弱められると推測される。

エリートジュニアサッカー選手は、小中学生選手よりも高校生選手において利己性が競技面を中心として強く、全体として調和よりも不調和に関わる側面が強い傾向にあったことから、人格発達の点で欠かせない利他性が順調に育成されておらず、自我が拡張方向に向かっていない可能性が考えられる。この理由として、高校生選手はチームに所属する小中学生選手より選抜されて生き残った選手であることから、競技レベルが高くなるにつれて問題が出てくる、と

考えることもできる一方、チームに生き残っている高校生選手は小中学生選手時代に既に高校生選手と同様の心理的要因と行動様式を有していた、という捉え方もできる。いずれにしても、エリートジュニアサッカー選手に見られる感性は、その発揮を妨げられる方向で選手の育成がなされている傾向があり、現状のシステムにはやや問題があると思われる。

Meinel (金子, 1998) は、スポーツにおける感性の育成が、高邁な精神的欲求を目覚めさせることに結びつくことや、感性的な体験能力や判断能力を豊かに伸ばし、かつ深めさせるのに役立つことを指摘している。今回の調査結果では、日常面、競技面共に成長と共に感性に関わる心理的要因と行動様式の働きが鈍化する傾向が見られたが、日常面における心理的要因と競技面における行動様式はある程度関連していることが明らかになったことから、日常面で感性的要因が正常に機能することは競技面においても結果的には同様の状況をもたらすことが示唆された。したがって、競技面における感性に関わる行動様式を良好な状態にするためには、競技面のみならず、日常面における感性に関わる心理的要因を健全に育成することも大切である。このことは言い換えれば、「競技成績と人間性は関係ない」ということではなく、競技成績を向上させるためには人間性を高める努力も重要であるといえる。

3. スポーツの存在意義とスポーツ選手の社会的役割

スポーツ選手の競技成績と人間性については、現実には関連しているケースと関連していないケースの両方がある。しかし、第2～第6章までの調査・分析結果による検討から、感性に関わる心理的要因と行動様式は日常面と競技面で関連していることが明らかになったことから、感性の力の発揮に関わる限りにおいては競技成績と人間性は関連していると考えられる。したがって、競技成績と人間性が関連していないケースとは、感性の力が競技成績に生かされていない場合にあたる。

感性とは、これまで述べてきたように、周囲との交感をしながら無意識的に

情報を発信することで調和、一体感を感じさせる愛を生み、人間の心身を癒し、感動や幸福感、満足感をもたらす働きを持っていると、現段階で著者自身は考えている。したがって、第1章で述べたように、「スタジアムで直接的に、あるいはメディア等を通して世の中に間接的に伝えられる選手達の競技パフォーマンスや、それについて選手達が語る表情や言葉、印象、立ち居振舞い、といったものから自然に発信される力」は人の心身やときには社会全体にも様々な影響を与えるが、その中でも好影響を与えるケースとは、感性の力が関与している場合に限られ、それは記録や勝利といった数値や結果そのものだけではなく、感性を通じて発信される情報がそのような性質を持っているものと思われる。

本来、スポーツは、芸術と同様に、人間の心身を活性化したり、心を豊かにすべきものである。それは、スポーツを行う人の感性の働きによるものと考えられるが、スポーツが芸術と同様、文化の一部であるならば、その存在意義は、スポーツという一つの分野において感性の力を最大限発揮することで人間に癒しや感動、幸福感、満足感といったものをもたらすことにあるといえる。したがって、競技スポーツを行う選手達にとって、自らの記録や勝利といった競技成績を追求することは一つの目標として欠かせないものではあるものの、競技成績を上げるだけでなく、人間の心身を癒し、感動や幸福感、満足感をもたらす情報を発信することにその存在意義があるということになる。したがって、今後、スポーツ界では、競技面における行動様式のみならず日常面における心理的要因も共に優れている選手を育成することが望まれる。

4 . 結論

本研究において、Jリーグ下部組織所属のエリートジュニアサッカー選手 502 名を対象として、日常面における感性に関わる心理的要因と競技面における感性に関わる行動様式についてアンケート調査を実施し、統計的手法を用いて解析を行った。その結果、以下のようなことがまとめられる。

小中学生のエリートサッカー選手は、日常面・競技面共に周囲と積極的に関わり、調和している傾向が強いが、高校生のエリートサッカー選手は、日常面・競技面共に不調和の傾向が強いことが明らかになった。エリートジュニアサッカー選手全体としては、日常面・競技面共に周囲とのコミュニケーションがとれ、感受性が強いものの、優柔不断で非共感的な側面があり、学校やチームでは利己的な面があることが示された。感性という点では、小学生選手では日常面・競技面共に活発に働いていた状況が、中学生選手を境に両面において問題が出てきており、高校生選手では明らかに鈍化していた。

日常面と競技面との関連性は、小中高校生を通じて見られ、エリートジュニアサッカー選手では、競技において良い成績を収めるために必要な行動様式と、一人の人間として豊かな人生を送るために欠かせない心理的要因は一部ではあるが関連していることが示された。したがって、必ずしもエリートジュニアサッカー選手では「競技成績と人間性は関係ない」とは言えないことになる。

上記のように、感性との関連性においては、小学生から高校生サッカー選手に至る共通する傾向は得られなかった。今後、トッププレーヤーへの道につながる高校生から大学生あるいはJリーガー選手の心理特性について調査し、彼らの心理特性を明らかにすると共に高いレベルの競技活動とプレーヤーの感性との関係を分析する必要がある。

参考文献

- 阿江美恵子(1985)チームゲームと集団凝集性 - ゲームによる凝集性の変化 - ,
 体育の科学 , 35 , 2 , 96-99 , 杏林書院
- 青木邦男(1995)スポーツ少年団への団員の過度適応と学校への適応との関係 ,
 体育学研究 , 40 , 5 , 291-303
- 浅川潔司・松岡砂織 (1987) 児童期の共感性に関する発達的研究 , 教育心理学
 研究 , 35 , 3 , 42-51
- Back, K.W. (1972) Beyond Words -The Story of Sensitivity Training and the
 Encounter Movement-, Russell Sage Foundation
- Baumgarten, A. G (1986) Aesthetica , G. Olms
- Best,D. (1999)Relaxation visualization-a mental image of success , Track and field
 coaches review , 72 , 1 , 8-9
- Bredemeier, B.J. , Shields, D.L., Weiss, M.R., & Cooper , B.A.B. (1986) The
 Relationship of Sport Involvement With Children's Moral Reasoning and
 Aggression Tendencies , Journal of Sport Psychology , Human Kinetics , 8 , 304-318
- Cooper , A. (1998) Playing in the zone-exploring the spiritual dimensions of sports ,
 Shambhala
- Cote , J. (1999) The Influence of the Family in the Development of Talent in Sport ,
 The Sport psychologist , 13 , Human Kinetics Publishers,Inc. , 395-417
- 土井利樹 (2000) 体験活動に支えられる豊かな人間性 - 子どもには体験活動が
 必要 - , 青少年問題 , 47 , 8 , 青少年問題研究会 , 4-11
- 江口潤・杉山進・富岡義雄・木幡日出男・中塚義美・加賀秀夫 (1992) タレン
 ト発掘に関する研究 - 少年指導者に対する調査から - , 第12回サッカー医・

科学研究報告書，1-5

- Eli, B.M. (1993) Intellectual achievement responsibility of junior soccer players, *Journal-of-sport-behavior*, 16, 4, 1993, 193-208
- 円田善英, 村本和世・平田大輔 (2000) スポーツ選手の競技力と心理的能力の関係 - レギュラー群と非レギュラー群の比較 - , 日本体育大学体育研究所雑誌, 25, 175-187
- 遠藤優麗・高橋史郎 (1997) いま、なぜ感性教育か, 現代のエスプリ - 感性教育 - , 365, 5, 至文堂
- 大久保康明・坂口哲啓訳, 小倉孝誠編, リュシアン・フェーヴル, Corbin, A. (1997) 感性と歴史, 感性の歴史学, 藤原書店, 37-70
- 藤生光恵, 高野進, 吉川政夫 (2000) スポーツ経験と Emotional Intelligence の関係, 東海大学紀要, 30, 79-83
- 福原淳, 井村陽一, 河野石根, 山田英彦, 竹内敏雄ら著, 竹内敏雄編 (1988) 美学事典, 弘文堂
- 福鎌達夫訳, Cole, L. (1951) 青春期の心理 - 親と教師のために - , 東雲堂
- 船越正康 (1990) 忍耐力・集中力の育成とスポーツ, 教育と医学, 慶應通信, 38, 11, 32-38
- Freud, S. (1894) The neuro : psychoses of defence, Standard Edition, 3, 45-61, Hogarth Press, 1962
- 古畑和孝 (1997) 人間性を育てる教育, 24, 人間性を育てる教育とは (その2) 総括・心の教育をめざして, 教育と医学, 45, 12, 慶應通信, 1162-1168
- 古市英監訳, Singer, R.N. (1990) ベストへの挑戦 - ピークパフォーマンスの理論と実践 - , 同朋舎出版
- Goleman, D. (1995) Emotional Inteligence, A Bantam Book
- 五島祐次郎・松本光弘訳, Malcom, C. (1994) サッカー - コーチングとチームマネジメント - , 晃洋書房

- Gould, D. , Wilson ,C.G. ,Tuffey, S. & Lochbaum ,M.(1993) Stress and the Young Athlete : The Child' s Perspective Pediatric Exercise Science ,5 ,Human Kinetics Publishers,Inc. , 286-297
- 行徳哲男, 芳村思風 (1987) いま、感性は力, 竹井出版
- 萩生田伸子, 繁榊算男 (1996) 順序付きカテゴリカルデータへの因子分析の適用に関するいくつかの注意点, 心理学研究, 67, 1, 1-8
- 萩原惠三 (2000) 最近の非行少年の人格的な特徴, 青少年問題, 47, 7, 財団法人青少年問題研究会, 26-31
- 浜下昌宏 (2001) 虚構としての「感性」, 「感性の場としての倫理的美学, 感性の学」の新たな可能性 - その意義と限界 - , 19-37
- 原田昭 (1998) 感性の定義, 感性評価 2, 筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集, 41-47
- 原田 (2000) 感性的認識と論理的認識, 感性評価 4, 筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集, 55-61
- 春木豊, 岩下豊彦 (1981) 共感の心理学 - 人間関係の基礎 - , 川島書店
- 蓮見孝 (1998) 感性的思考の特性, 感性評価 2, 筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集, 61-64
- 平岡恭一, 加藤啓, 神田信彦著, 水口禮治, 竹内照宗編 (1989) 青年期までの発達心理学, プレーン出版
- Hoffman , M.L. , Eisenberg-berg , N. (Ed) (1982) Development of prosocial motivation:Empathy and guilt ,In The development of prosocial behavior ,Academic Press.
- 五十嵐浩也, 岡崎章, 前山祥一, 原田昭 (1999) ロボットのインタフェースにおける感性要素, 感性評価 3, 筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジ

- エクト研究組織研究報告集，267-286
- 五十嵐浩也（2000）感性と感性評価に関する考察，感性評価4，筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集，71-76
- 今中国泰（1998）運動短期記憶における位置 - 距離相互干渉と意識的 - 無意識的処理 - ，スポーツ心理学研究，25，1，40-53
- 猪俣公宏ら（1996）競技における心理的コンディション診断テストの標準化，平成6，7年度文部省科学研究費 - 一般研究B - 研究成果報告書 - ，1-47
- 石山昭夫（1995）スポーツ少年団の現状と課題 - 子ども・地域・スポーツ <特集> - ，月刊社会教育，国土社，17-22
- 磯貝浩久，徳永幹雄，橋本公雄，高柳茂美（1993）サッカー選手の心理的競技能力に関する研究，第13回サッカー医・科学研究会報告書，115-118
- 岩井勇児編（1982）小学生の心理と教育，福村出版
- 岩城見一（2001）感性論 - エステティックス - ，昭和堂
- 岩瀬毅信，井形高明，柏口新二（1996）スポーツ少年団の整形外科的メディカルチェック，臨床スポーツ医学，13，10，文光堂，1081-1085
- 菅徹，上地安昭（1996）高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察，カウンセリング研究，29，3，197-207
- Knapp, M. L.(1980)The Ability to Send and Receive Nonverbal Signals, Essentials of Nonverbal Communication Holt , Rinehart and Winston
- 金山政英訳，Martin,P. ，カンドウ, S.（1952）スポーツ人間学，新体育社
- 金子明友編訳，吉田茂論考，Meinel , K.（1998）動きの感性学（Asthetik der Bewegung），大修館書店
- 笠原敏雄訳，Inglis , B.（1994）トランス - 心の神秘を探る - （Trance-a natural history of altered states of mind- ），春秋社
- 笠井孝久，村松健司，保坂亨，三浦香苗（1995）小学生・中学生の無気力感とその関連要因，教育心理学研究，43，4，71-82
- 片岡徳雄（1997）子どもの感性を育む，NHK ブックス

- 加藤俊一（2000）感性の工学的モデル化と感性情報システムへの応用，感性評価 4 ,筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集，105-121
- 加藤隆勝，高木秀明（1980）青年期における情緒的共感性の特質，筑波大学心理学研究，2，33-42
- 加藤久，石井源信（1999）中学生サッカー選手の日常・競技ストレスに関する研究，スポーツ心理学研究，26，1，29-45
- 加藤隆勝著，斎藤耕二編（1985）高校生の心理，有斐閣
- 木下芳子，岩井勇児，子安増生，佐藤勝利，鈴木眞雄，山下恒男（1982）小学生の心理と教育，福村出版
- 岸順治，中込四郎（1990）ゆがめられたスポーツ選手のこころ - 燃え尽きてしまふスポーツ選手 - ，教育と医学，慶應通信，38，11，59-64
- 北村陽英（1991）中学生の精神保健，日本評論社
- 小林宏（1990）直感から直観へ - 直観力入門 - 感性をゆたかに強くする，産能大学出版部
- 児玉昌久，峰岸学（1993）スポーツにおけるリラクセーション，現代のエスプリ，311，至文堂，166-178
- 小島律子（1991）感性を育むには，教育と医学，39，2，慶應通信，75-80
- Loehr, J.E.（1987）Mental toughness training for sports
- 古在良重，島田豊，松宮龍起（1974）芸術・スポーツと人間，新日本出版社
- 工藤孝幾（1994）サッカーゲームにおける認知 - 子どもの場合 - ，体育の科学，44，12，989-993
- 久世俊雄（1982）高校生の心理と教育，福村出版，11-30

- 桑子敏雄 (2001) 感性の哲学 ,NHK ブックス
- Lee , S . & Hrada , A. (2000) Pleasure with Products : Design based on Kansei , 感性評価 4 ,筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集 , 77-86
- 増山英太郎 (1989) 感性はどうしたら磨けるか , ごま書房 , 60-62
- 増山英太郎 (1991) ゆたかな感性を育もう , 児童心理 , 45 , 6 , 金子書房 , 19-26
- 松田岩男ら (1969) 児童の体格・運動-能力・性格の関係について - 発育追跡研究の資料分析 - , 昭和 44 年度日本体育協会スポーツ科学研究報告 No.
- 松田岩男 , 猪俣公宏 , 落合優 , 加賀秀夫 , 下山剛 , 杉原隆 , 藤田厚 , 伊藤静夫 (1981) スポーツ選手の心理的適性に関する研究 - 第 3 報 - , 昭和 56 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No.
- 松井秀治ら (1989) コーチのためのトレーニング科学 , 大修館書店
- 松嶋隆二 (2000) 視覚と身体感覚 . 「感性の学」の新たな可能性 - その意義と限界 , 平成 10-12 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (A)] 研究成果報告書 , 103-115
- 村上隆著、繁榎算男・柳井晴夫・森敏昭編著 (1999) Q & A で知る統計データ解析 , サイエンス社
- Meyers ,A.W. & Whelan ,J.P.(1998)Systemic model for understanding psychological influences in overtraining , Overtraining in sport , 335-369
- 宮脇理 (1988) 感性による教育 - 学校教育の再生 - , 国土社
- 望月登美子 (1985) エステティカ - やさしい美学 - , 文化出版局
- Morris, T. (2000) Psychological characteristics and talent identification in soccer , Journal of Sports Sociences , 18 , 715-726
- 村瀬孝雄 (1996) 中学生の心とからだ - 思春期の危機をさぐる - , 岩波書店

- Murphy, M. & White, R. A. (1978) *The psychic side of sports*, Addison-Wesley
- 中込四郎(2000)スポーツが育てる協調性, 児童心理, 54, 5, 金子書房, 493-496
- 中西公一郎(1999)防衛機制の概念と測定, 心理学評論, 42, 3, 261-271
- 中塚義実, 江口潤, 木幡日出男, 杉山進, 高橋義雄, 富岡義雄, 西嶋尚彦(1998)
タレント発掘の観点からみたサッカー環境とは, 第18回サッカー医・科学研
究会報告書, 85-89
- 長尾博(1989)青年期の自我発達上の危機状態と防衛機制との関係 - ECS と DMI
を用いて -, カウンセリング研究, 22, 1・2, 1-18
- 長田雅喜(1985)中学生の心理と教育, 福村出版
- 新村出編(1991)広辞苑, 岩波書店
- 西田正秋(1992)人体美学上巻, 現代社
- 齋藤誠一, 落合良行, 伊藤裕子(1993)青年の心理学, 有斐閣
- Ogilvie, B. C. & Tutko, T. A. (1985) *Sport : If You Want to Build Character, Try
Something Else*, *Sport and Higher Education*, *Humman Kietics*, 267-273
- 大橋二郎(1991)サッカーにおけるトップアスリートの技術を支えるもの, 体
育の科学, 41, 2, 269-273
- 岡崎章(1998)感性のニューテクノロジーと遊び, 感性評価2, 筑波大学感性
評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集, 69-73
- 岡本夏木ら, 大田堯ら編(1981)岩波講座, 子どもの発達と教育 4 幼年期発達
段階と教育 1, 岩波書店
- 岡安孝弘(1992)中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係,
心理学研究, 63, 5, 310-318
- Omotayo, O.O. (1991) *Nigeria junior soccer players' perception of significant other
stressors*, *Asian-journal-of-physical-education*, 14, 2, 65-71

- 大西祝，西周編（1989）大西祝篇，明治藝術・文學論集，筑摩書房
- 太田鉄夫（1990）身体意識とスポーツ，体育の科学，40，4，杏林書院，256-260
- 齋藤誠一，落合良行，伊藤裕子（1993）青年の心理学，有斐閣
- 坂出照憲（1995）スポーツ技能の心理的基礎，C級コーチ教本〔共通〕，日本体育協会，75-90
- Salk, J. & Anshen, R.N.(1982)Anatomy of Reality -Merging of Intuition and Reason- ,
Columbia University
- 佐藤修策（1990）感じやすい子ども，児童心理，44，11，11-17
- 関矢寛史（2000）予測のメカニズム - 情報处理的アプローチと生態学的アプローチ - ，体育の科学，50，12，杏林書院，942-946
- 芝祐順，南風原朝和（1990）行動科学における統計解析法，東京大学出版会，167-198
- 柴田吉彦（2001）いま、なぜメディア規制か - 青少年社会環境基本法を中心に（特集メディア・ITと子どもたち - メディア・IT政策と子どもたち），人間と教育，30，労働旬報社，51-57
- 志岐幸子ら著，岩崎忠夫，渡辺貴介，森野美德編（1996）地域の活性化に資するスポーツ - スポーツキャスターとしての視点から - ，シリーズ地域の活力と魅力1 躍動スポーツと町おこし，ぎょうせい，35-47
- 志岐幸子（1999）感性の力（4）心のキャッチボール，Quality Nursing，5，4，文光堂，62-66
- 志岐幸子，加藤久，福林徹（1999）日本のトップレベルのスポーツ選手の感性 - インタビュー調査を元に - ，スポーツ産業学会第8回大会号，65-68
- 志岐幸子，広瀬統一，福林徹（2000）トップアスリートの感性がスポーツ産業に与える影響，スポーツ産業学会第9回大会号，31-34
- 志岐幸子，福林徹（2001）トップアスリートに起きるいわゆる「不思議な体験」

- ベストパフォーマンス遂行時の状況から - , 感性工学研究 , 1 , 2, 37-46
- 志岐幸子 , 相馬一郎 (2001) スポーツが子どもの心理的要因に与える影響について - 一般の子どもとサッカー少年の比較検討から - , ヒューマンサイエンス・リサーチ , 10 , 95-108
- 志岐幸子 , 加藤清忠 (2002) 「感性」に関する一考察 - 感性研究へのアプローチ - , 姿かたち研究 , 4 , 27-41
- 島村抱月 , 西周編 (1989) 島村抱月篇 , 明治藝術・文學論集 , 筑摩書房
- 尚学図書編 (1982) 日本国語大辞典 , 小学館
- Smoll , F.L . PhD & Smith , R.E . PhD (1990) Psychology of the Young Athlete-Stress-Related Maladies and Remedial Approaches- . Pediatric Clinics of North America , 37 , 5 , Sports Medicine , 1021-1046
- 白山正人 (1988) 精神医学 , 心身医学からみたスポーツ , 臨床スポーツ医学 , 11 , 文光堂 , 1205-1211
- 白山正人 (1990) 精神面から見たオーバートレーニング , 臨床スポーツ医学 , 文光堂 , 7 , 5 , 543-547
- 相馬一郎 (1993) 児童の小学校環境の認知に関する研究 , ヒューマンサイエンスリサーチ , 6 , 1 , 23-38
- 杉本信・杉原隆 (1994) 有能感を高めるよう配慮されたジョギングが自己概念の変容に及ぼす影響 , スポーツ心理学研究 , 21 , 1 , 14-22
- 高橋義雄・山口昌永・山下則之 (1999) 子どもをサッカー・スクールに通わせる保護者は J クラブに何を期待するのか ? , 第 19 回サッカー医・科学研究 , 180-183
- 高沢晴夫 (1998) 思春期のスポーツ傷害 , 保健の科学 , 40 , 9 , 日本体育学会 , 728-733

- 竹中晃二 (2000) 運動・スポーツとメンタルヘルス, 臨床スポーツ医学, 17, 3, 文光堂, 277-280
- 竹内照宗, 水口禮治, 平岡恭一, 加藤啓, 神田信彦 (1989) 青年期までの発達心理学, プレーン出版
- 託摩武俊・安香宏 (1987) 中学生の心理, 有斐閣図書
- 丹羽劭昭 (1990) 社会性の発達と遊びやスポーツ, 教育と医学, 慶應通信, 38, 11, 39-45
- 鄭載旭, 原田昭 (1999) 聴覚イメージ空間の抽出とその物理的特徴に関する研究, 感性評価 3, 筑波大学感性評価構造モデル構築特別プロジェクト研究組織研究報告集, 243-253
- 辻岡美延, 山本吉廣 (1976) 親子関係診断尺度 EICA 検査用紙および手引き, 日本心理テスト研究所
- 徳永幹雄 (1981) 運動経験と発育・発達に関する縦断的研究, 健康科学, 3, 3-14
- 徳永幹雄 (1995) トップレベルのチーム・マネジメント.A 級コーチ教本 [後期用], 日本体育協会, 79-83
- 徳永幹雄, 橋本公雄, 高柳茂美 (1995) スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす影響, 健康科学, 17, 59-68
- 上田吉一 (1999) 人間の完成マズロー心理学研究, 誠信書房
- 宇井美智子 (1988) 感性の道ドーパミン道路を, 道路, 567, 60-62
- Wankel, L.M. & Berger, B.G. (1990) The Psychological and Social Benefits of Sport and Physical Activity, Journal of Leisure Research, 22, 2, National Recreation and Park Association, 167-182
- 渡部洋 (1988) 心理・教育のための多変量解析入門 - 基礎編 -, 福村出版, 43-56

山木朝彦，宮脇理，山口善雄（1993）＜感性による教育＞の潮流 - 教育パラダイムの転換 - ，国土社

山田勝彦（1987）スポーツ少年団活動が児童の心理的発達に及ぼす影響 - 小学生サッカーに関して - ，鳴門教育大学大学院修士論文

山本清洋（1988）子どもとスポーツ，三考堂

柳井晴夫，繁榘算男，森敏昭（1999）Q & A で知る統計データ解析-DOs and DON'Ts-，サイエンス社，126

吉田博子ら著，藤永保監修（1990）人間発達の心理学，サイエンス社，211-213

吉田辰雄（1990）児童期・青年期の心理と生活，日本文化科学社

あとがき

本研究は、エリートジュニアサッカー選手の心理特性について調査・分析を行いつつ、スポーツから感性研究へのアプローチを試みています。「21世紀は感性の時代」と言われ、「感性」という言葉はあらゆるところで、あらゆる使われ方をしているのが現状です。著者は、視聴率を最優先に、競技成績の優れた選手を中心に伝えるスポーツメディアの世界に関わってきた中で、五感にとって刺激的な情報を追求する一方で感性が軽視されていること、トップアスリートやメディアで働く人々の感性から発信される情報が人間の心身や社会に与える影響の大きさを痛感しました。感性という点では問題があっても五感の点で刺激的な情報は素晴らしいものとして社会に伝える、といったことがあり、感性レベルでの社会に与える影響力が理解されていないと思われ、その一因はメディアにおける「感性」に対する認識が曖昧であることと考えました。このような経緯で、「感性」とその仕組みや働き、影響力を理論的に理解し、普及する必要性を感じたことが本研究に取り組む契機となりました。

こうした著者の考えに耳を傾け、著者が研究したいと思っていたことを「感性」という言葉を用いて適切に表現して下さい、感性研究への門戸を開いて下さったのが、最初の指導教授である早稲田大学大学院人間科学研究科名誉教授の相馬一郎先生でした。相馬先生には、あらゆる分野で必要とされたいながら学問領域としては未踏の分野である「感性」研究へのアプローチを、本研究科で行う意義を御理解下さり、未熟な著者を辛抱強く見守り、御退官後も再三、御指導を賜りました御厚情に心より感謝申し上げます。

本研究では、テーマ上、スポーツ以外の様々な分野の文献にも当たる必要がありました。相馬先生の御退官度、研究指導を引き継いで下さった早稲田大学大学院人間科学研究科教授の加藤清忠先生が学生時代、トップアスリートとして競技に取り組まれていた一方、美術を御専門とされていたことは、この研究に取り組む著者にとっては非常に幸運なことでした。加藤先生には、早稲田大学感性文化研究所を主宰されている文学部助教授の酒井紀幸先生を御紹介頂くなど、スポーツのみならず、あらゆる視点から感性について考えることを教えて頂きましたが、研究室を移動してきた著者に快適な環境を提供して下さい温かいお心遣いにも心から感謝申し上げます。酒井先生には、「感性」に関する情報収集に御尽力頂いたり、著者の研

究を発表する機会を与えて頂くなど、大変お世話になりました。また、本論文の副審査員として御指導頂きました早稲田大学大学院人間科学研究科教授の春木豊先生は、本研究に取り組んだ著者の意図を御理解下さり、本論文へのアドバイスのみならず、著者の仮説をより適切に表現するための御助言と今後の励みとなる温かいお言葉を下さいました。

本研究では、ジュニア、成人共に、多数のトップアスリートの方々に御協力を頂きました。スポーツ界における本研究の意義と可能性を御理解下さり、関係者・選手の皆様に率先して御協力を依頼して下さったのが、東京大学大学院総合文化研究科教授の福林徹先生でした。福林先生には、学部時代から今日に至るまで、様々な面で大変お世話になりました。サッカーを中心に様々な競技のトップアスリートの心身ケアにあたられていた福林先生には、競技面の調査項目やエリートジュニアサッカー選手の心理面についてのアドバイスのみならず、拙い著者の仮説にも忍耐強く耳を傾け、文章化するための多大な御尽力を頂きました。また、教育心理と統計学を御専門とされている東京大学大学院教育学研究科長の渡部洋先生を御紹介頂き、御助言を頂く機会を得ることができました。さらに、渡部先生には、愛弟子である大学入試センター開発部の石井秀宗先生を御紹介頂き、石井先生より、本研究結果の最適な分析方法を中心とした統計の手法について、懇切丁寧に御指導頂くチャンスに恵まれました。東京大学の先生方にも、衷心より感謝申し上げます。

スポーツ選手の心理特性については、福林先生より御紹介頂きました東京工業大学大学院社会理工学研究科教授の石井源信先生にも貴重なお時間を何度も割いて頂き、適切なアドバイスを頂きました。競技面の調査項目については、早稲田大学人間科学部講師の堀野博幸先生、東亜大学講師の大森一伸先生にも御助言を頂きました。また、理化学研究所脳化学総合センターの松本元先生、早稲田大学人間科学部助教授の岡田純一先生、日本感性工学会の諸先生方には貴重な資料とアドバイスを頂き、御厚情に感謝致します。

調査の実施にあたり、御協力頂きました日本テーパーボール協会副理事長の荒川博氏、日本サッカー協会登録・普及部の加藤秀樹氏、神奈川県サッカー協会副理事長の野地芳雄氏、東京大学大学院総合文化研究科博士課程の広瀬統一さん、実業団、プロ各チームの関係者・選手の皆様、トップアスリートの皆様、スポーツ界以外の様々な分野で御活躍されている皆様には、この場をお借りして深く感謝の意を表したいと思います。エリートジュニアサッカー選手の皆さま

んには、練習前後の貴重な時間を割いて御協力頂いたこと、指導者・スタッフの方々には、調査結果を踏まえ、現場の貴重な御意見・御指導を頂く機会を設けて頂いたこと、トップアスリートの皆様には、公表していない貴重な体験までも時間をかけてお話し頂いたこと、誠に感謝の意に絶えません。皆様の御協力なくして、本研究は成立し得なかったことは言うまでもありませんが、皆様のお話を通して、非常に重要なことを掴むことができ、また、勇気づけられたこともありました。

なお、トップアスリートのインタビュー調査につきましては、早稲田大学人間科学部教授の佐々木秀幸先生、日比野弘先生、吉村正先生、助教授の土屋純先生にも大変お世話になりました。佐々木先生には、世界のトップアスリートや、スポーツ界で様々な役割を担っている方々の感性に直に触れられる貴重な機会を度々与えて頂いたり、日本オリンピック委員会 21 世紀対策室長の高橋勝馬氏を御紹介頂き、トップアスリートの現状等について御講義頂く機会に恵まれました。学部時代からあらゆる面で助けて下さった佐々木先生、学部時代からの恩師である吉備国際大学学長の窪田登先生、早稲田大学大学院人間科学研究科教授の比企静雄先生、人間科学部教授の宮内孝知先生、人間科学部助教授でいらっしゃった加藤久先生をはじめ、いつも温かく見守り、励まし続けて下さいました早稲田大学人間科学部の諸先生方の御厚情に深謝申し上げます。ここではお世話になりました先生方のお名前のすべてを挙げることができませんが、通算 12 年を過ごした早稲田大学人間科学部のキャンパスでは、廊下や学バスで出会った先生方が励まして下さったり、議論にお付き合い下さったりしたこと、事務所や健康管理センターの方々、生協の方々が温かいお声をかけて下さったことで、どれほど救われたかしれません。図書館の方々にも大変お世話になりました。冬の寒さの厳しい所沢で、この上なく温かい人間環境はエネルギーを、色彩豊かな自然は閃きを与えてくれました。時間が経つのを忘れてしまうようなアットホームな雰囲気、「感性」を刺激するにも最高の環境であった、早稲田大学所沢キャンパスで研究生活を送ることができたこと、また福林先生のお取り計らいで東京大学駒沢キャンパスにも通わせて頂いたことに感謝し、誇りに思うと共に、つくづく著者は恵まれていたとの感を強くしております。昨年末に亡くなった早稲田大学人間科学部名誉教授の西大立目永先生には本論文完成を目前にしながら御報告が間に合わなかったことが残念でありませんが、これまで、たくさんの方々に御指導・御支援を頂きまして、お蔭様でようや

くここまで辿り着くことができました。諸先生方には、未熟な著者を最後まで投げ出さずに陰になり日なたになり、忍耐強く導き、支えて下さったことに、心より感謝申し上げます。

また、白鷗女子短期大学の平田乃美先生をはじめ、以前、早稲田大学人間科学部の心理学系の助手をされており、現在は各大学で講師として御活躍の諸先生方にはいつも助けて頂き、本当にお世話になりました。その他、土浦日大高校教員の瀧間久俊先生、本学部助手の矢澤誠先生や柳谷登志雄先生、長谷川伸先生、著者が在籍していた相馬研と加藤研の院生の皆さん、励ましてくれた友人達、祖母にもお世話になりました。両親にはたくさんの苦勞と心配をかけましたが、「有難う」という気持ちで一杯です。これまで、支えて下さったすべての方々、本当に、有難うございました。

体育会系の後輩達の明るさ、無邪気さに、随分、元気づけられたことは言うまでもありませんが、皆さんのお蔭でスポーツの本来の素晴らしさを改めて感じることができました。常に、心を和ませるジョークと笑顔の絶えなかったこの場所で、あれほど待ち遠しかった卒業が残念に思えるくらいの離れがたい温もりに包まれながら、この文章を締めくくることができる幸福にも心から感謝しています。

著者が博士課程の前半を健康科学領域の環境心理学研究室で、後半をスポーツ科学領域の身体形態学研究室で学んだことは、「感性」に挑む際に避けては通れない、人間の内面の奥深くを追求すること、そして人間の内面性が身体活動を通して外界に及ぼす影響について再認識することを可能にしてくれました。学部時代から今日に至るまで、文系、理系を問わず、様々な研究室にお世話になりましたことは、幅広い視点が要求される感性研究にアプローチしていた著者にとって、非常にプラスの経験となりました。

本研究において明らかになったことは、スポーツという一つの分野に限られたことではなく、他のあらゆる分野にあてはまる可能性が考えられると思います。本論文の冒頭で述べたように、現在の社会が抱えている様々な問題への危機感から、近年、様々な分野において感性へのアプローチがなされていますが、その性質上、感性のすべてを五感で認識できる形で立証することは非常に困難であり、感性研究においては誰もが従来の科学や各々の学問領域の限界を感じているといえるでしょう。しかしながら、21世紀が感性の時代と言われる所以や、感性研究に期待されるところを改めて考えてみますと、これまでの科学技術万能の社会、いわば五感レベル

の情報を中心とした社会の仕組みに誰もが壁を感じ、疑問を持ち出したことです。したがって、感性研究にアプローチする際には、ある時点においては数値化・図式化できない要素についても、従来の科学の価値観で即座に排除してしまうのではなく、感性研究そのものが客観化することの難しい分野であることを認識しながら、忍耐強く客観化する努力を続けていくことが求められると思います。あらゆる分野の要素を調和し、融合させることで初めて感性研究は意味を持ち、各分野の長所をうまく生かした研究によって感性の仕組みや働きが誰にでも理解されるような理論が社会に認知されることが、必要とされています。感性研究が進み、感性の働きやその力が人間や社会に与える影響への理解が深まれば、人間の心身の苦痛が癒される可能性が広がり、閉塞感に苛まれている現在の社会を変える鍵にもなると考えられます。

「感性」に携わる人間の一人として、お世話になりました皆様への御恩返しの意味もこめて、本論文の完成を社会に貢献してゆくためのスタートとし、今後は本研究で得られた成果をさらに発展させてゆきたいと思います。

2003年1月15日 早稲田大学人間科学部加藤研実験室にて 志岐幸子